

きつこ母に代作して貰ふのであらう云ふ噂があつた。或時母が丹波の方へ夫と俱に下つた留守中に、宮中に歌合があつた。小式部内侍もそれに加はつたが、中納言定頼云ふ人が、小式部内侍に向つて、「歌はもう作れましたか。それとも丹波へ使を遣はされましたか。」と言つて、丹波にゐる母に代作を頼んだであらうと言はぬばかりに、「使はまだ歸つて来ませんか、御心配でせう。」と戯れに、小式部内侍をひやかしたので、小式部内侍は心の中で、大層腹を立てたが、顔には、そのやうな色を見せず右の歌を詠んだ。大江山は丹波の口にあり、生野は丹波の奥にあり、共に天橋立へ行く方向である。大江山や生野は遠いから、母から文も来ないし、自分も橋立を踏んだことがありませんと、すぐ歌で、定頼に答へたので、定頼も他の人も小式部の歌の上手なのに感じたが、さてこそ、母に代作して貰つてゐる云ふ疑も晴れたのであつた。

男子では藤原行成・藤原公任・藤原齊信・源俊賢の四人が一條天皇の頃に最も才名があつたが、皆納言の役を勤めてゐたので四納言と言はれた。公任は和漢朗詠集を編じた。道

長が或時朝臣を招いて洛西(京都の西)の大堰川に遊宴し、詩・歌及び管絃の三舟を浮べて各その道の達人を載せた事があつた。その折に道長は公任に「御身は多藝な人だ。その船に乗られか。」と問うた時、「何れでもよろしい。」と答へたので、世人は三船の才である賞讃した。公任は和歌の船に乗つて、

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき。

と詠じたので、皆ほめた云ふ。歴史の本では前記の榮華物語の外に、大鏡・今昔物語などが名高い。

美術工藝も支那の模倣から離れて我が國固有な優雅な特色を發揮した。書も漸次に日本化して、所謂和様となつた。當時小野道風・藤原行成・藤原佐理は三蹟と稱せられた。道風の蛙の話は世に名高い話である。佐理が太宰大貳となり、任が果て、京へ上つた時、伊豫(愛媛)の海岸で泊つたが、風が吹荒れて波が立騒ぐので船を出せない。少しをさまつて出ようとするごまた同じやうに荒れる。かうして數日を経たが、或夜三島神社の神様がお現れになつて、

「此の日頃の荒れは自らの仕業である。すべての社に額がかゝつてゐるのに、我が社のみ無いのは大いに口惜しいから是非こも掛けたいが、他の人の書いたのではつまらないから、汝に書かせたく思つてかくは止め申したのである。」こ宣はせられた。佐理は夢の中にも「かしまりました。」こ申すこおほえて眼がさめた。さて風が治まり海上もなぎ渡つたので岸に上り、齋戒して神の御前で立派に書いて奉つた。これから佐理の名は益々あがつた。畫には早く百濟河成が出て名をあけた。或時人に頼んで自分の從者を探させたが、その人は從者の顔を知らないこ云ふので、卽座に從者の容貌をゑがいて渡したら、すぐ探しえたこ云ふこである。飛驒工匠こ妙技を鬭した話も有名である。或時工匠が河成に「今度私の家に一間四方の堂を建てましたから、来て繪を書いて下さいませんか。」こ言つた。行つて見るこ小さいながら立派な堂がある。四面の戸が皆あいてゐた。縁へ上つて南の戸から入らうこするこ、その戸は閉ぢてしまつた。驚いて西へ廻るこ、その戸も閉ぢて南の戸があいた。北へ廻るこまた北の戸がしまつて、西の戸があいた。東へ廻つても駄目なので怒つて歸つて

しまつた。日數立つて河成から工匠の許へ、「お目に掛きたい物があるからお出で下さい。」こ言つて来た。敵討をするかも知れないこ思つたが、再三呼びに来るので行つて見た。上へあがつて一間へ入るこ腐れかゝつた死骸がある。思ひがけない物を見たので驚き叫んで引返すこ、河成が来て笑ひながら、「なほよく見給へ。」こ云ふので、恐るゝ近寄つて見るこ繪であつたこ云ふ。宇多天皇頃の巨勢金岡も有数の大家で、勅命によつて清凉殿の障子に弘仁以後の詩人をゑがき、また紫宸殿の障子に支那の聖賢の姿をかいた。これを世に賢聖障子こ呼ぶ。特に馬を寫すのに妙をえたが、仁和寺の殿壁にゑがいた馬は夜々田の稻を荒らしたこ云ふ。その子孫に畫を善くする者が多く出て巨勢派の一派をなした。一條天皇の頃の惠心僧都は佛畫に巧であつた。此の頃より阿彌陀如來を信じて極樂淨土に生れたいこ云ふ信仰が盛んになつて来たが、惠心のゑがいた阿彌陀如來の圖や來迎圖こ言つて阿彌陀如來が極樂から信者を迎へに来られる圖をかいたものなさが色々残つてゐる。やゝ下つて託摩爲成が出た。宇治の鳳凰堂の壁及び扉に極樂淨土の圖、釋迦如來の圖なごをゑがいた。

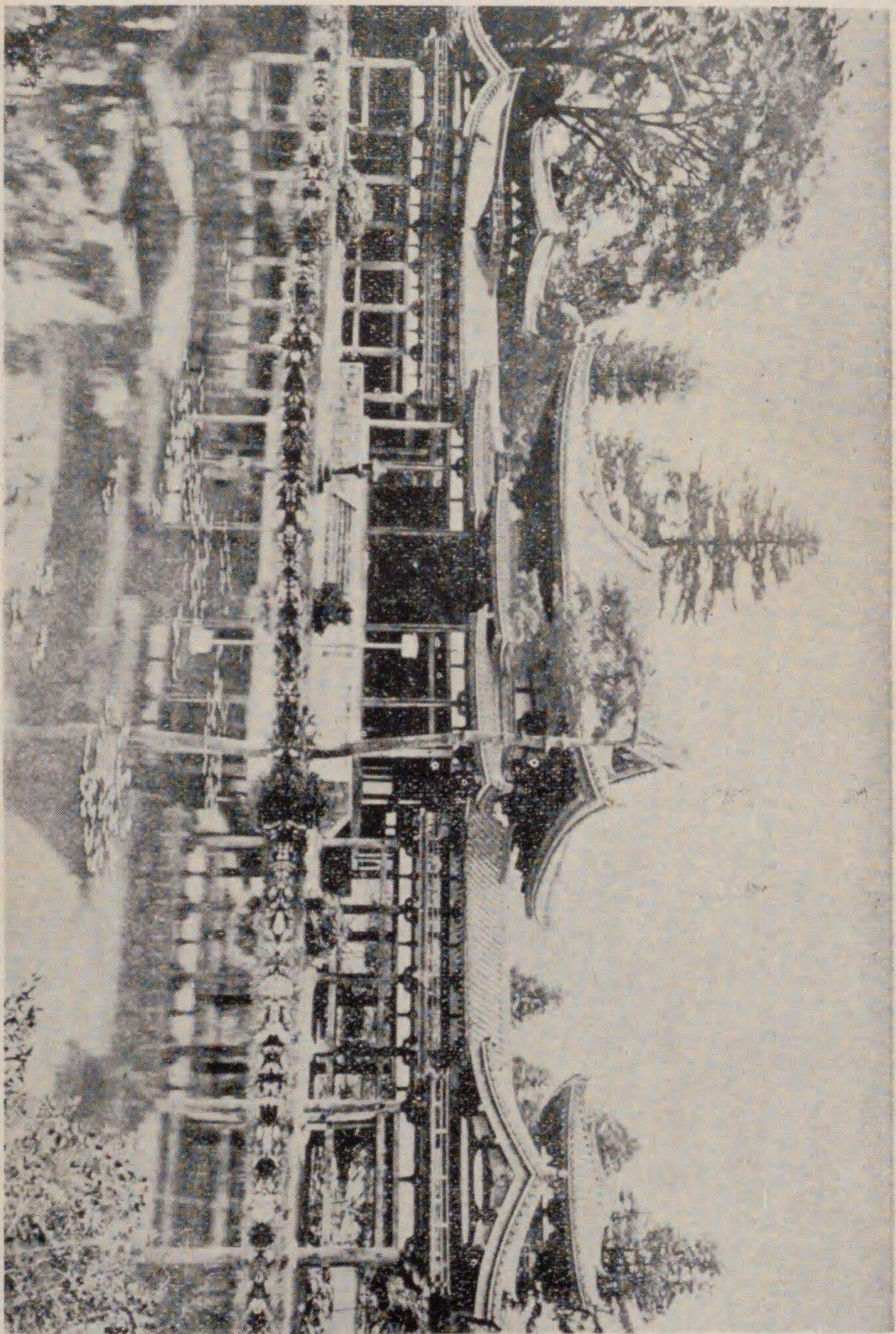
栗そなふ恵心の作の彌陀佛。

蕪村

御堂關白道長が經營した法成寺は、すでに跡方もないのであるが、その子頼通がその別邸を捨て、建てた宇治の平等院には名高い鳳凰堂が昔のまゝに残つてゐて、平安朝の藝術史に最大の光を放つてゐる。その結構は本堂・翼廊及び尾廊の三つの建物から成つて、丁度鳳凰が翼をひろけてゐる形になつてゐる。本堂は一段高い石壇に立ち、屋根は二重で、上の屋根の棟の兩端に銅製の鳳凰が上げてある。下の屋根の中央部を故さらに一段高くして單調を破つてゐる。翼廊は左右に長く延びて更に前方に折れてゐる。その隅に左右ともに樓閣があつて、中央の本堂に對して主人を左右から家臣が守つてゐるやうに見える。屋根の形は一棟々々形式を變へて種々に變化をつけてゐるのは、非常な工夫である。柱の外部は赤く塗つただけであるが、内部は到る所に裝飾を施し、内陣の柱、斗組、天井は皆美しき花模様をゑがき、扉や壁には爲成の佛畫があり、天井下の壁間には雲に乗つてゐる天人の彫刻が五十餘體かゝけてあり、天蓋、須彌壇には螺鈿を嵌め入れ、全部こして高尚優美の氣韻があふれる程で、

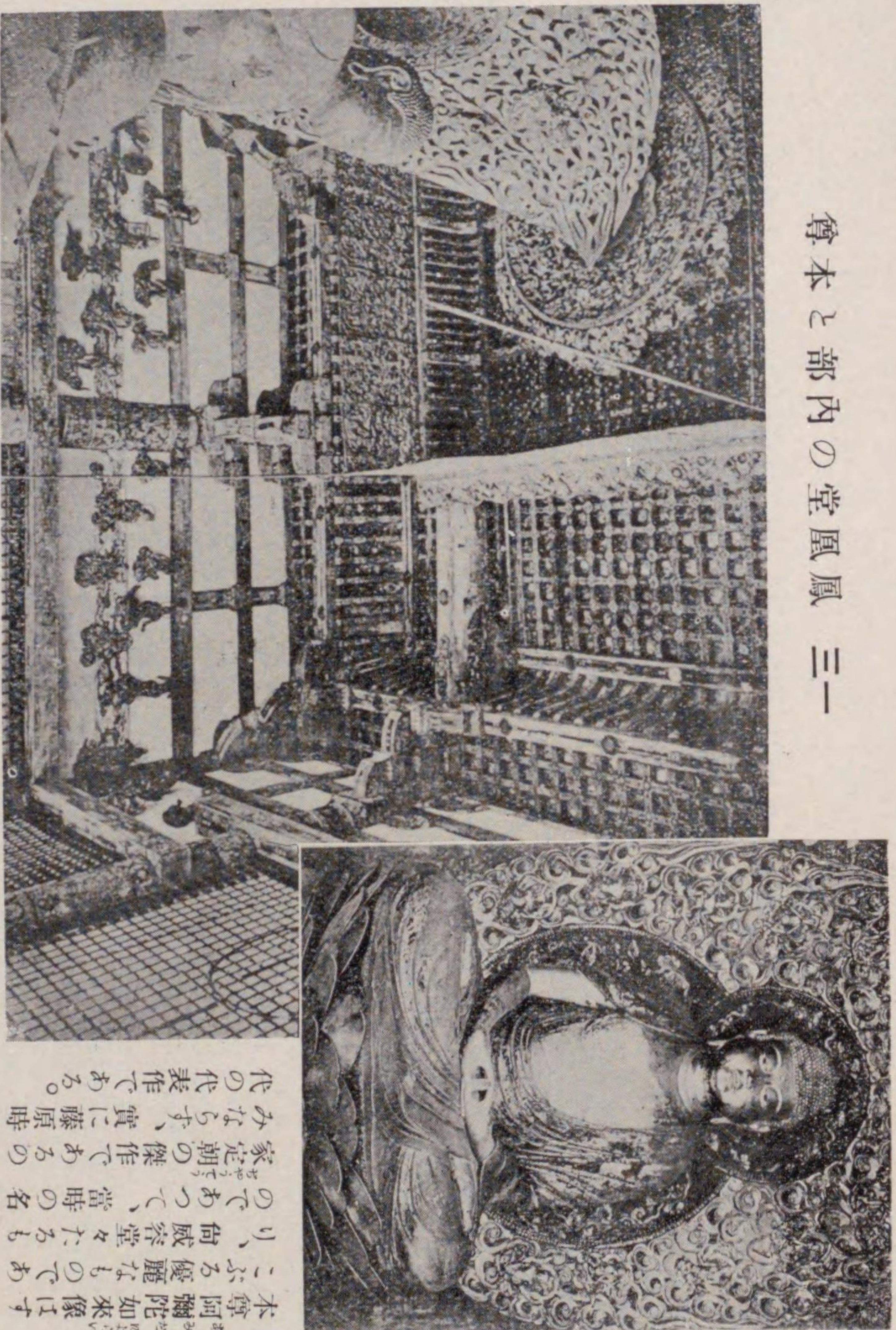
鳳 凰 堂

建築が非常に複雑變化をつくし、しかも調和と統一を失つてゐないところが比類稀なる名建築と言はればならぬ。殊にその形が優美であつて、附近の秀麗な山水と相まつて、よく藤原時代の氣分を表してゐる。



111 平等院鳳凰堂

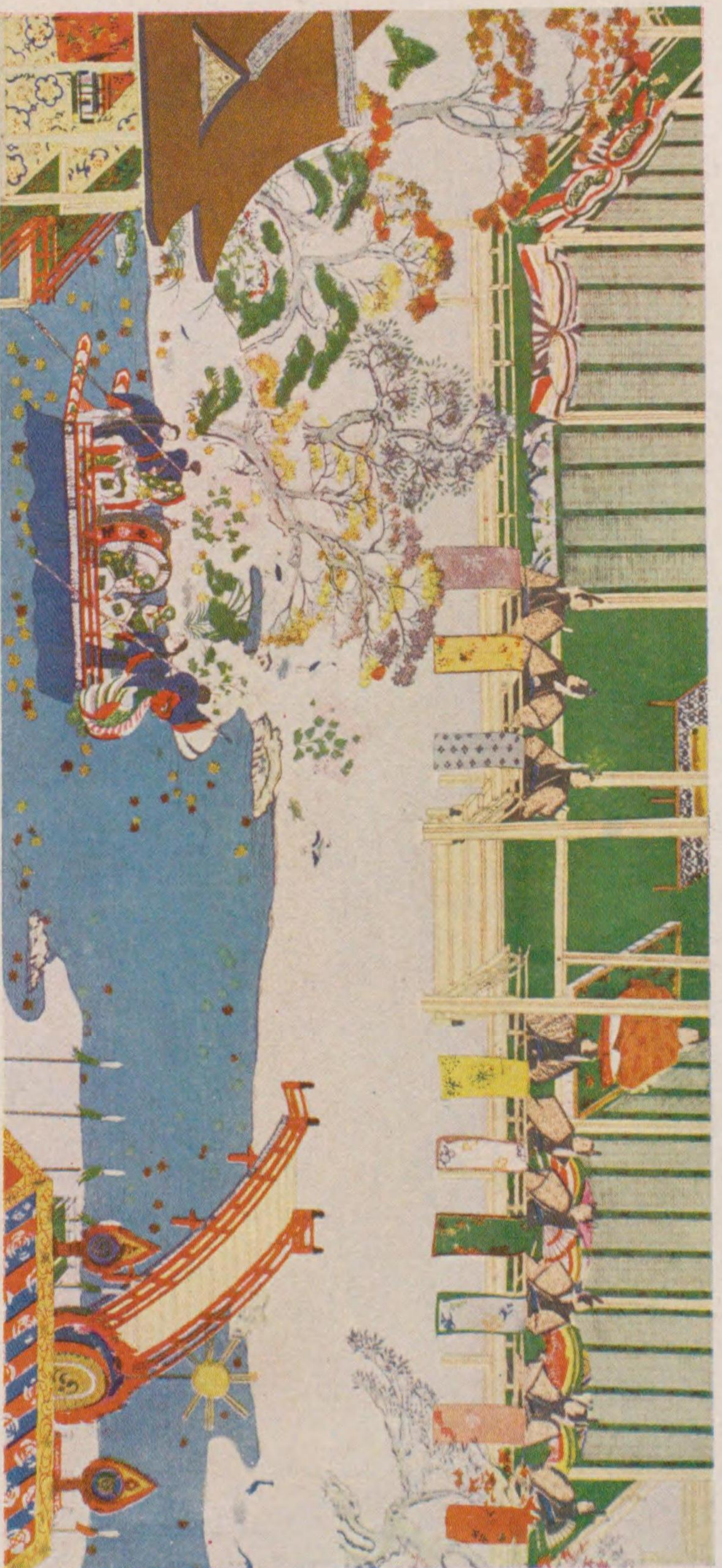
尊本と部内の堂鳳凰 三一



本尊阿彌陀如來像はすこぶる優麗なものであり、尙威祭堂々たるものであつて、當時の名家定朝の傑作であるのみならず、實に藤原時代の代表作である。

内部の裝飾は柱、天井、長押に到るまで善美を盡してゐる。欄間にある雲に乗つた天人の木彫は本尊阿彌陀如來を供養し奉る様を表してゐる。

遊宴の族貴代時安平 四一



様有たつなに覽御を馬競てし幸行に邸の通頼原藤が皇天條一後日九十月九(年四八六一元紀)年元壽萬は圖本
。るあであるなき聴おた樂雅るす奏に中船、てつあで部一の中詞繪幸行競駒たいがゑな

恐らく今日存する美術的の木造建築としては世界一であらう。本尊阿彌陀如來の坐像は當代第一流の名工定朝の作で、面相は圓滿にして極めて尊嚴、やさしい御姿の中に無限の神々しさがあり、手法は非常におだやかな流麗な大傑作である。しかし當時の人々は法成寺の壯麗をば口を極めて讚嘆して居るけれども、平等院に就てはあまり述べてゐないところを見るに、法成寺が如何に壯大優麗であつたか、想像されるのである。

冬枯や平等院の庭の面。

鬼貫

その頃特に上下の尊信をうけた有名な大社は京都の賀茂神社、石清水八幡宮、奈良の春日神社などであつた。賀茂神社は上下に分れ共に京都市の北方にある。古くから祀られてあつたが延暦の遷都以來皇室の御尊崇があつて、四月中の酉の日には盛大な祭典が行はれた。古は單に祭言へば、此の祭をさした。また男山八幡宮の祭に對して北祭とも言ひ、更に葵祭とも云ふ。春日神社は藤原氏の祖先天兒屋根命を祀つてある。奈良時代の初に今の春日の地に祀られた。平安時代には、世にも盛んな藤原氏の氏神として甚だ尊崇されたものであ

る。石清水八幡宮は京都市の西南方の男山にあり、清和天皇の御代に宇佐八幡宮を勧請して祀られたのである。此の神社も歴代の御崇敬が深く、その祭は賀茂に劣らず賑つた。有名な泉があるので、石清水八幡宮と稱した。

此の御代はすべての方面に優美典雅な氣象を發揮し、衣服住宅もすこぶる華麗になつた。文武官の男子の正装は東帯である。冠をつけ笏を持つてゐた。そののや、略したのを衣冠と云ふ。常服としては直衣があり、多く狩に用ひる狩衣があり、なほ直垂及び水干などの種類があつた。當時は男子も髪を結び香を衣に焚きしめ、後には黛も施す程になつたのである。女子の盛装は十二單であつて、緋の袴をはき唐衣及び裳をつけた。唐衣と裳を省いたのは平服であつて、これを桂姿と云ふ。その模様や色彩に意匠をこらした事は云ふまでもない。上流の邸宅は所謂寢殿造と云ふ形式であつた。北部に南面して正殿がある。これを寢殿と云ふ。寢殿とは本殿と云ふ意である。その東に西に北に對屋がある。南方には泉地があり、中島があり、松や櫻や柳をうるて風致を添へ、池に臨んでは左右に泉殿と釣殿とが相對して

設けられた。これらの殿舎はすべて廊で結び付けてある。平安朝の貴人が春の櫻狩、秋の月見に楽しい生活をおくる舞臺は此處であつた。

第二十二 刀伊の入寇 陸奥の亂

都で藤原氏の一門が朝廷に時めいて、たゞ榮華にふけり政治をよそにして、遊宴を事してゐる間に、地方の秩序は益々亂れ、西にも東にも争亂が相ついで起り、天下は漸く騒がしくなつて來た。まづ西方では一條天皇の御代頃から高麗人の騒があつたが、後一條天皇の寛仁三年(一六七九年)には朝鮮半島の東北に居つた刀伊と云ふ部族が、五十餘艘の船隊を以て、俄に對馬と壹岐(共に長崎縣)とを襲ひ國司・島民を殺し、更に筑前に迫つて來た。時に太宰權帥藤原隆家は叔父を呪つた伊周の弟であるが、眼病を患つてゐたから、宋から來た醫師の治療を受けんが爲、特に太宰權帥を願つて任地に居つたのである。變を聞いて直に兵を發して防戦し、急に戰艦三十餘隻を修造し、洋外に敵を撃攘つて遂に大勝をえたが、一時はい

たく人心を驚かしたところであつた。

東ではそれより九年の後、同じ御代に前上總介平忠常云ふ者が下總に據つて叛をはかつた。此の時朝廷ではまづ平直方を將にして東海東山二道の兵を發して追討せしめられたが、久しうしても功を擧げることが出来ない。それで召返し、更に甲斐守源賴信を遣はして討たせられると、忠常はこれを聞いてこても敵對することが出来ないと思ひ、急ぎ降つて出た。これから東國では平氏は衰へて源氏の勢力が漸く盛んになつた。賴信は天慶の頃純友を討つた經基の孫である。次いで賴信の子賴義及びその子八幡太郎義家が陸奥の亂を平定するに至つて、東國に於ける源氏の勢力はすこぶる強固なものになつたのである。

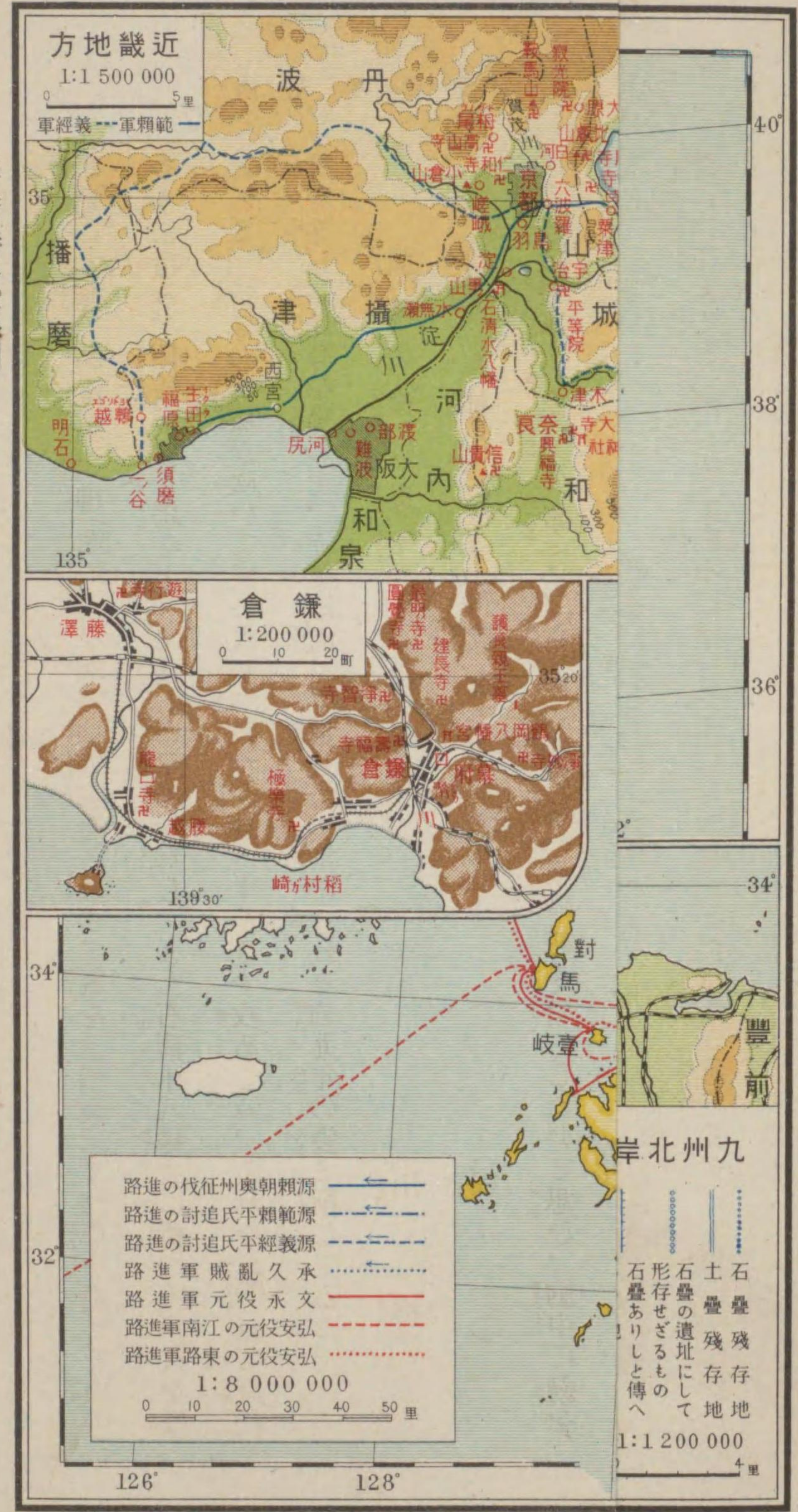
第七十代後冷泉天皇の御代に陸奥(北地方)の豪族安倍賴時がその大勢力をたのんで、みだりに關を衣川(岩手縣)に設け、その地方を我が物顔に振舞うて良民を劫し、貢物を納めず、遂に國司にもさからふやうになつた。朝廷は源賴義を陸奥守に任じ、ついで鎮守府將軍としてこれを討たせられた。たま／＼安倍富忠が兵を起して官軍に屬し、伏兵を以て賴時を討つ

てこれを誅したが、賴時の子貞任は父に代つて兵を統べ、弟宗任等と共に官軍に抗して中々に屈せず、その勢は侮るべからざるものであつた。殊に黃海の戰の如きは、吹雪が荒れ狂ふ時であつた。道の悪い上に、官軍は兵糧に乏しく、人馬共に疲れ果て、るたのに、敵は大軍を有し、元氣のよい馬に乗つて、散々に官軍をやましたので、官軍は或は死し、或は傷つき、後には從兵は僅かに六騎になつた。こても戰死をまぬかれないやうな状態になつたけれども、義家はしきりに射て多くの賊兵を殺し、家臣も必死になつて戰つたので、やつこ九死に一生をえて、賊の圍みを脱したやうなところもあつた。その後賴義は出羽(秋田縣)の豪族清原武則をひいて援きて康平五年(一二七二年)衣川關に敵軍を破つた。貞任等はこらへかねて城の後から落ちて行くのを義家が追ひかけて、「汚くも後を見せるものかな。暫し引返せ、云ふべき事があるぞ。」と云ふと、貞任が後を見かへしたので、

衣のたてはほころびにけり。

この歌の下の句を詠み上げるに、貞任も馬を止めて義家に向ひ、

第三圖 平安時代末期 鎌倉時代前期 要地圖



前九年の役

年を経し絲のみだれの苦しさに。

こ附けた。その優しさに感じて、義家は構へた矢を外して歸つた云ふことである。その年遂に本據である厨川柵(岩手縣)を圍み、人家をこほつて堀をうづめ、また草を刈つて山のやうに積み、頼義が自ら馬を下りて遙かに皇居を拜し、また石清水八幡宮に祈つて、火を投げるこ、折ふし大風が吹いて城に火がついたから、すかさず攻めこみ、これを陥れて貞任等を誅し宗任等を降して、陸奥は漸く平定した。世にこれを前九年の役と稱してゐる。

凱陣の後は奥州こそばなり。

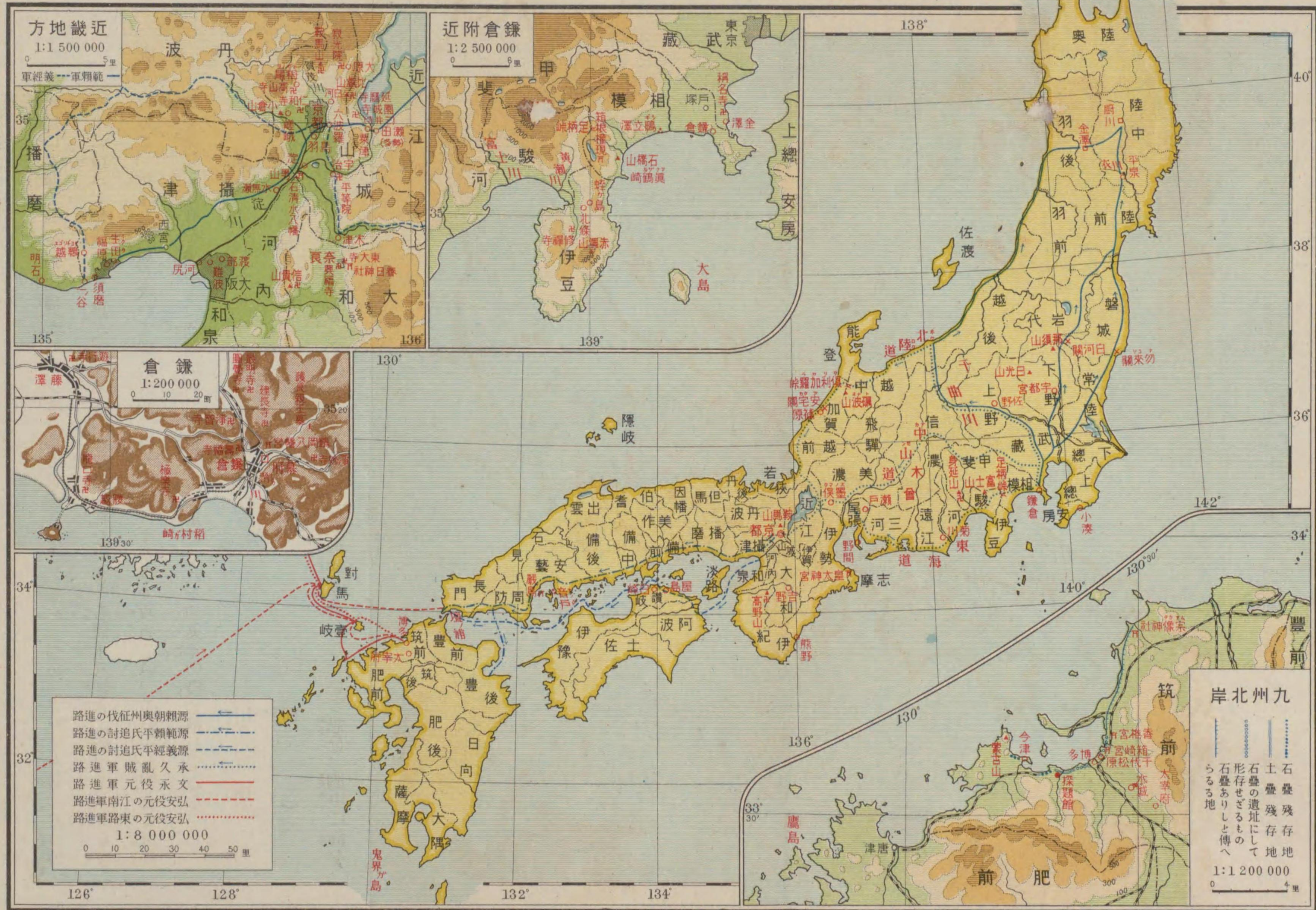
緋緘も柿色になる前九年。

(川柳) (同)

宗任は義家を父や兄の敵とねらひ、いつかは一族の怨を晴らしたいと思ひ、胸中に劍を含んで義家に仕へてゐるたが、義家は少しも疑ふ氣色がなく、眼をかけて召使つてやつたので、遂に宗任も心を翻して忠勤をはけむやうになつた。まだ宗任が降人として牢屋につながれてゐた時、心無き公家の若殿原が珍らしい東夷をなぶつてやらうと思つて、梅の花を見せ

第三圖

平安時代末期
鎌倉時代前期
要地圖



てゐる時、心無き公家の若殿原が珍しい東夷をなぶつてやらうと思つて、梅の花を見せ

て、これは何ぞ云ふ花か尋ねるも、宗任は、

我が國の梅の花は見たれども大宮人は何ぞ云ふらん。

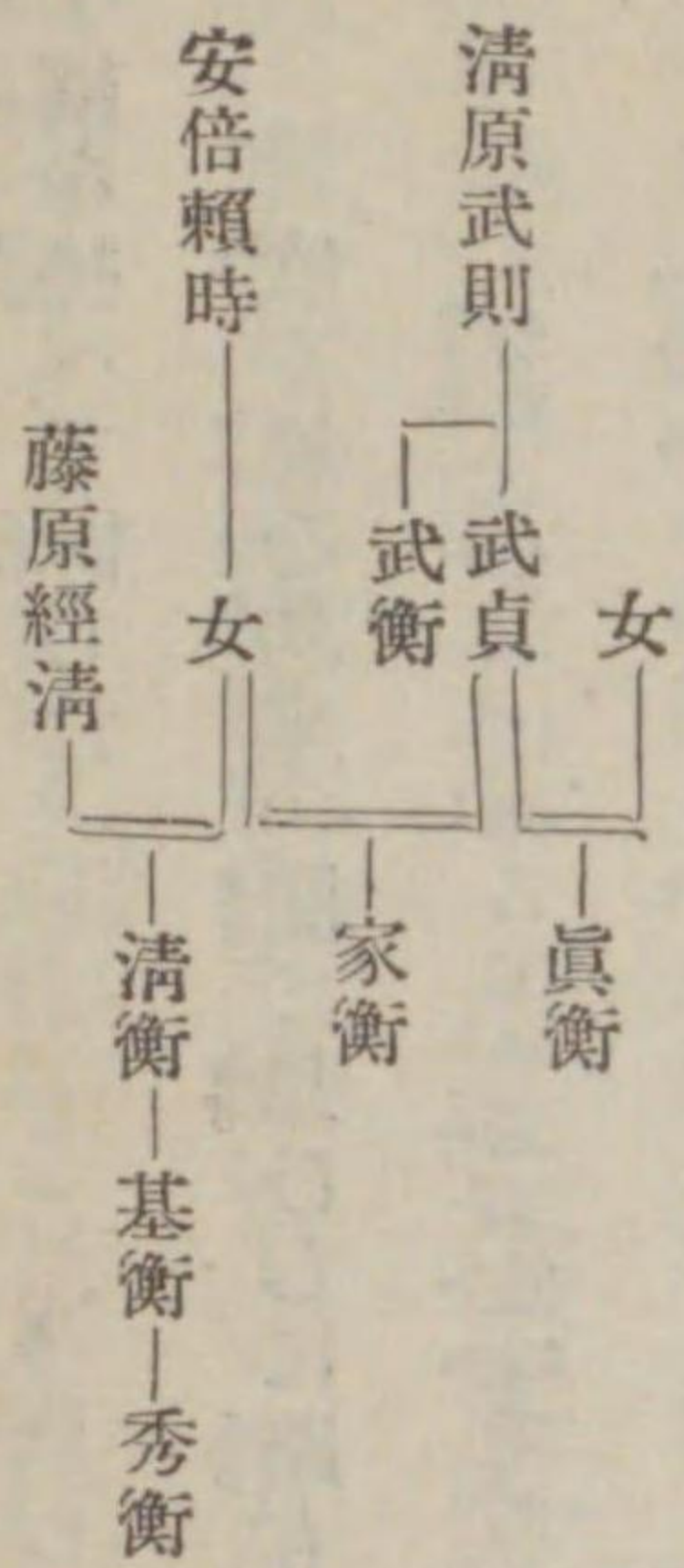
ご歌で返答したので、皆返す言葉もなくすごとく引返したご云ふ傳説がある。

清原武則は戦功を賞せられて鎮守府將軍に任ぜられ、安倍氏の故地を領して子孫に傳へ

たが、また二十餘年を経て一族の間に争亂がおこり奥州は再び戰場となつた。武則の子に武

貞武衡があつた。武貞の次は、その子眞衡が後をつぎ、すこぶる勢を振つた。はじめ

清原・藤原氏系圖



前九年の役の頃藤原秀郷の子孫である經清が陸奥に来て安倍頼時の女を娶つて、子清衡を生んだ。さて經清は頼時に味方して誅せられたから、その寡婦は清衡を連れて武貞に再

縁して、家衡を生んだ。然るに眞衡は勢をたのんで随分我がまゝな事があつたので、清衡や家衡はこれを怒り、力を共にして眞衡を攻め戦つたのである。

此の時源義家が陸奥守兼鎮守府將軍として任地へ下つて行つた。かの勿來關(磐城)を通る時、折りしも彌生の花曇り、吹く春風にそよ／＼と櫻が鎧の袖に散りかゝるのを見て、手綱を控へて詠じた。

吹く風を勿來の關に思ひしに路もせに散る山櫻かな。

(勿來と言へば來るなと云ふ意味であるから、風の吹くのも止めるかと思ふと、さうではない、

山櫻がちらく散つてゐる、つまり花の散るのを惜しんだ歌である)

それから義家は眞衡を助けて戦つたが、眞衡はやがて病死し、また清衡が義家に屬したけれども、家衡が叔父武衡の援をえて尙久しく義家に反抗した。敵は皆金澤柵(秋田縣)に籠つたので、義家は自ら兵を率ゐて攻寄せたが、戦は久しく續いたけれども、勝敗がまだ容易に決しなかつた。時に鎌倉權五郎景正云ふ者が、年は僅かに十六であつたが、命を捨て、戦ひ、敵の矢で右の眼を射られたが、屈せず戦ひつゞけた。その後、陣に歸つて、「傷をした。矢を抜いてくれ。」と言つて仰向けに寝た。三浦平太郎爲次云ふ者が、足で景正の顔をふみ

ながら矢を抜かうとするに、景正は寝ながら刀をぬいて爲次を突かうとするので、爲次は驚いて「何をやるのだ。」と云ふに、景正は「生きながら、足で顔をふまれるのは武士の恥だから、汝を殺さうとした。」と答へたので、爲次は舌を巻きながら、膝をかゞめ顔をおさへて、矢を抜いた。多くの人はこれを見聞して、景正の名は益々高くなつた。或日義家の軍が金澤を攻めるに、一列の雁が空を飛んでゐるが忽ち列を亂して飛び散つた。義家はこれを見て、「必ず伏兵があるぞ。」と言つて探らせるに、果して草むらの中に武衡の伏兵を發見した。もし伏兵のゐる事を知らずに行くなれば、義家の軍は敗れたかも知れない。さうして義家が伏兵を知つたか云ふに、これは先年義家が關白頼通の第で前九年の役の武功を物語つてゐた時、博士大江匡房は別室で聞いてゐるが、「大將たるの才はあるけれども、惜しいかな尙兵法には暗い。」と言つた。宗任はこれを聞いて大いに怒り、義家に告げるに、義家は「さうもあらう。」と言つて匡房について兵法を學んだ。その折教へられたのが今役に立つたのである。その頃兄義家が苦戦してゐるに聞いて、弟の新羅三郎義光が官を棄て、陸奥へ下つて

来て援けた。それについて次のやうな傳説がある。義光は音楽を好んだから、笙を豊原時元に學んで奥妙をえてゐた。その中に時元が歿して、その子の時秋はまだ幼かつたので秘訣を傳へられてゐなかつたが、義光が陸奥へ下るに聞いて共に往きたいと頼んだ。義光はしきりに止めなければならぬと聞かないから、是非なく諸共に東下して足柄山(箱根)まで来た。義光が戦死すれば秘曲は亡びる。それで時秋は義光に従軍して、その秘曲を學んでおきたいと考へたのである。義光は時秋の意を悟つて、馬より下り人を拂ひのけ、盾を二枚しいて共に坐し、矢をさしこんで背に負つてゐる鞍から一紙の文書を出して見せ、「これは御身の父君の自筆の譜である。」「ご告げ、また「笙を持つて居られるか。」「ご問ふと、時秋は懐から取出して義光に捧げたので、「これまで慕つて來られた志は定めて是れが爲であらう。」「ご言つて、義光は時元から傳へられた秘曲をねんごろに授け、「我はこれから戰場に行くので、ごも身の安否ははかられない。萬一安穩であるならばまた都で見参しませう。御身は豊原數代の樂師、朝廷に大切な人であるから、必ず粗忽の振舞をせず、速かに都に立歸つて道を全うせられよ。」



15 後三年の役

池田伯爵家藏品で、後三年合戦をかいた繪詞の一節である。右の方に龍頭のついた呂を着て、飛雁の亂れたのを見てゐるのが義家である。

三再三言含めて上京させ、自らは陸奥路へ急いだ。

義光はかく苦心して陸奥に下り、ついで兄義家に會つたので、義家は友愛の至情を泣いて喜んで、「我が汝を見るこゝ先君(父頼義)を見るやうに思ふぞ。」と言つて大いに勇み、相共に力をつくしたが、敵城はなほ強盛で中々に拔けない。義家は種々思案して夕食に剛臆の座を分ち、その日の働が勇ましかつた者は剛の座に坐らせ、しからざる者は臆の座に坐らせたので、將士は皆剛の座に坐らうとして、勇ましく働いた。遂に持久の策をこり、兵糧攻めにしてたうこう第七十三代堀河天皇の寛治元年(一七四七年)金澤の柵を陥れ、武衡を誅した。世にこれを後三年の役と言つてゐる。

諸事前のこほりこ觸れる後三年。

(川柳)

亂が平いだったので、義家は勝軍を奏して功を賞せられんこを請うたが、事情にくらい朝廷では義家と清原氏との私闘であるとして、賞を下されなかつたから、義家は私財を盡して部下をねぎらつた。源氏は代々名君が出たが、殊に頼義は武功にすぐれ、また仁慈の心が深く、

常に部下を愛し、かつて前九年の陣中でも、みづから負傷者をいたはつた程であつた。義家も慈悲の心にあつく、後三年の役の時、寒中に雪でこゝえた者を自ら抱いて暖めてやつたこともあつた。その上、大いに文武の功をつみ、恩威を並び施したから、武士はこれに従ふことを好み、東國は悉く源氏に服するやうになつた。義家は幼時石清水八幡に元服して冠者名を八幡太郎と呼んだのに因み、後の武士は義家を八幡殿と尊稱して弓矢の神とあがめた。

藤原清衡は源義家を援けた功によつて、清原氏の地を領して平泉(縣)に居つた。當時朝廷では奥羽地方をなほ蝦夷の地として、重要視されなかつたが、土地が廣く天産が豊かで民は富んでゐたから、藤原氏は此の地の利を占めて、その子基衡、孫秀衡まで三代九十餘年間東北に雄視して榮華を極めた。後に平氏の盛時ですら、その威令がこゝには及ばなかつた位であつた。その造營にかゝる平泉の中尊寺は一時は堂塔が四十餘宇、禪房が三百を數へた。その境内には金色堂が今尙存してゐる。内部は三壇に構へ、彌陀三尊・六地藏・二天安安置し、清衡以下三代の棺を納めてある。四本の柱は所謂七寶莊嚴の卷柱であつて、それに

は阿彌陀の十二光佛を彫がいてあり、柱梁には螺鈿や珠玉をちりばめ、屋根裏・天井・軒廻りなどは悉く黒漆を厚塗にし金箔を貼り、全堂は金色燦爛としてゐるので、一に光堂とも言はれた。藤原氏の豪奢は眞に驚くべきものであつたが、今は僅かに此の一字の小堂と外二三を残すのみになつた。後年芭蕉が此の廢址を弔つて、

國破れて山河あり、城春にして草青みたりこ、笠打敷きて時の移るまで泪を落し侍りぬ。

夏草やつはものごもが夢の跡。

五月雨のふり残してや光堂。

こ「奥の細道」に記してゐるのも尤もである。

第二十三 後三條天皇と白河法皇

藤原氏の盛時では、代々の天皇は大抵その出におはしまし、政治は殆ど藤原氏の爲すがままにお任せになつたが、治暦四年(一七二八年)後三條天皇(第七十)が即位せられるに及んで

形勢は一變してしまつた。天皇は後朱雀天皇の皇子で、御母は三條天皇の皇女禎子内親王であらせられた。その頃藤原氏から上られた皇后や妃の中に皇子がお生れにならなかつたから、後朱雀天皇の遺詔によつて御兄後冷泉天皇の皇太子になられたが、關白藤原賴通は皇太子が我が家の出であらせられない故、皇位につき給ふのを喜ばなかつた。それで二十餘年の久しい間東宮におはしたが、後冷泉天皇の崩ぜられた後、遂に天位にお上りになつたのである。天皇は英明剛毅にしましたのみならず、すこぶる學問を好ませられ、東宮の御時、當時の大學者大江匡房を師として和漢の學を深く研究せられた。東宮の御時から、常に藤原氏の專權を憤らせられ、朝威が衰へ、國政が亂れたのを、正しきに反さうと思し召されたので、關白賴通も天皇を憚り奉つて職を辭し遂に宇治に退隱した。天皇は政を親ら視そなはし、事苟くも理にあはない時は、一步も譲り給はず、藤原氏に對しても少しも遠慮せられなかつたから、政は公道に従ひ、皇室の威權は俄に加はつた。賴通の弟教通が兄に次いで關白になつたけれども、その勢は昔は全くかはつてしまつた。

此の頃は藤原氏を始め貴族の莊園が益々増加し、従つて租税は益々減じ財政がすこぶる困難になつて來たので、天皇は第一に記録所を新たに設けられ、親しくこれに臨まれて、莊園の新置のものも、舊いものでも證據の明かでないもの並に政治に妨あるものは皆これを調べて召上げられた。當時は朝廷で収入の不足を補ふ爲に、國司が物や金を献上するに、二度重ねて、國司に任じなされたことがある。良い役人なら二度國司になつても差支はないが、當時の國司は自己の利益の爲官吏なるのであるから、重任は非常に弊害があつた。また金錢を納めるに、つまらない者にも官位を授けられる風習が行はれてゐたが、天皇はその害を察して、固くこれを止められた。また升の大きさを定められ、御自ら節儉を行つて人民にお示しになり、奢侈を厳しくお戒めになつた。かつて青魚の頭をお厭ひなく召し上つた傳へられる。或年に男山八幡へ行幸せられた時、拜觀者の車に金銀の飾をつけた者があつたのを皆はぎこらせられたので、次に賀茂へ行幸せられた時は、拜觀人に飾のある車はなかつたさうである。こゝに於て舊來の弊習は大いに改まつて風紀はすこぶる引きしまつて來たが、在位

が僅かに五年にして、御位を御子白河天皇(第七十)に譲られ、上皇として政を聴かうと思し召されたが、不幸にしてその翌年に崩御あらせられ、十分にその御志をおこけにならなかつたのは返すくも残念なことであつた。御年も僅かに四十であらせられた。天皇を憚り奉つて退隠した頼通すら、天皇の早く崩ぜられたのは誠に惜しいことで、邦家の不幸はこれより大きいものはあるまい。と言つて惜しみ奉つた位であつた。

白河天皇も御父に似て果斷にましつた。天皇は父帝の御遺志を奉ぜられ、在位十五年で

御位を御子堀河天皇(第七十)にお譲りになつて、上皇として院に退いて政をお聴きになつ

た。即ち院政はこゝに始まつたのである。上皇の政を見られる院廳には、院司を置き、

北面の武士を置いて守らしめられ、院宣または院廳下文を以て天下に號令せられたが、そ

の威は詔勅よりも重くなつたから、此の後は天皇もたゞ御位にお在でになるに過ぎないやう

になり、攝政・關白はあつても何の權勢も持たないことになつた。かくして後三條天皇以來

藤原氏の勢は漸く抑へられ、今また院政になつて益々その勢を失つたので、後三條天皇

の聖旨の一端は達せられたのであるが、院政になつてからは政令が天皇と院との二途から出ることになつた爲、朝廷の政治は却つて亂れるやうになり、遂には天下の大亂をさへ招くやうになつたのである。

白河上皇は深く佛教を信じ給ひ、御髪をおろして法皇となり、堀河天皇・御孫鳥羽天皇(第七

十四)・御曾孫崇徳天皇(第七十)の三代の御代四十三年にわたつて、院政をお聴きになつた。京

都の東方にある白河に法勝寺を建て、しばしば盛んな法會をお行ひ遊ばし、なほ高野山に幸

し給ふことは四度を數へ、熊野(和歌山縣)に幸し給ふこと八度に及び、佛畫・佛像・寶塔を作ら

れたことは數へられぬ程であつた。殊に殺生を禁斷して魚鳥を放たしめられ、土木を盛んに

おこして壯麗な宮殿を營まれた爲、政治は再び弛み、上下ともに奢侈に流れ、財用が乏しく

なるまゝに、また賈官の弊風が生じ、米や絹を獻じて國司に任せられる者もあり、後三條天

皇の御改革の精神はこゝに於て全く破れ、善政は次第にすたれて來たのである。

此の頃は上下一般に佛法の尊信が極度に進んだ爲、佛寺はごこも皆榮えた。中にも南都北

嶺に相並んで稱せられた奈良の興福寺と比叡山の延暦寺、及び東大寺・三井寺などの諸大寺は朝廷の御崇敬がすこぶるあつく、數百年の由緒深き尊き歴史を有し、かつ多くの莊園を有つて大いに富有であつた爲、その勢力は極めて盛んであつた。しかも僧侶の取締は朝政が衰へた爲、昔の如くに嚴重でなくなつたので、無頼の徒が多く諸大寺に集まつて僧となり、秩序の亂れた當時に、佛法保護の美名の下に武藝を練習して寺院警備の任に當つたので、遂に僧兵と云ふものができやうになつた。かゝる諸大寺の僧兵の勢が漸く盛んになると、横暴をほしいままにして、僧侶にもあるまじき亂暴狼藉を行つた。その暴行は言語に絶し、その弊害は年々多くなり、院政時代になつては殆どその極に達し、諸大寺間の鬭争に日も足りない有様であつた。諸寺間で相争ふはまだしも、不平の事があれば、興福寺の僧徒は春日の神木を捧げ、延暦寺の衆徒は日吉神社の神輿をかき上げて、大舉入洛して朝廷に強訴し、その要求が達せられなければ容易に退かなかつたのである。その頃京都の賀茂川がしばしば氾濫して、朝廷はその害を治めるのに苦しまれたから、藤原氏の強勢を抑へられた白河法皇

ですらも、「朕の心のまゝにならぬものはたゞ賀茂川の水と双六の采と山法師とである。」と嘆ぜられた位であつた。山法師は延暦寺の僧兵を言ふのである。僧兵の暴行を防ぐ爲に朝廷は、武を以て立つ源平二氏を用ひられたので、武士の勢力は此れによつて漸く京都でも知られ朝廷に仕へて、次第に武士は立身するやうになつた。

寒月や衆徒の群議を過ぎて後(衆徒は僧) 僧兵の都へ入るやはたゞ神。

蕪 村 潯 陽

第二十四 源平二氏の盛衰

後世の史家は「院中の政は藤原氏の權を奪うてこれを武人に與へられたものである。」と言ふが、實にその通りであつて、平清盛の出るに及んでは、院政も形式となり、實權は武將に移つて武門政治の端を開き、一轉して平氏の亡びるや、源頼朝が幕府を開くに到つたのである。

先に平貞盛が平將門の亂を平けて功を立て、から、貞盛の流の平氏は東國に繁昌して、所謂八平氏なごの稱も起り、一時は武士の間に勢力があつたのである。然るに源氏には頼信・頼義・義家なごの英傑が相繼いで出たのに反し、平氏にはその後はそれほごの名將も出ず、却つて、平忠常の叛亂があつたりして、その勢力は遙かに源氏の下にあつた。ところが崇徳天皇の頃に平貞盛の五世の孫忠盛が鳥羽法皇の御信任を蒙り、瀬戸内海の内海を討つてしばし功を立て、から、次第に出世して、再び源氏と肩を並べるやうになつた。

きじ啼くや草の武藏の八平氏。

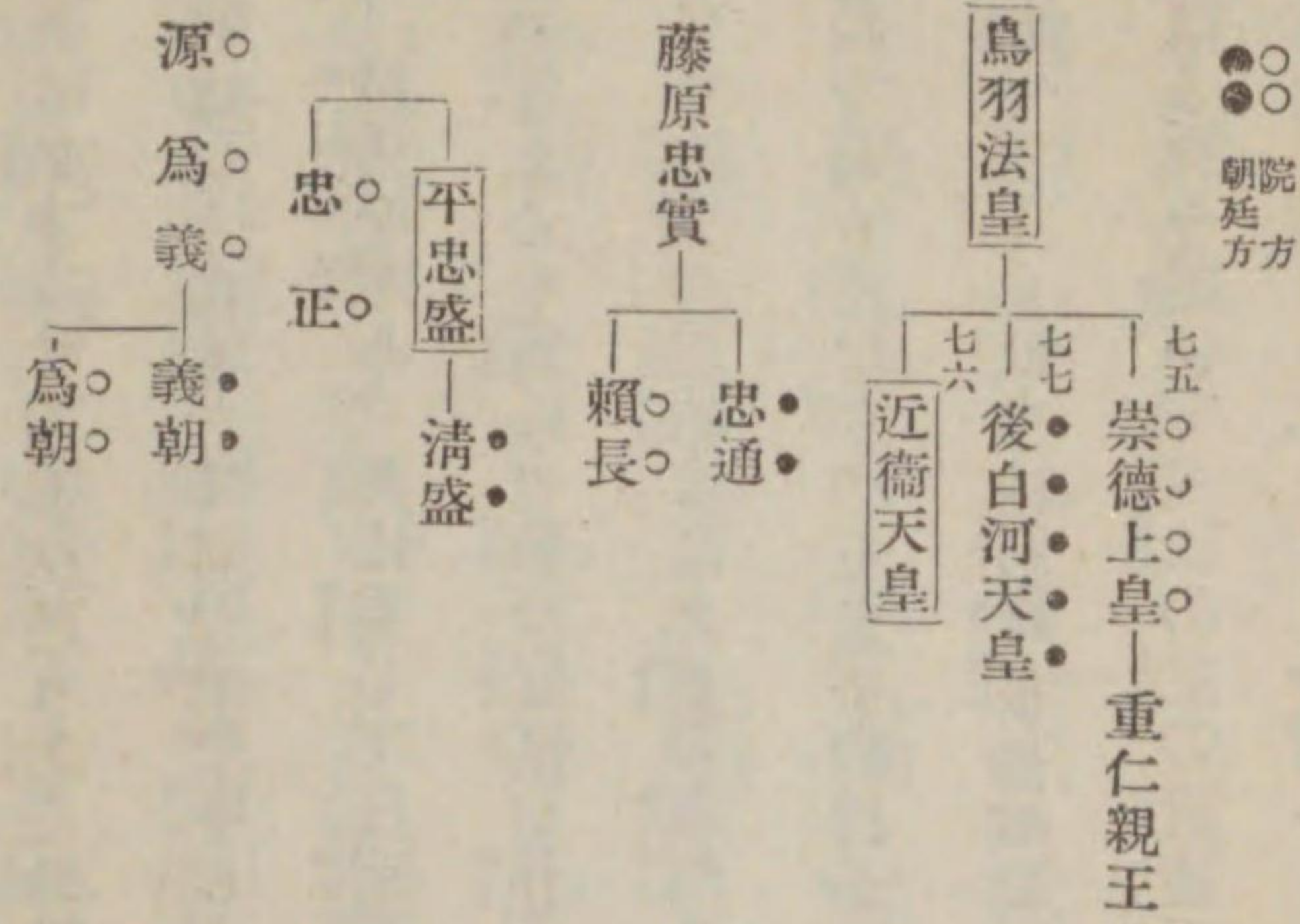
燕村

鳥羽法皇は後に白河法皇の御後を受けて、院政を聴き給ふことが、御子崇徳天皇・近衛天皇(第七十)・後白河天皇(第七十)の御三代二十七年にわたつた。忠盛は法皇の仰せを蒙つて得長壽院創建の土木を司り、功を以て朝廷の御殿に昇ることを許された。これは武將に先例のない破格の朝恩であつた。それで他の殿上人はこれをねたんで、殿中で闇打にしようとした。忠盛は思案して木刀に銀箔を貼つてこれを佩び、昇殿して暗處に刀をひらめかしたので、闇

打にしようとした人々も根が柔弱な朝臣であるから、これを恐れて、謀も行はれなかつたが、忠盛はその刀をわざと主殿司にあづけて退出した。妄りに刀を帯びて昇殿することは厳しい禁制であるから、闇打にしようとした人々は闇打の行はれなかつた腹いせに、あそこで忠盛が妄りに劍を帯びて昇殿した事を訴へて出た。お調べになるに木刀であつたので、何のお咎めもなかつた。

さて法皇は御妃美福門院(藤原)のお勧めによつて崇徳天皇に諭して、美福門院の御腹である御弟近衛天皇に位をお譲らせになつた。時に近衛天皇の御年は三歳であらせられた。崇徳上皇は御心が平かであらせられなかつたが、近衛天皇は御年十七歳で崩せられたので、ひそかに崇徳上皇は御子重仁親王が御位に即き給ふべきものと思し召し、御望をかけられ、世間の輿論も親王に歸してゐた。然るに法皇はそれを顧み給はず、再び美福門院のお勧めにより、關白藤原忠通に謀つて、上皇の御弟後白河天皇を即位させられたので、上皇は益々御不平であらせられた。その頃、藤原氏では忠通とその弟左大臣頼長と仲が非常に悪く、互に權

力を争つてゐた。始め頼長は鳥羽法皇の御信任を得て、その威勢は一時は兄を凌いでゐたが、あまり氣まゝなので法皇も漸くお厭ひになり疎じ給ふに及んで、その勢力は衰へてしまつた。頼長はいかにもして再び權勢を専らにしようとして、崇徳上皇に親近し奉り、重仁親王を立て、上皇の院政になし參らせて己れ自ら兄に代つて攝政ならうと計つた。保元元年（紀元一八一六年）七月法皇が崩御あらせられた。頼長はこれを機として上皇に勧め奉り、源爲義その子爲朝及び平忠盛の弟忠正等を招き、兵力にて希望を達しようとした。朝廷では危険をおもんばかつて忠盛の長子清盛、爲義の長子義朝等を召して御所を守らしめられた。かくて上皇は白河殿に移り給ひ、爲義以下の諸將をして四方の門を守らせられた。爲朝は爲義の八男であつて、身の長は七尺ばかり、力はあくまでも強く、強弓の名人であつた。十三の時九州へ降つて、三年の間に九州を殘らず平けようとした程である。京都に歸り、間もなく父と共に院に參つた。時に十八歳であつた。「自分は親にも兄にも従ひません。高名不覺もまぎれぬ爲、唯一人いかに強い方へ向けて下さい。たゞひ千騎もあれ、萬騎もあれ、



一方は必ず射止めませう。」とて西河原表の門を固めることになつた。やがて軍評議が始まつて、頼長が「合戦の様子を計らひ申せ。」と言つた時、爲朝は畏まつて「私は久しく鎮西に保元の亂の敵・身方

つて承知しないので、爲朝の謀は行はれなかつた。爲朝は退いて「武士にこそ合戦をまか

居つて九州の者共を従へ、しばらく合戦を致しましたか
ら、それについて考へて見まするに、戦は夜討に越す
事はございませぬ。今夜皇居に押寄せ、三方から火をか
け、一方から攻め立てれば、いかに兄義朝なごがよく戦
つても、一矢で射止めませう。まして清盛が如きへろへ
ろ矢は、何程の事がございませう、鎧の袖で拂ひのけ蹴
散らせばそれでしまひで、夜の明けぬ中に勝負がついて
しまひます。」と遠慮もなく、思ふまゝに述べ立てた。頼
長はそれを聞いたが、さう易々行へるものでないと言

せらるべきに、道にもあらぬ御計らひが何にならう。義朝は武略の奥義を究めてゐるから、今夜は必ず寄せて来るだらう。口惜しい事だ。」と言つたが果してさうであつた。

朝廷では義朝が夜討の議を申し上げたところが、すぐにお任せになつたので、義朝・清盛は各、精兵を率ゐ、夜に乗じて白河殿に攻寄せた。上皇方では大騒ぎとなり、今はこゝで將士の心を勇ませる爲に、俄に官位を昇されたので爲朝も藏人になされたけれども、「人々は何にでもなり給へ、爲朝はたゞ本の鎮西八郎で澤山です。」と言つて防禦の陣に向つた。已に合戦は始まつて清盛が勢から五十騎ばかり爲朝の手に押寄せた。「こゝを固め給ふは誰人ぞ、名乗り給へ。かく申すは安藝守(清盛)の郎等に伊勢國の住人故市伊藤武者景綱。」と名乗るこゝ、爲朝はこれを聞いて、「汝の主の清盛でさへ不足と思ふのに、景綱なら引退け。」と言ひ放つたので景綱は大いに怒つて、「下筋の射る矢が立つか立たぬか御覽せよ。」と引しほつて射たが、爲朝は事こもせず「汝の詞の優しさに矢を一つ與へるぞ。うけて見よ。」とひようこ射れば、まつ先の一人を射通して餘る矢は次の者に中つた。その弓勢に恐れて平氏の一軍は終に進ま

ず、清盛も軍を歸した。獨り山田小三郎伊行は馬を廻らし、名乗りを上げて苜音高く切つて放つこゝ、爲朝の左の草摺を射通した。一の矢を射損じて二の矢を番へる所を、爲朝は能引いて射放つたが、ねらひあやまたず、伊行は馬から倒に射落されたので、いよく此の門へ向ふ者もなかつた。

夜は漸く明けて來た。義朝は鎌田次郎正清に百騎ばかりを添へて進ませたが、政家がよつ引いて放つた矢は、八郎の冑に中つたので、爲朝は大いに腹を立て、「おのれ、手取にしてやるぞ。」と驅け出すこゝ、その郎等二十八騎が續いて走つて行く。鎌田は驚いて逃走する。義朝は二百騎を率ゐてやつて來て、火が出る程に戦つた。義朝はその日赤地の錦の直垂に黒絲織の鎧を着、鉞形打つたる冑をつけ、黒馬に黒い鞍をおいて乗つてゐた。大音をあけて「清和天皇九代の後胤下野守 源義朝が大將軍の宣旨を蒙つて馳向ふのであるぞ。もし一家の者ならば速かに陣を開いて退散せよ。」と叫ばはるこゝ、爲朝は聞きもあへず、「父判官殿院宣を蒙り給うて御方の大將軍たるその代官として、鎮西八郎爲朝が一陣を承はつて固めて居りますぞ。」

「答へる。義朝は重ねて「さては弟よ、兄に向つて弓引くは天罰を恐れぬか。」と言ふ、
 爲朝はまた「尤もながら、正しく院官を蒙られた父に向つて弓を引きなざるのはいかゞ。」
 言ひ返すに、義朝も道理に詰つてその後は音もしない。合戦は今やたけなはこなつた。兩軍
 互に名を知り、顔も見知り合つてゐるから、恥を思つて一步もひるまず、千騎が十騎になる
 までも果てる様子も見えなかつた。義朝は使者を内裏へ遣はして奏請させ、風上へ廻つて火
 を放つに、見る／＼院の御所に吹懸け、猛火は焰々こしてもえあがつた。院方の諸將も今は
 拒ぎかねてもろくも敗北し、思ひ／＼に落ちて行く。上皇は仁和寺に入つて出家し給ひ、
 頼長は奈良へ逃走したが路で流矢に中つて薨じた。この戦はもこ藤原氏の權勢の争に出
 でて、難を皇室にかけ奉り、源平の二氏も亦その中に引入れられたのである。その戦ふや
 父子、兄弟、叔父甥互に敵味方に別れたあさましい戦であつたから、後の評者が「道徳地
 を拂ふ。」と言つたのも尤もである。戦がすんでから爲義は義朝をたのんで降り、忠正は清
 盛をたのんで降つたが、清盛は命をうけて忠正を斬つてしまつた。義朝も父を斬るべき命を

うけて大いに愾き、己れの功に代へて父の死を宥されんことを請うたが許されないので、や
 むなく鎌田正清に害させた。義朝の弟五人も殺された。爲朝は特に死一等を減じて伊豆の
 大島(東京府)に流された。上皇ものがれ給はず讃岐(香川縣)に遷され給ひ、九年間その地におは
 して崩ぜられた。此の亂を世に保元の亂と言ふ。
 保元の亂は戦として見るに足るほごに大きい戦ではなかつたけれど、政治上には甚だ
 重大な事變であつた。義朝清盛等の力によつて上皇方の敗北となり、亂は速かに平定したか
 ら各々重賞を蒙つた。しかし此の亂に於て義朝の功が最も大きかつたけれども、源氏は此の
 亂の爲に一族の勇士を多く失ひ、その勢力の半ばを減じたのに反し、清盛の勢望は漸次義朝を
 壓するに到つた。後白河天皇は在位僅かに三年で院に退かれ、二條天皇(第七十)
 (第七十)・高倉天皇(第八十)・安徳天皇(第八十)・後鳥羽天皇(第八十)の御五代三十三年の間院政
 を聽き給うた。時に藤原通憲(信西)は上皇の御信任を得て非常に勢があつたので、義朝は
 これを結んでその勢力を回復しようとして、自分の娘を通憲の子の嫁にしようとしたが、

通憲は源氏を嫌つてその請を斥け、却つて清盛の娘を嫁に迎へたので、義朝は益々不平であつた。その頃藤原信頼も上皇の寵を得てゐたが、近衛大將ならせて戴きたいと奏請したのを、通憲がお諫め申した爲、上皇はその願を許されなかつたので、信頼は通憲を怨み、遂に義朝と結ぶことになつた。

義朝の心に似たり秋の風。

芭蕉

二條天皇の平治元年（紀元一八一九年）十二月清盛が子重盛等をつれて熊野に參詣した留守に、信頼・義朝は俄に兵をあげ、その夜上皇の御所三條殿を圍み、上皇を内裏にお遷し申して、天皇と共に押込め奉つた。信頼はほしいままに大臣大將となり、義朝を播磨守とし、その他味方の者に官位を加へた。その敵にいらまれた通憲は逃れて大和へ走つたが、遂に逃けることができず、追跡されて殺されてしまつた。清盛は此の變を聞いて「如何しようか。」と迷つたが、重盛は「君が逆臣に取籠められ遊ばすのに、さうして武臣としてお救ひ申さずにおけませうか。」と諫めたので急ぎはせ歸つた。清盛は謀を以てひそかに天皇を己が六

波羅の第へ迎へ奉り、上皇もまた密かに脱して仁和寺に御幸なされた。

そこで信頼・義朝等は二千餘騎を以て内裏を防ぎ、陽明・待賢・郁芳などの諸門を固め守つた。清盛は重盛を始め一族の者にこれを攻めさせた。軍に臨んで重盛は「年號は平治である、都は平安城である、我等は平氏であるから、三事相應じてゐる。敵を平けること何の疑ひかあるべきぞ。」と言つて士氣を鼓舞し、三千餘騎を三手に分け、陽明などの三門へ一度に攻つて押寄せた。今まで由々しく見えた信頼は俄に顔色が青ざめ、紫宸殿を下るにも震へて下れない。馬に乗らうとするが、人並すぐれた大の男が大鎧を着てゐるし、馬は大きいし、乗りわづらうて、舍人七八人がよつてたかつて擔乗せるに、あまりに押過ぎて向の方へ乗り越して、さうして打向きに落ちた。急ぎ引起して見れば、顔には砂が一面について、鼻血が見苦しく流れてゐた。やつと待賢門へ行つたが、そこへ重盛が五百騎ばかりで押寄せ、大音聲で「此の門の大將軍を信頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛、生年二十三。」と名乗りかけるに、信頼は返事もせず、「それ防げ侍ごも。」

「此の手の大將は誰人ぞ、名乗り給へ。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子、鎌倉悪源太義平言ふ者ぞ。生年十五歳に武藏の大藏の軍に大將として、叔父帶刀先生義賢を伐つてから、度々の合戦に一度も不覺の名を取らず、年積つて十九歳、見參せん。」と叫んで五百騎のまん中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縦横十文字に敵をさつと蹴散らして、「葉武者共には眼をかけるな。大將を組んで討て。」と下知したが、平家の侍は大將を組ませじ中を隔てる。悪源太を始め十七騎の兵共は、重盛に目をかけて、大庭の椋の木の中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻し、組まう／＼とぞ採みつけた。これに驅立てられて平家の五百餘騎はさつと引退く。重盛は弓杖ついて馬の息

亂の治平六一



ついでに自由自に常非はひかつ筆、れらへ傳と筆恩慶吉住。す示を部一の幸行羅波六、で節一の巻繪語物治平。るあで畫名たいかにく如がる見りたあの日を動活の馬人

をつがせる所へ筑後守家貞が参つて、「あつばれ平將軍（貞盛）の再來かな。」と響るのを聞いて、今一度驅けて、家貞に見せようと思つたのか、更に新手の五百餘騎を引具して、また掠の木まで攻寄せた。悪源太は再び驅け向ひ、「只今來たのは皆新手だが、大將は元の大將重盛ぞ。今度こそはもらすな。」と下知するに、勇みに勇む十七騎は我先にすすんで行く。悪源太は弓をば小脇にかい挟み、鎧ふん張り、突立ち上り、左右の手を揚げ、「幸に義平は源氏の嫡々だ。御邊も平家の嫡々だ。よき敵ぞ。寄れや、組まう。」と言ふまゝに、先の如く掠の木の下の追廻して、五六度までも揉みあはした。重盛はこても組めぬと思つたのか、また門を出て引退く。悪源太は二度までも敵を追ひまくり、弓杖ついて馬に息をつがせる所へ、義朝は遙かにこれを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵は度々驅入るのだ。あれ速かに追出せ。」と言つてやつた。「畏まりました。進めや者共。」とて色も變らぬ十七騎、共に討つて出て、敵五百餘騎の中へ面も振らず割つて入るに、浮足立つた平家勢は、馬の足を立てかねて逃走るのを、義朝は「我が子ながら、義平はよく驅けたものかな、あゝ駈けたぞ。」と

常 磐 御 前

磐はやした。さる程に義朝・義平は関をつくつて六波羅に押寄せたので、清盛もいよく矢面に立つて戦ふ。兩軍は互に入亂れて、陽に開き陰に閉ぢ、こゝを最後と戦つたが、源氏は今朝よりの合戦に疲れてゐるのに、平家は新入替へノ戦つたので、源氏は終に打負けて退いた。關東に下つて再舉を計らうとして分れノノに降つて行つた。義朝は尾張(縣)の長田忠致を頼つて行つたが、忠致は譜代の家人であるのに心がはりして、翌永曆元年正月三日の夕、湯殿で殺させた。義平もやがて平氏に捕へられて誅せられた。その弟頼朝も捕へられて斬らるべきであつたが、清盛の繼母池禪尼は、頼朝の姿が禪尼の亡子に似てゐるに聞いて哀れがり、重盛を呼んで助命を請はせた。清盛も流石にそれだけは困つたが、やかましく口説くので、清盛もやむを得ず、頼朝を伊豆の蛭島(縣)へ流した。

義朝の妾常磐の腹に幼い男兒が三人あつたので、平家もきびしく探索させたから、常磐は子供をつれて一旦大和へ逃けたので、平家は探しあぐみ、常磐の母を捕へて拷問した。「母の命を助けようと思すれば三人の子供は斬られるだらう。子供を助けようと思すれば老母を失ふ。

さうしようか。「と思ひわづらつたが、親に孝養する者をば、佛神もお助け下さる言はれてゐるから、子供の爲にも悪くはなからう。「と思ひ續け、三人の子供を伴なつて泣くく京へ歸つた。さて六波羅へ行き、取次を以て清盛に母の助命を願ふに、清盛は聞いて「子供を相具して參つた事は神妙である。「と言つて、やがて對面するに、二人の子を左右の脇におき、幼き者を抱いてゐた。涙を抑へて「母は本より科のない身でございませうから、お免し下さいませ。子供の命をお救ひ下さいは申しませぬ。けれども高きも卑しきも親の子を思ふ習は皆同じでございませう。私も子供を失ひましては、甲斐なき命を片時も生きながらへてゐられません故、先づ私をお失ひ下さつて後、子供をさうこもお計らひ下さいませれば、有難き仕合せでございませう。「と口説いた。その時六つの子は母の顔を見上げて「泣かないで、よく申し上げて下され。「と言へば母はいよく涙に咽んだ。清盛はさしも心強い人であつたが涙を催し、なみるる侍も皆袖をぬらした。遂に頼朝をゆるす上はそれよりも幼い者を誅するわけにも行かないので、三人の子は宥してやつた。その末弟が彼の牛若丸で、當時は二

歳であつた。

叛亂の張本人藤原信賴は去つて仁和寺へ参り、後白河上皇におすがり申して乞を願つたが遂に誅せられ、その黨數十人もごもに罪せられた。世に此の亂を平治の亂と言ふ。保元の亂後僅かに三年であつた。

親の罰湯殿であたる松の内。

(川柳)

垢すりの糠のミ長田世辭をいひ。

(同)

一門の仇は禪尼が慈悲から出。

(同)

保元平治の兩度の亂によつて、今まで盛んであつた源氏の一門は或は殺され或は流されて、その勢力は全く地を拂つたのに反し、平氏は次第に盛大となり、藤原氏を壓伏するに到つた。

第二十五 平氏の繁榮

平治の亂に源氏の勢を全滅させてから、平清盛の威勢は旭日の昇るが如く、忽ちにし

て政權の中心を握るに到つた。始め父忠盛の餘光を以て官位の昇進することも比較的早かつたが、此の亂の後の官位の昇進は實に驚くべきものであつて、六條天皇の御代には平治の亂後十年ならずして従一位太政大臣に昇り、輦車で宮中に入出入するこゝを許された。太政大臣の唐名を相國と呼ぶ故、世に清盛を平相國と言ふ。幾ばくもなくして太政大臣をお断り申したが、特に播磨・肥前・肥後三國を賜はり、永く子孫に傳へさせられた。ついで病を以て出家し淨海と號したので、世に太政入道と言はれた。清盛は前に別邸を西八條に設けて善美をつくしたが、また別莊を攝津の福原(今の神戸)に營んで奢りを極めた。重盛は正二位内大臣に進んで進んで薨じたが、その後その弟宗盛は従一位内大臣に進み、清盛の弟頼盛は正二位権大納言に昇るなご、一族の公卿たるもの十餘人、殿上人三十餘人、一門の莊園は五百箇所の多きに達し、領國は日本六十六箇國の半ばに及んだので、藤原氏は全く勢力を失ひ、攝政關白に任ぜられても、たゞ員に備はるだけのこゝであつた。されば清盛の妻の兄平忠時は「平氏の一族でない者は人ではない。」と言ひ誇つた位であつた。

六條天皇は五歳で御位を八歳になる皇叔父高倉天皇にお譲りになつた。五歳の上皇はこれより外には、昔にも後にもあらせられぬ。これは高倉天皇の御母が清盛の妻の妹におはしたからで、いかに清盛が權をほしいまゝにしたかゝわかる。さうして此の御讓位は實に清盛の入道した年のことであつたが、此の後是一段の勢を加へ、僭上が甚だしく、天下の事は皆その意のままになり、出世を望むものは、だれもその一門に結ばうこして車馬は門前に滿ち、堂上は花の如くに榮えた。入道相國の計で十四五歳の童を三百人よりすぐつて、髪を禿に切りまはし、赤い直垂を着て、京中を歩かせた。平氏の事を惡様に言ふ者があれば、相伴なつてその家に亂入し、器財をこぼち、その者を擲めて清盛の屋敷六波羅に引立て、行くのであつた。されば目に見、耳に聞いても詞にあらはす者はなく、六波羅さへ言へば、道を通る馬・車も皆傍へよけて通る程であつた。

ゆくこしや六波羅禿おほつかな。

召波

高倉天皇は學問を好み給ひ、英明にましましましたが、時を得られずして聖徳を顯はし給ふに

由がなかつた。御幼少の時紅葉の樹を獻する者があつた。帝はその木を愛せられ、よく守らせられたのに、一日心なき仕丁共が枝を折つて薪こし酒を温めて興じてゐた。帝は少しも御氣色を變じ給はず、おもむろに唐詩を吟じられて、「林間に酒を暖むるに紅葉を焼く。風流な者ごもかな。」と宣ひ、罪をお糺しにならなかつた。清盛は藤原氏にならひ、皇室の外戚になつてその地位を固めようこして、その女徳子を進めて、女御となし奉つたが、後に中宮なられた。建禮門院に申す。時に高倉天皇の寵愛し遊ばした小督言ふ女房があつた。志まめやかに宮仕へを勤め、琴には殊に妙をえた方であつたが、入道相國の怒にふれて「我が身のうはごもかくも、君の御爲に悪くては。」と思ひ、或夜内裏を紛れ出て、行方も知らず後をかした。主上には御歎き斜ならず、御涙にのみ沈み遊ばした。頃は八月十日過の事であるから、さしも限なく晴れきつた空であるけれども、主上は御涙にくもらせて、月の光もおほろに御覽ぜられた。夜がふけて御宿直に參つて彈正大弼仲國を御前近う召され、「誠か、小督は嵯峨の邊に在るに申す者が有るぞ。尋ね求めてくれよ。」と仰せられたので、仲國は拜承し

内裏から御使を賜はるやうな所ではございません。お門違ではございませんか。「言ふので、仲國は返事をしたら門をしめられよう、黙つて無理に押開けて入つて行つた。妻戸の際の縁にゐて、「何故にかやうな所にお出で遊ばします。君はあなた故にいたく思し召し沈ませておいでになりますぞ。唯かう申しては、上の空にお思ひなさるでせう。御書を賜はつて参りました。」取出して参らせる、傍に居つた女房が小督に渡した。あけて見る、誠に君の御書であつた。やがてお返事を書いて引結び、女房の装束一重添へて出した。仲國は「お返事は結構でございますが、別の御使は違ひますから、直の御返事を承はらないで、さうして歸れませう。」言ふ、小督も成程、自ら口で返事をした。「入道が餘りに怖ろしい事ばかり申す、聞くのが淺ましく、或夜ひそかに忍び出で、今はかやうな所に住む身であるから、琴弾く事もありませんでした、明日から大原の奥へ参る積りであります故、主の女房が今夜だけの名残を惜しんで、今は夜も更けたから立聞く人もありますまいと勧められたので、昔の事も流石になつかしく、手馴れた琴をひいて、易くも聞出されました。「涙をミ

て御書を賜はり、明月に乗じて鞭をあけ、西を指して歩ませた。「小鹿鳴く」彼の基俊卿の詠じた嵯峨野の邊の秋の頃は、まことに物哀に感ぜられた。諸所方々を探したが中々わからない。家の主人の名を知らぬので、誠に空な尋ね方ではあつたが空しく歸り参つたら、却つてこゝへ來ないよりも悪からうと思案にくれたが、「もしや月の光に誘はれて法輪寺へ行かれたのかも知れない。」その方へ向つて行く、龜山の傍近く松の茂みに、幽に琴の音が聞える。峰の嵐か松風か、尋ねる人の琴の音が、覺束なくは思はれたが、駒を早めて行く内に、片折戸した家の中からいこも妙なる琴の音が聞えて来る。止つてこれを聴けば、少しも紛ふ方なき、小督の爪音であつた。仲國は「あれは曲こそあれ、想夫戀。君の御事を思ひ出して弾きなさるのであらう。」腰より横笛抜き出し、調子をあはせてちつと鳴し、門をぼくくこ敲く、やがて琴を弾き止めた。「内裏から仲國が御使に参りました。開けて下さい。」敲いても、返事してくれない。や、あつて内から人の出る氣配があるので嬉しいと思つて待つてゐる、錠をはづし門を細目にあげ、幼い小女房が顔ばかり指出して、「こゝはさやうな

いめかねるこ、仲國もそゞろに涙に袖を絞つたのである。や、あつて仲國は涙を抑へて「明日から大原の奥へお出でになるこは、定めて御様なごをお變へ（出家す）なさるのでせう。君の御爲をお思ひなさるなら、決しておこげ遊ばすな。」こて召具した仕丁を置いて守護させた。やがて小督の厭がられたのを、様々になだめて内裏にお伴なひ申した。入道相國はこれを聞いて、後に強ひて尼に姿を變へさせた。出家はもこより望であつたが、心ならずも尼に成され、濃き墨染にやつれ果て、嵯峨の奥に住んだと言ふ。

かく專横であつたから、「驕る平家は久しからず」、清盛を憎むものが次第に増加し、始は平氏を引立てられた後白河法皇も今は殊の外に忌みうこんじられるやうになつた。治承元年（紀元一八三七年）には法皇の近臣藤原成親・僧西光・平康頼・僧俊寛等が俊寛の別荘である京都東山の鹿が谷に集つて、清盛を討たうこ謀つた。しかし謀はすぐ露はれて、西光は斬られ、成親は備前に、康頼・俊寛及び成親の子成經の三人は鬼界島（鹿兒島縣）に流された。清盛は法皇もこれに與り給ふ由を聞き、お怒み申し、押込め奉らうこして兵を集めた。重盛はこれを

聞いて大いに驚き急ぎ、父の邸へ行つて門の内に入つて見るこ、父入道は腹巻を着てゐるし、一門の者は皆思々の鎧を着て居並び、家人郎黨が縁にも庭にも充ち満ちてゐて、今にも打つて出る様子であつた。重盛が烏帽子直衣に指貫をはいてしづくこ、大勢の中を分けて行く様は事の外に見えた。清盛は流石に恥かしく、腹巻の上に素絹の法衣をあわて、着たので、胸板の金物が少しはづれて見えるのを、しきりに隠さうこしてゐた。重盛は父の前へ着座したが、暫くは語も出ない。や、あつて淨海入道が今度の企を述べるこ、重盛は聞きも終らず、はら／＼涙をこぼした。やがて涙を押ぬぐつて言ふやう、「唯今の仰せを承はつて、當家も早や末かこ覺えます。人は運命の傾きかける時は必ず悪事を思立つものだこ申します。また御有様をうかゞひますこ、更に現の事こも思はれません。恐れ多い事ながら、暫く御心を静めてお聞き下さい。先づ世に四恩こ申す事は、一に天地の恩、二に國王の恩、三に父母の恩、四に衆生の恩の事でございますが、中にも最も重いのは朝恩であります。普天の下王地でない所はありません。まして、先祖にもまだ無い太政大臣をお極め遊ばし、重盛のやう

な無才のものも大臣の位に上りました。そのみならず、國郡の半ばが一門の所領になつた。ここはこれ實に莫大の朝恩ではありませんか。此の大恩をお忘れになつて、濫りがはしくも法皇をお移し参らせられるならば、天照大神・正八幡宮の神慮にもお背きなさるこゝでございませう。抑々日本は神國であります。神は非禮を受けられません。すでに成親卿を召置かれた上は、たゞひ君がごんな不思議を思召し給ふごも、退いて事の由を陳じ申し給ひ、君の御爲に益々奉公の忠勤をお盡しなさつたら、君も思召し直し給ふ事がよもやない事はありますまい。君の御恩の深い事を思つてみるに、叶はないまでも私は院中をお守り致します。重盛の身に代り命に代らうと契つた侍も少々はございます。ほんまに悲しいこゝでございませう。君の御爲に奉公の忠を盡さうとすれば、山よりも高い父の恩を忘れなければならず、不孝の罪を遁れようとするれば、君の御爲には不忠の逆臣となるのでございます。進退は窮まりました。是非お望を遂げようと思召すなら、先づ重盛の首をお召し下さい。」「直衣の袖をしほりながら、泣く泣く諫めたので、さすがの父入道も口説き立てられてしぼ／＼



と士武のく多たけ着を胄甲るすとんで出でつ打もに今、でのもたし示を様有た来へ敷屋の父に爲るめ諫を父が重盛平。筆(八の治明)湖廣橋高。るあていがるくよを照對のと盛重む歩とつしついで姿衣直

思ひ止つた。

鹿が谷みんなが道をかへて来る。

(川柳)

清盛は意見いはるゝ年でなし。

(同)

此の變後間もなく藤原成親は配所で殺されたが、翌年になつて中宮(建禮門院)御産の御祈禱の爲、大赦を行はれた時多くの罪人が赦された。鬼界島に流された者の中でも、康頼及び成経は召還されたが、俊寛僧都だけは赦されなかつた。僧都は平家の思ひ忘れか、さうした事か、天に仰ぎ地に伏して泣悲しんだが、さうもしようがない。こゝに僧都が不便に思つて召仕つた童があつた。名を有王と言つた。二人は召還されて京へ上つたが、我が主はお見えにならぬ。何時赦免があることも分らないので、僧都の女の忍んでゐた所へ参り、「今は如何でもしてあの島へ渡つて、御行方を尋ねたく存じます。御文賜はつて参りませう。」と言へば、斜ならず悦んで手紙を渡した。暇を請うてもよも許すまいと、父にも母にも知らせず、主を思ふ一心に遙々尋ね下つた。件の島に渡つて見れば、都で幽に傳へ聞いたのは物の數でもな

い。田もなく畑もなく、里も村もなく、人はゐるけれども言ふ詞は聞知らぬのである。「法勝寺の執行俊寛僧都に申す人の御行末を知つてゐませんか。」と問うても、法勝寺にも執行も知つてゐたら返事するだらうのに、唯頭をふつて知らぬと言ふ。その中に或者が「さやうの人は三人ゐるが、二人は召還されて都へ上つた。今一人は残されて、あそここゝ迷ひ歩いてゐるが、その後は知らない。」と言ふ。もしや山の中に居られるか、峰によぢ谷に下つて探したが知れぬ。海の邊で尋ねても、渚に足跡をつける鷗より外に訊ねる者もなかつた。或朝磯の方から、瘦衰へた老人がよろほひつゝ出て来た。本は法師であつたと言へるが、着物物はほろ／＼にさけて、絹・布の分も見えない。片手に荒布を持ち、片手には魚を貫つて持つてゐる。都で多くの乞食を見たが、これ程の者はまだ見なかつた。もしかやうな者でも、主の行方を知つてゐるかと思つて、「こゝに都から流されなかつた俊寛僧都に申す人は居られませんか。」と問へば、童こを見忘れたであらうが、僧都はさうして忘れよう。「われこそ其れよ。」と言ひも果てず、手に持つた物を投げ捨て、砂の上に倒れた。僧都はそのまゝ、氣絶した。

やうになつたのを、有王は膝の上にかきのせて、いろ／＼と介抱するに、少し人心地も出て来て、扶け起され、「誠に汝が多く波路を凌いで、遙々ここへまで来てくれたのは誠に有難い。しかし更に現こも夢も分らぬから、もし夢でもあらうか。いかに有王、夢なら覺めた後はさうしよう。去年に少將(藤原)や判官入道(平康)が迎の時、淵に身を投けたらよかつたのに、由なき少將が今一度都の音信を待てなご慰め置いたのを、愚にも若しや頼にして今日まで永らへて来た。」と言ふ。さてその住居した小屋に伴なはれて、そこで色々積る話をしながら、主の介抱をした。かく俊寛は有王に遇ひ心の張もゆるんだか、次第に弱りが、有王がこの島に渡つてから二十三日目に亡くなつた。有王は空しい姿に取付き泣きこがれたが、やがて白骨となり、首にかけて再び都に歸つた。僧都の女に見せるに、伏しまろんで泣き悲しんだが、その後尼となり父母の後世を弔つた。有王も遺骨を高野に納め、法師になつて同じく主の後世を弔つたと言ふ。

治承三年(紀元一八三九年)に内大臣重盛は病により官を辭したが、その年に薨じた。忠孝の

志が極めて深く、沈着で勇氣があり、しばし父を諫めて大過なからしめた人であつたが、誠に惜しむべき事であつた。さればその後は入道相國の無道は益々つり、後白河法皇が關白基房と議つて重盛の領地を召上げられるや、清盛は大いに怒つて基房を流し、法皇に親近しまつれる多くの朝臣をそれらに罪し、遂に畏くも法皇を鳥羽殿に幽し奉るに到つた。

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分哉。

燕村

高倉天皇は父帝の御幽閉を悲しまれ、清盛をお厭ひのあまり御病ひ遊ばしたので、治承四年皇位を安徳天皇にお譲りになつた。天皇は御年が三歳、御母は清盛の女にまします故、清盛の威權は愈々重くなつた。しかし此の時は既に平氏は勢力の絶頂期を越して、漸次衰運に向ひつゝあつたのである。

清盛はかくの如くすこぶる專横を極めたが、その專横な反面には世の利益もなつた事も少くなかつた。宋との貿易を盛んにしようとして兵庫の港を修復したが、風波が荒かつたから、これを防ぐ爲に經島を築いて、船舶の便をはかり、また安藝の嚴島の神を信じ、かつて後

白河法皇・高倉上皇の御幸を請ひ奉つたこともあつたが、その爲に安藝の音戸の瀬戸を開鑿し船舶の往來に利便を與へた。更にその尊崇した嚴島神社の規模を擴張し、すこぶる壯麗に再建した。神社は山にかゝり海に臨み、よく自然の山水に調和し、融合した優美な建築である。潮が満ちて來るに、大鳥居も廻廊も水に浮び、燈籠の火が水に映るところはまたなく美しい。清盛は一門の人々と共に法華經を卷物に寫して嚴島神社に寄附したが、その經卷は色々の彩色や模様のある紙に色々の繪具で經文を謹書し、またその卷物の始に人物山水等の優美な繪をかいてあるし、卷物全體にしても裝飾が非常に見事であつて、製作もよく意匠も中々すぐれ、當代美術の粹を集めたものである。また清盛は海外の形勢に鑑みて太宰府の荒廢してゐたのを起した事もあるし、深き慮りのあつた人であつた。或年宋から始めて太平御覽と言ふ大部な本が輸入されたら、早速これを人に寫させ、寫本を手元に止めて、もこの本を高倉天皇に献上したこともあつた。

薰風や燈立てかねつづく島。

燕村

第二十六 平氏の滅亡

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。奢れる者は久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。」
「こは平家一門の盛衰を記した平家物語開卷第一の文章である。古來一家一門の盛衰は多いが、平氏の如く忽ちにして繁盛の絶頂に達し、忽ちにしてまた滅亡に沈んだものは他に例がない。清盛はその勢にまかせて思ふままに驕りたかぶつたが、その晩年には早や平氏衰滅の兆を現したのである。」

源頼政は源氏の古老である。平治の亂には世上の大勢を通觀して義朝に従はず、かへつて清盛に屬したので大いに清盛の優遇をうけ、平氏の盛世に於ても、源氏の中で獨りその出世をするこゝが出来た。後に三位になつたのも實に清盛の好意からであつた。しかし後には平氏の我がまゝを憤り、實は心から平家に服してゐなかつたので、安徳天皇踐祚の年治承

四年(紀元一八四〇年)には既に七十七歳の高齡であつたが、天下の輿論を代表し、高倉上皇の御兄以仁王の令旨を奉じて兵をあげた。これ實に平治の亂から二十一年目、清盛が太政大臣になつてから十三年目であつた。頼政は義朝の弟行家を語らひ、ひそかに王の令旨を諸國の源氏に傳へさせたが、到る所響の物に應ずるが如く、隠れてゐた源氏の一族は一齊に令旨を奉じて、兵を起した。しかし頼政の企はずぐ洩れた。清盛は兵を遣はして以仁王の宮を攻めさせたので、王は遁れて大津の三井寺(園城)に入られた。王の臣長谷部信連は王宮を守り力戦して捕へられた。頼政は園城寺の僧兵を以て當る計畫であつたが、成功しなかつたので、止むなく王を奉じて南都の僧兵を頼りに奈良へ向つた。清盛は急にその子知盛・重衡等を大将として大兵を以て追撃させたから、兩軍は宇治で衝突した。頼政は宇治橋を引いて一時はこれを防戦したが、しかし衆寡の勢敵せず、軍は忽ちに敗れて、頼政は王を奈良路へ落しまるらせ、自らは宇治の平等院にはいつて自殺した。その辭世に

埋木の花咲く事もなかりしに身のなるはてぞ哀れなりける。

の三十一文字が傳へられてゐる。平等院の庭の扇の芝は、その自殺の跡だと言ふ事である。以仁王は南都に赴き給ふ途で、平氏に追はれ給ひ流矢に中つて薨ぜられた。頼政の一舉はかくもろくも失敗なつたが、しかし一葉はこゝに落ちた。天下は正に秋に入つた。これより諸國の源氏は争ひ起つて平氏はその討伐に東奔西走するに到つたのである。

頼政は弓射に名高く、和歌も巧であつた。久しく内裏を守護したが、地下にのみあつて御殿に昇るこゝを許されなかつたので、

人しれぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな。

と詠んだので、不便であるこゝで昇殿を許された。その後も久しく四位であつたので、

上るべき便りなければ木の下に椎を拾ひて世を渡るかな。

と申ししたので、三位に昇されたと言ふ。望が足つたから入道したので、世に源三位入道言はれた。二條天皇の御代の事であつた。五月雨がふりつゞく頃、毎夜東三條の森の方から黒雲が一むら立つて来て御殿の上を被ひ、鶴と言ふ鳥が鳴き玉體を苦しめ奉つた。尊い高僧

に祈らせられてもその驗がないので、頼政が多く武士の中から選び出されて退治すべき仰せを蒙つた。畏まつて参内し、頼み切つた郎等猪早太を唯一人召具し、我が身に二重の狩衣に山鳥の羽で作いた鋒矢二本、滋藤の弓を取りそへて、紫宸殿の大床に伺候した。夜もしん／＼とふけ渡り、例の刻限となるこゝ、黒雲が一むら立ち來つて御殿の上に棚引いた。頼政はきつと見上げるこゝ、雲の中に怪しい物の姿がある。射損するものなら再び生きてるまいと思ひつゝ、矢を取つて番へ、南無八幡大菩薩の心の中に祈念して、能引いてひようこ放つこゝ、手答へしてはたこ中る。「兵庫頭源頼政變化の者を仕つたり。」と叫ぶこゝ、猪早太はつこよつて落ちる處を押へて、柄も通れぬ續け様に九刀も刺通した。その時上下手々に火をこもして見に集まるこゝ、頭は猿、軀は虎、尾は蛇のやうで、鳴く聲は鶴に似てゐる、實に希代の怪物であつた。かくて帝の御惱も忽ち宜しく成らせられたので御感斜ならず、御劍を下された。宇治左大臣はこれを承はり、頼政に傳へようこ御前の階を半ばばかり下る折から、雲居に高く郭公が二聲名乗つて通るのを聞いて、左大臣が

郭公名をば雲井にあぐるかな。

詠むこ、頼政は

弓はり月のいるにまかせて。

こ仕り、御劍を賜はつて退出した言ふ。

鶴を見に百人一首程寄りたかり。

けさ見れば四五箇所鶴に引かゝれ。

その暗さ早太櫻につつかゝり。

頼政の變の翌月、清盛は南都北嶺の僧徒の勢力をさけ、また東國に起らんこしつゝある源氏を防ぐ便利を圖つて、安徳天皇・後白河法皇・高倉上皇・中宮を奉じて、都を攝津の福原(神戸西部)に遷した。けれども此の爲にいたく京都の人心は動搖し、益々世人が平氏を怨むやうになつたし、かつ新都は土地が狭くて不便であつたのに、その上延暦寺も還幸を奏請したから、その年の中にまた舊都へかへられた。

(川柳)

(同)

(同)

落首

咲き出づる花の都をふり捨て、風ふく原の末ぞあやふき。

福原に都を遷されて間もなく、先年伊豆(静岡)に流された源頼朝は以仁王の令旨を奉じ、妻政子の父北條時政と謀つて兵を伊豆にあけた。まづ目代平兼隆を攻殺して相模(神奈川)に入つたが、まだ従ふ者が甚だ少かつたので、平家の將大庭景親の大軍と、石橋山に戦つて散々に破れ、頼朝もやつこ杉山の中に隠れた。その時梶原景時は景親に屬してゐたが策略家であつたから、密かに頼朝の成功するのを察してこれを逃れさせた。俗に此の時頼朝は伏木に隠れてゐたのだと言ふ。そこで辛うじて頼朝は難を免れ、安房(千葉)へ渡つて兵を募つた。先祖頼信以来源氏に恩威を蒙つてゐる東國の將士は争うて味方に参り、その勢力は日々盛んになつて來た。

朽木から源氏の運が芽を出し。

鐵扇でまづ蜘蛛の巢をはらひのけ。

(川柳)

(同)

清盛は石橋山の戦報をえて大いに驚き、孫維盛・弟忠度等に命じ、兵七萬を率ゐて頼朝を討たせた。頼朝は兵二十萬を率ゐてこれに向ひ、駿河(静岡)の黄瀬河に進んだ。平氏の軍は此の時富士川を挟んで陣したが、源氏の優勢なのを聞いて戦ふ元氣もない。その時甲斐の武田信義等が軍二萬を率ゐて頼朝の軍に加はつた。まだ戦が始まらない先に、或夜信義が潜かに裏から廻つて平家の後を衝かうとしたが、富士沼の水鳥が驚いて、一時にはつみ飛立つた羽音を、源氏の兵が攻めて来たもの心得て、平家の軍は大將軍を始め皆々あわてふためいて、甲冑を忘れ弓箭をおこし、我先に逃けかへつた。

落首

富士川の瀬々の岩こす水よりも早くも落つる伊勢平氏かな。

こゝに於て東國の大勢は全く一變して、關東の將士は争うて頼朝の威風に従つた。此の時黄瀬川の畔へ頼朝の末弟九郎義經が奥州から上つて兄頼朝に對面をした。義經は幼時を牛若丸と言つた。やつと一命を助けられて、鞍馬山(京都)に上り寺に居つたが、中々僧となる

考はない。晝は學問をする體によそほひ、夜は山の中に出て、人目をしのんで武術をならつてゐた。十六の年に奥州の金商人吉次と言ふ者に遇ひ、陸奥の藤原秀衡の威名を慕ひ、これを力にしようこ考へ、密かに吉次と約して俱に陸奥をさして下つた。その途次近江の鏡の宿で自ら元服して名を義經と改め、源九郎と稱したが、その夜その旅宿に打入つた熊坂長範等の強盗數人を斬り殺したこゝがあつた。遂に奥州に下つて秀衡に頼るこゝ、秀衡は厚くもてなしてくれた。後再び京に上つて陰陽師鬼一法眼に仕へて兵法の書を學び、五條の橋で武藏坊辨慶を服して家來にしたと傳へられてゐる。頼朝が兵をあけるに及び、義經は早速伊豆へ行かうとした時に、秀衡は暫く形勢を見られた方がよからうと止めたけれども、義經は潜かに逃れて陸奥を出たので、秀衡は佐藤嗣信・弟忠信等を遣はして従はせた。義經は部下二十騎程を率ゐて頼朝に面會したのであつたが、頼朝は大いに喜んで「今お前を見るこゝ、丁度故左馬頭殿(義朝)が蘇生られたやうに思はれてうれしい。」と言つて涙を流せば、義經も言ひ知れぬ喜びに暫しは涙に咽んでゐた。

富士川の役後、頼朝は平軍を追撃して西上しようとしたが、千葉常胤等が諫めて、「まだまだ油断がならぬから、まづ東國にしつかり根柢をつくる方が宜しうございます。」と諫めたので、頼朝は軍をかへして鎌倉に入った。こゝは昔、先祖頼義が安倍貞任を征伐して歸京した時に、石清水八幡宮を勸請した土地で、源氏に縁故が深く、かつ要害もよかつたのである。頼朝はまづ八幡宮を今の鶴岡に再建し、その附近に館を營んだ。それから將士が競うて邸宅を此の地に置いたので、淋しかつた東國の漁村は忽ちに繁華な武家の町となつた。

頼朝の従弟義仲も、また頼朝と前後して兵をあげて、遙かに頼朝に應じた。義仲は義朝の弟義賢の子である。その二歳の時父義賢は義朝の長子義平に殺され、義仲もまた殺されかけたが、齋藤實盛がこれを救ひ、後信濃に送つて義仲の乳母の夫中原兼遠に託した。義仲は此の後木曾の山中に成長したから、木曾冠者と言つた。幼時から源家復興の志をいだし、しばしば京都に出て平氏の様子を窺つてゐたが、以仁王の令旨を賜はるに及び、四方の同志

やがて見ん幟も近し武藏坊。也 有

を集めて勢力を作つた。頼朝が石橋山に戦つた時に、義仲もこれに力を合せようとしたが、平氏の軍に攻められて果さなかつたのである。

源頼政の企に三井寺や奈良の興福寺、東大寺が味方したので、清盛は大いに怒り、頼政の舉を平定するに間もなく、同年五月、一族の知盛や忠度を遣はして、まづ三井寺を焼拂ひ、多くの僧を罪した。南都に對しては清盛も初の中は、穩便の態度であつたが、諸方に源氏が旗をあけ、殊に富士川で平氏が大敗北したので、奈良法師は中々平氏の命を奉じなかつたら、同十二月清盛は一族の重衡に通盛をさしそへて南都を攻めさせた。平氏は聖武天皇御願の東大寺に、藤原氏代々の氏寺たる興福寺を十重二十重に圍んで、さすが壯麗に作り磨かれた寺々を焼亡してしまつた。此の爲に平氏はいよいよ人望を失つた。後白河法皇の院宣ですぐ再建に着手された。後に頼朝もこれに力を添へたが、特に東大寺の再建には大いに盡力し、その落成供養には親しく式に臨んだ。

かく諸方の源氏が兵をあげ、平氏の人望がいよいよ失はれ、天下の形勢がはかりがたく見

える間に、治承四年も暮れて、養和元年（一八四一年）になつた。清盛は宗盛に大軍を授けて東國に向はせようとしたが、俄に病氣にかつた。病にかつたその日から、湯水も咽喉へ通らず、身の内の熱い事は焼くやうである。こても助かることも見えないので、北の方（高い身分）が枕元によつて「御心にかゝる事があるなら、仰せおかれよ。」と言ふと、世にも苦しい息の下に、「忝くも萬乗の君の御外戚として相國の位に上り、榮華を子孫に残したから、今生の望は一つも思置く事はないが、残念なのは頼朝の首を見ずに死ぬこゝで、これを何よりも本意なく思ふぞ。」と言つて遂に薨じた。歳六十四。時に閏二月であつた。

清盛の醫者は裸で脈をこり。

（川柳）

やがて義仲は漸次に勢力を得て西上を企てたが、翌壽永元年の九月に、越後（新潟）の城長茂の軍を千曲河畔（長野）に破り、その勢に乗じて越後に進み、壽永二年の五月には平維盛の大軍を越中礪波山（富山）に會戦した。義仲は夜に乘じ牛四五百匹を集めて角に松明を結び付け平家の陣後にまはり、鞭をうつて牛を追入れた。これに續いて関をつくつてぎつこ

攻るこ、山彦が答へて幾千萬の勢も分らぬ程に響いたので、平家方の膽を冷した。かくて義仲は前後に平軍を追籠めたので、平軍は東西を失ひ、弓取る者は矢をこらず、矢を負うても弓を忘れ、冑を着て甲を着ず、或はつないだ馬に乗つて鞭うつたりして狼狽を極め、我先に逃げて行つたが、暗さは暗し、道を踏みはづして名にし負ふ俱利伽羅谷に落ちこめば、あこからつゝいて落ち、二萬近くも死んでしまった。その後平軍はやうやう加賀の篠原（石川）に引退いて人馬の息を休めたが、義仲は長驅してこゝでも平軍を撃破したので、平軍はちりちりになつて京へ引返した。篠原の戦に齋藤別當實盛は赤地の錦の直垂に萌葱織の鎧を着て、鍬形打つた甲を着け、黄金作の太刀をはき、二十四差た截生の矢を負ひ、滋藤の弓を持つて、連錢葦毛の馬に乗り、味方の勢は落ちて行つても、唯一人返し合せて戦つてゐた。義仲の軍から手塚太郎光盛が進み出て名乗を掛けたが、「さては互によき敵だ、和殿を下けるのではないが、存する旨があるから名乗らないぞ。よれ、組まう。」と言ひながら近寄るこ、手塚の家來は主を討たすまいこ中に隔たつて實盛とむづこ組む。實盛は「あつばれ汝は

日本一の剛の者組んで死ぬよ。」にて首を掻切つた。そのひまに光盛は弓手に廻り、實盛の鎧の草摺を引上げて一刀さし、弱る所を組んで伏せて首をこつた。義仲の前に參つて畏まつて、「光盛は奇異の曲者を討ち取つて參りました。侍か見れば錦の直垂を着て居りますし、大將か見れば續く兵もありません。名乗れと言つても名乗りません。聲は坂東聲であります。」と言へば、木曾義仲は「あゝ夫は齋藤別當ではないか。しかし義仲が幼目に見た時も白髪まじりであつた。今は七十も越してゐるのに、この鬚鬚の黒いのは如何したのだらう。樋口次郎兼光は古い友達だから、知つてゐるだらう。樋口を呼べ。」にて召した。樋口は一目見て「あゝむさんや、齋藤別當でございます。」それなら早や七十を越して白髪になつてゐるだらうのに、その黒いのは如何だ。」と言へば、やゝあつて涙を抑へて「申し上げようとしても、あまり哀に思はれて、不覺の涙にむせびました。弓矢を取る者は少しの事にも思出の詞を前から言つて置くべき物と思ひます。實盛が日頃申して居りましたのは、六十に餘つて軍に向ふ時は、鬚鬚を黒う染めて若くしようと思ふ。その故は若殿原を争うて、先を

驅けるのは大人氣ないし、また老武者にて人の侮を受けるのも口惜しいと思ひましたが、果して誠に染めました。洗はせて御覽遊ばせ。」と言ふので洗はせて見るに、果して白髪になつたと言ふことである。その後義仲は逃ける平氏を追うて近江に迫り、延暦寺の援をえて比叡山に陣ごつた。後白河法皇は密かに延暦寺に御幸なされた。義仲を世に朝日將軍と言ふのは、その勢が朝日の昇るやうに盛んであつたからであると言ふ。

北からも一度朝日が昇るなり。

(川柳)

平宗盛はあきれ惑うてさうしてよいのかわからなかつた。北國の役に平氏の精銳は殆んど盡きてしまつた。今や勝誇る源氏は近くに迫つて、京都は危険になつたので、遂に七月二十五日、宗盛はその一族を率ゐ、安徳天皇及び建禮門院三種の神器を奉じ、火を第宅に放つて西へ走つた。此の時薩摩守忠度はたゞ一人途よりかへし、夜がふけてひそかに和歌の舊師藤原俊成の許へ寄つた。門の外から、「三位殿(俊成)に申したい事があつて忠度が參りました。たごひ門は開かれずとも、此の際までお出で下さい。」と申し入れるに「その人なら

苦しくない、お入れ申せ。」とて開けて呉れたので對面した。忠度はしめやかに、「先年御教を承はつてから、ゆめ／＼疎略には存じませんけれども、此の二三年は騷亂が打續いて、常に參上する事ができませんでしたが、一門の運命も今は早やつき果てました。就いては撰集（和歌集）の御沙汰がある由に承はつてゐますので、生涯の面目には一首なりとも御恩を蒙りませれば、草葉の蔭で嬉しう存じます。」と言つて、日來詠んだ中から秀歌を集めた一卷を取出して渡した。後に俊成が勅を奉じて千載集を撰んだ時に、忠度の情を憐み、一首だけ讀人知らずとして入れたのである。それは次の歌であつた。

さゝ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな。

義仲は法皇を奉じて入京した。義朝の敗北以來二十四年立つて、京都に再び源氏の白旗がひらめいたのである。功を以て伊豫守に任ぜられ、院の昇殿を許された。京都に天皇があらせられぬことゝなつたので、法皇は安徳天皇の御弟尊成親王を立て、天皇とせられた。第八十二代後鳥羽天皇に申し上げる。さて義仲は一擧して京都にはいつたが、その率ゐた軍隊

は糧食に窮したので、士卒は市中を荒して亂暴狼藉を働いた。その上に義仲自身も田舎育ちのこの故、朝廷の禮儀作法に通じなかつたので、公卿との折合がわるかつた。殊に功に誇つて専横の行も漸く多くなつて、一旦平氏追討の命をうけて西國へ下つたが、朝廷ではその間に義仲排斥の運動が起つたので、中途で勅命に背いて再び京都へ歸つて來て一層暴慢の行が多くなつた。それで法皇もすこぶる義仲をおいこひ遊ばし、院の近臣は密かに義仲を除かうとしたので、義仲は遂に法皇の御所を襲ひ、法皇を押込め奉つて、大いに公卿の任免を行つた。法皇は大いにお怒りなまし、密かに御使を發して頼朝をお召しになつた。義仲も頼朝とは共に源氏再興の爲に兵をあけたのであるが、各々勢を得るにつれ、互に意志があらぬやうになつたから、頼朝は法皇の勅命を畏んで、弟の範頼・義經を將として兵六萬を率ゐさせ、西上して義仲の軍を撃たせた。翌壽永三年（一八四四年）正月範頼は近江の瀬田から、義經は山城の宇治から兩道並に京都に迫つた。

始め頼朝に二つの名馬があつた。池月と塵墨とであつた。殊に池月が勝れてゐた。此の役

に頼朝の軍が鎌倉を發するに當つて、梶原源太景季は父の景時が頼朝に愛任せられてゐるので、しきりに池月を賜はらんことを所望したけれども、頼朝は萬一の折に自分が乗るべき馬である、是も劣らぬ名馬であるぞとて梶原には磨墨を與へた。それで景季は喜んで出發した。そのあくる日近江の住人佐々木四郎高綱が頼朝の館へ參つた。頼朝は「汝は近江に在國に聞いてゐた。もし我に志があるならば、此の度の軍兵上洛(京都へ上)に附いてすぐ京に上るだらうと思つてゐたのに。」と言へば、高綱は「さればでございます。誠に都近いころでありますから、御軍を待ち合せて京へ上るのが便利でございますが、軍の習、命を君に奉つて戰場に罷出る上は再び歸らうとも思ひません。今一度御別れの爲に見參にも入りたく、かつは見參致さないですぐに京上りをするのも恐れ多いと存じて罷り下りました。志はかうでございますが、一匹持つてゐた馬は傷つきました。親しい者は皆出發した後でありますから、誰に頼む事もできず、さうしようかと心配して、大名小名は皆既に上りましたけれども、まだかうして居ります。」「と答へた。頼朝は皆をも聞かず「下向のことは神妙神妙。」

定めし敵は宇治勢田の橋を引くだらう。宇治川の先陣は汝の手で渡されるかさうだ。」「と問へば「近江育ちの者でございますから、間近き宇治川の深さ淺さは委しく存じて居ります。あの手へ向ひますれば、宇治川の先陣は必ず高綱が致します。」「と言切つた。頼朝は大いに喜んで「今度宇治川の先陣を遂げて、必ず高名をせよ、我が秘藏の池月を汝に預けるぞ。」「と言つて、景季に與へなかつた池月を與へたので、高綱は恩に感じ、喜び勇んで出發した。

日數重ねて義經の率ゐた諸軍勢は悉く宇治橋の詰へ押寄せた。見れば橋を落し、河底には亂杭を打つて大綱を張り、逆茂木をつないで流しかけてある。比は正月二十日餘りの事であるから、谷の氷、峰の雪は皆消えて河水は増し白浪がしきりに立騒ぎ、水が逆巻いて鳴つてゐる。此の急流では俄に渡れさうにもなく、流石東國の勇將もためらふ様子が見えたが、その時平等院の良、橘の小島崎から二騎の武者が驅けて出た。一騎は即ち梶原源太景季で、他の一騎は佐々木四郎高綱であつた。梶原は一段許り先へ進んだ。佐々木は後から聲をかけて「梶原殿、和殿の馬の腹帯が延びて見えるぞ。此の川は大事の渡だ。河中で鞍踏みか

へして、敵に笑はれ給ふな。」と言つたので、梶原はさうかと思ひ、腹帯を解いて締直す間に高綱はつゞ追越して、河へさつゞ打入れた。梶原はだまされたと思ひ、急ぎ續いて打入れた。宇治川の流は如何に早くても池月と言ふ日本一の名馬に乗つた高綱は、見事一文字にさつゞ渡して向の岸に打上げ、鎧ふん張りつゝ立上り、大音聲に「佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや。」と言ひも終らぬ中に、梶原源太も岸に着いた。つゞいて島山重忠は部下を率ゐて渡りつゞけた。全軍がこれに勵まされて残らず渡り、大いに義仲の軍を破つた。義仲はまた法皇を奉じて北陸に走り再舉を圖らうとしたけれども、義経等の進軍が、あまりに急であつた爲その暇もなく京都を遁れて、部下の今井兼平が範頼の軍と戦つてゐた勢多へ向つたが、兼平も既に破れ主の行方を氣づかひながら京の方へ退却して來たので、二人は丁度粟津で出遇つた。東國の勢は雲霞の如く後から追ひかけて來るので、義仲は圍を破つて出て、松原に走つて自害しようとしたが、誤つて馬を深田に乘入れ、いくら鞭を打つても馬は動かない。遂に果ない戦死を遂げた。兼平も刀を含み馬上より逆まに落ちて自刃した。義仲は兵をあけ

てからこゝに僅かに三年であつた。頼朝の爲に京都から平氏を追拂つたにすぎない。朝日將軍義仲の英名は電光の如くはかないものであつた。

義仲寺へいそぎ候はつしぐれ。

兼平の塚を案山子の矢先かな。

一 茶
子 規

(義仲寺や兼平の塚は共に粟津にある)

源氏の内輪喧嘩の間に一旦太宰府にまで走つた平家は、やがて九州を従へ、讃岐の屋島(香川)によつて山陽南海を服し、勢が漸く盛んになつて更に攝津の福原に歸り、一の谷に據つて行宮を營み、まさに都に迫らうとした。此の地は北は鐵拐・鴨越の險を負ひ、南は須磨・和田の海に臨み、東西は三里、福原の舊都を包み、一の谷を西門とし、生田森を東門とした形勝の地であつた。義仲が亡んだ翌月(壽永三年)範頼・義経は法皇の勅を畏み、再び軍を進めて平氏に向ひ、範頼は東門を攻め、義経は丹波路から廻つて、西門に迫つた。所で義経は土肥實平等に西門を攻めさせ、自らは特に一の谷の後の鴨越を落さうとて搦手へ向つた。まだ二

月初であるから、峰の雪は所々に消え残つて、行軍が中々困難であつた。その上既に日はく
れ、山路は険悪であるから容易に進軍が出来ない。辨慶に道案内を求めさせたら、辨慶は遠
くの燈火を目當に行つたが、そこに老人夫婦がゐた。案内を頼むと、「私は老いて役に立ち
ません、幸に子供が居りますから、お連れ下さい。」と子供を進めた。義経は喜んでその
少年に鷲尾經春の姓名を命じ、刀馬甲冑を與へた。經春に路の險易を問ふと、「こゝは山中
第一の惡所で、こゝも馬の通れる所ではありません。」と答へた。義経が「鹿は通ふか。」と訊ね
ると「鹿は通ひます。」と答へた。これを聞いて「やあ、鹿も四足、馬も四足、西國の馬はい
ざ知らず、鹿の通る所は東國の馬には馬場だぞ。」とて、經春を案内に城北の上の山まで進ん
で行つた。夜はもう更けたけれども城の後の鶴越に登れば、東方の淀河尻・西宮から南の淡
路、西の明石を見渡され、眼の下の海岸にある平家の陣屋が一目に見られる所であつた。さ
てその夜は山中にあかし、曉に鶴越から城を眺めるに、早や西門にも東門にも合戦が始
まつてゐる。赤旗白旗が入亂れ、さきの聲は天地を響かして、射る矢は雨の如くであつた。

義経は平家の城の様子を遙かに見下してゐるが、試みに馬を少々落して見るに、或は轉んで
落ち、或は足を折つて死んだのもある。しかし鞍を置いたのは三匹共、相違なく落着いて身
振ひして立つたので、義経は「馬は主々が氣をつけて落せば、ひきくは損じるまいぞ、我を
手本にせよ。」とて先づ三十騎ばかりを従へ、真先かけて急坂を落すに、三千餘騎の兵は皆
續いて落した。壇のやうな所に止り、それから下を見れば、大盤石の苔蒸したのが十四五丈
も聳えてゐる。もう先へは進めぬと皆々あきれてゐる時、三浦十郎義連が進み出で、「我等
が方では、朝夕かやうな所を馳せてゐる。」とて真先かけて落したので、皆はこれに勢づけ
られ、續いて落した。聲を忍び、たゞ馬に力を附けて落し、落しも終らぬのにぎつと関を作
つた。平家の軍は東西二門に専ら力を注いでゐたのに、不意に後の山から攻付けられたので、
あわて返つて度を失つた。義経はこれに乗じて火を敵陣に放つと、風が烈しいから忽ちに燃
えひろがる。城兵は大いに恐れて、東西の守備は敗れ、範頼・實平の兵は東西から城中に侵入
した。宗盛は急ぎ天皇を奉じて海に浮び屋島に向つた。

此の折平家の軍では打たれた者が數を知らない程で、平重衡は捕へられ、同盛俊・忠度・敦盛等は戦死した。熊谷次郎直實は義經に従つて戦つた剛勇の士であるが、城も落ちたから、「平家の公達は船に乘らうとして、汀の方へ落て行くだらう。あつばれ好き大將軍も組みたい。」と渚をさして進んで行くに、若武者が一騎、沖の船を目にかけて五六段ばかり乗入れた。熊谷が「よき大將軍を見受け申す。正なうも敵に後を見せ給ふものかな。返し給へ。」と扇で招くに、招かれて取つて返し、渚に上る所をむづみ組んだ。取つて抑へて首を搔かうにしてよく見るに年は十五六であるが、薄化粧をして齒をかねで黒く染めてゐる。疑もなく平家の公達であつた。我が子の小次郎と同じ年頃なので、なんもなく痛はしく思つて「名乗り給へ、お助け申ませう。」と言つたが、「さう言ふ和殿は誰ぞ。」と問ふので「物の數でもありませんが、武藏の住人熊谷次郎直實。」と名乗る。「さては汝の爲にはよき敵ぞ、名乗らぬが首を取つて人に問へ、きつし知れようぞ。」と言つた。熊谷は如何にもして助けようと思つたが、折から土肥・梶原等が五十騎程で進んで來たので、我は助けても他の者はよも遁し

はすまい。「同じくは直實が手にかけて申して御後の弔ひを仕りませう。」と言つて、泣く／＼首を斬つた。首を包まうとして鏡直垂を解いて見るに、錦の袋にはいつた笛を腰にさしてゐた。熊谷は今朝夜明に城中で笛の音がしてゐたのを思ひ出し、「あの笛の主は此の人であつたか。味方の東國の勢は何萬騎あつても陣中に笛を持つ人はあるまい。さても優しいものかな。」とて、人にたづねるに正しく無官大夫平敦盛であつた。直實は義經に願つて、その笛を首にそへてその父經盛に送つたと言ふ。

わざはひは上からおこる一の谷。

(川柳)

熊谷は不性ぶしやうの手柄なり。

(同)

平家の軍はかくて四國へ去つたので、源氏の軍は追撃の爲に水軍の準備を行つてゐたが、翌壽永四年二月に義經は攝津の渡部(今の大阪)に船装ひをした。關東の兵は水戦になれないので、こゝで軍評定が始まつた。此の時梶原景時は進み出て「逆櫓を立てたらようございませう。」と言ふ。義經は「逆櫓は何だ。」と聞くに、「船にも櫓にも櫓をつけて、前へも後へもこ

ちらへも廻し易いやうに致すのでございます。「軍には一步も引くまいと思ふのに、逃仕度するとは何事だ。」と叱られて、梶原は腹を立て、「駈けるべき時に駈け、引くべき時に引き、身を全うして敵を亡ぼすのをよき大将ご申します。さやうに片意地なのを猪武者ご申します。」と言切つたので、義経は烈火の如く怒り、「猪でも鹿でも只進んで敵を倒すのがよいぞ。」とて同士軍せん許りであつた。さて義経は他の諸大名にも告げず、自分の直接の部下だけを引き具し、急ぎ暴風雨を冒して阿波(徳島)へ渡り、平家の根拠地たる讃岐の屋島に進み、火を近傍に放つて急にこれに逼つたので、宗盛等は俄のこゝこゝで敵の多寡を計りかねて大いに恐れ、再び天皇を奉じて海に浮んだ。能登守平教経は上陸して戦を挑み、義経を唯一矢に射落さうとねらつたが、源氏の方でも心得て、義経の矢面に馳塞がつたので、能登守も力が及ばない。たゞ差詰引詰め散々に射て十騎ばかり射落したが、中にも眞前に進んだ佐藤三郎兵衛嗣信は、左手の肩から右手の脇へつゝ射抜かれてさうご仆れた。義経は大いに悲しんで陣の後へ昇入れさせ、「何か此の世に思ひおく事はないか。」と言ふと、嗣信は「弓矢取が

敵の矢に當つて死ぬ事はおもひより覺悟でございませう。就中源平の御合戦に佐藤三郎兵衛嗣信は屋島の戦で、主君の御命に代つて討たれたと、末代までの物語に傳へられ、今生の面目、冥途の思出でございませう。」と言つて息も苦しげに弱り行けば義経もさめく泣いた。その中に源氏の軍は漸次に勢力を増して來た。或夕方沖より尋常に飾つた小船一艘が渚近く漕寄せた。七八段許りになるこ、船を横にしたので、源氏の軍はこれは何かと見てゐるこ、船の中から年の頃十八九許りの女房が皆紅の扇に金色の日の丸をゑがいたのを取出し、船のせがひに立て、陸に向つて差招いた。義経は後藤兵衛實基を呼んで、「あれは何か。」と問へば、實基は「射よこの事でございませう。誰かに射させられたら宜しうございませう。」と答へたので、義経は「味方で射るべき者は誰だらう。」と重ねて問ふと、「上手のものが多く居ります中にも、那須太郎資高の子與一宗高こそ殊に手はきいてゐます。」と答へた。「證據があるか。」と「飛ぶ鳥を射ても三つに二つは必ず射落します。」と義経「さらば與一を呼べ。」とて召した。與一はその頃はまた二十位であつた。萌葱緘の鎧を着て足白の太刀を帶き、二十四

さした截生の矢を負ひ、鎬矢一本を指添へ、滋藤の弓を脇に挟み、甲を脱いで高紐にかけ、義經の前に畏まる。義經が「いかに與一、あの扇の真中を射て見物させよ。」と命するに、與一は「中々私共が射ることも思ひません。必ず出来る人に仰付け下さい。」と辭退した。義經は大いに怒つて「今度鎌倉を立てて西國へ向はうとする者が、義經の下知に背く事はあるまいぞ。それに少しでも言分のあるものは今からこくく鎌倉へ歸れよ。」と叱り附けたので、與一はやむなく「然らば外れても仕方がありません。仕つて見ませう。」と御前を罷り立ち、黒馬の太く遅しいのに、金覆輪の鞍を置いて乗り、弓より直し手綱はいくり、汀へ向つて歩ませた。矢比はなほ少し遠いので海の中へ一段許りも打入れたが、まだ扇との間は七段位もあるらしい。頃は二月十八日酉の刻許りの事である。折からの北風が烈しく吹いて磯を打つ浪も高かつた。船は波につれてゆり上り、ゆり下り、扇の串も定まらない。沖には平家の軍が船を並べて見物する。陸には源氏の兵が轡を並べて見てゐる。與一は目を塞いで「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現、宇都宮那須湯泉大明神、願くばあの扇の真中射させ給へ、是れを射損する者ならば弓を折り自害して、人に二度面を合せられません。今一度本國へ歸さうと思し召すならば此の矢をはづさせ給ふな。」と心の中に祈念して、目を見開けば、風も少し吹弱つて扇も射加減になつてゐる。與一は鎬を取つて番ひ、よつ引いてひょうこ放つ。小男ではあるが、矢は十二束三伏、弓は強い。鎬は浦にひゞく位に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸許りおいて、うまく射切つた。鎬矢は海へおちるに、扇は空へ舞ひあがる。春風に一もみ二もみもまれて海へさつち散つた。皆紅の扇の夕日に輝くのが白波の上に漂ひ、浮きつ沈みつゆられてゐるのを、沖では平家が舩を叩いて感じた。陸には源氏が舩を叩いてほめはやしたのであつた。

かく屋島で源平の兩軍が對戦したが、源氏の軍は次第に勢を加へたので、平氏は終に九州へ逃れた。しかし範頼が既に大軍を擁して豊後(大分)に居つたので、平軍はやむをえず、軍船を連ねて長門壇の浦(山口)の海上に浮んだ。間もなく義經が兵船八百餘艘を追ひかけて攻めたので、平氏はもはや逃れる所がなく、五百餘艘で迎へ奮戦する力めたが、衆寡の勢

敵し難く遂に大敗し、源平の争も今日が限りこなつた。二位尼(清盛の妻時子)は神璽・寶劍を奉じ、安徳天皇を抱き参らせ、「御運は既に盡きさせられました。まづ東に向はせ給うて、伊勢大神宮に御暇申させ給へ。その後西に向はせられて西方淨土の阿彌陀如来のお迎へにあづかるやうに念佛を申させ給へ。此の國は粟散邊土に申して悲しみの多い世界でございます。あの波の下にこそ、極樂淨土にて目出度き都がございます。それへお伴致しませう。」と色々にお慰め申せば、小さい美しい御手を合せ、東に向つて伊勢大神宮・正八幡宮に御暇申させられ、その後西に向つて御念佛されるに、尼は主上(天皇)を抱いて千尋の底にお伴申した。悲しい哉、無常の春の風は忽ちに花の御姿を散らし、痛ましい哉、分断の荒き波は忽ちに玉體を沈め奉つた。御殿を長生に名づけ、宮門を不老に號したが、まだ十歳にならせ給はぬうちに、底の水屑ならせ給うたのである。母后建禮門院も續いてお沈みになつたが、義經の部下がお助け申した。平氏の一族は大抵君に殉じ、さしも榮華を極めた平氏も花々しい最後をこけた。一門の公達は京師に生立つたから、藤原氏豪奢のあこをうけて、優しく風流な振舞に富

んでゐるが、さすがは武士らしい勇壯な最後をこけたのであつた。時に紀元一八四五年、壽永四年(元治)春三月二十四日であつた。清盛が太政大臣になつてから僅かに十八年目であつた。義經はやがて神器及び建禮門院を奉じて京師に凱旋した。建禮門院は都に御住居あらせられても、先帝の御事を思出でられては、涙のかわく間もあらせられない。憂き事聞かぬ深い山の奥へも入りたいと思し召されたがさうもならず、京都の北方にある大原の奥の寂光院へ入らせられた。文治二年(平氏滅亡)の春、後白河法皇は御閑居の御有様を御覽せられたく思し召し、賀茂の祭もすんだ頃、供奉の人々を召連れてお出ましになつた。遠山にかゝる白雲は散去つた花の形見であり、青葉に見える梢には春の名残が惜しまれる。もう四月二十日過ぎの事であるから、夏草の茂みの末を分け入らせられた。寂光院へお着きになつて御覽になるに、いかにも荒果て、墓破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。「言ふやうな所であつた。それでもさすがに庭園は趣があつて、遅櫻も珍らしく藤や山吹が咲き亂れてゐた。法皇は御覽あつてかうお詠みになつた。

池水に汀の櫻散布きて浪の花こそ盛りなりけれ。

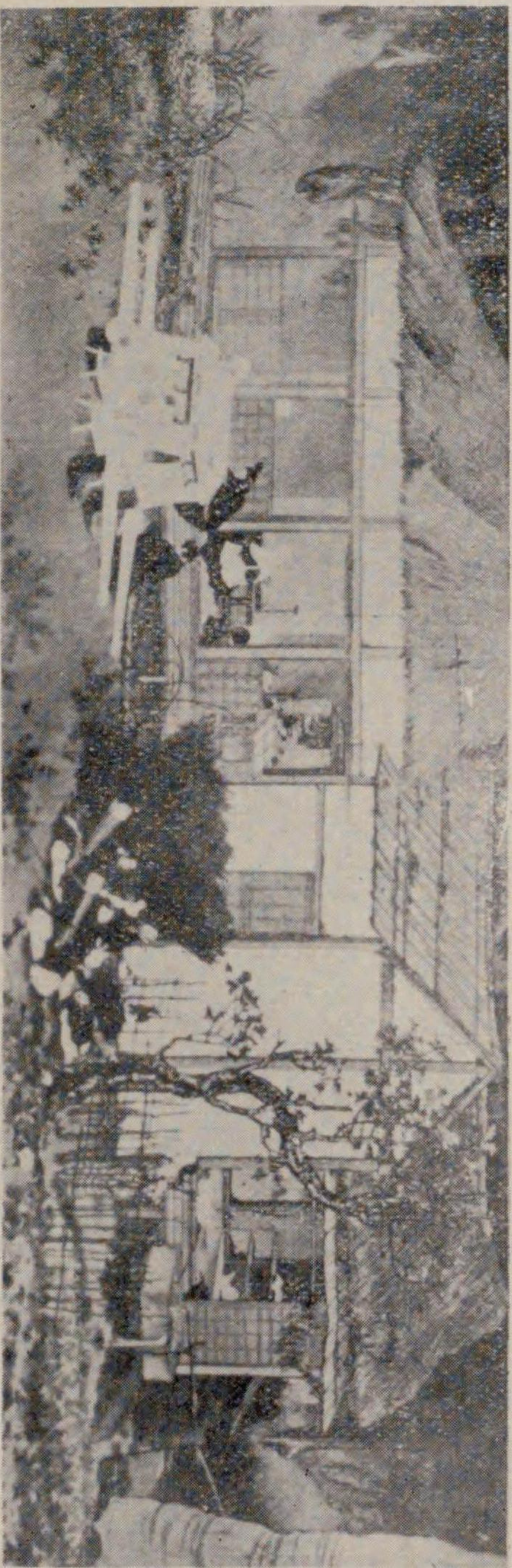
女院(建禮門院)の御庵室を御覽になるこ、軒には蔦・朝顔がはひかゝり、屋根葺く杉の皮もまば

大原御幸

らであつて、時雨も露も堪まるこは見えなかつた。法皇は「誰か居らぬか。」と召されたが、御答を申す者もない。やゝあつて老いたる尼が一人参つた。「女院はいづくへ行かせられたぞ。」と問はせられるこ、此の上の山へ花摘に入らせて申す。御庵室に入らせられて、障子をあけて御覽になるこ、一間には阿彌陀三尊の御像があり、先帝の御影をかけ奉つてある。蘭麝の薫に引替て、香の煙が立上つてゐる。障子にはられた色紙の中に女院の御歌と思はれて、

思ひきや深山の奥に住居して雲井の月をよそに見んこは。
(今日山の奥に住居して宮中の有様をよそに眺めようこ昔は思ひもよらなかつた)

やがて女院は近く仕へてゐる尼をつれて、山をお下りになつた。法皇に御見えなされても、たゞ涙を流し給ふばかりである。やがて御涙を抑へて、昔の御物語、先帝の御事なごを申させられた。法皇は御名残もつきせず、涙がちに昔をお忍びになつたが、やがて鐘の聲が



上は法皇御幸の行列が木の間に進むところ、下は女院の御庵室で法皇と御對面なさるところであつて、下村觀山氏の筆。

夕暮を告げ渡つたので、御涙を抑へて還御ましくしたのであつた。

第二十七 鎌倉幕府の創立

源頼朝は始め東國を従へるや、その勢力を確立させよう計つて先づ鎌倉を根據とし、侍所を置き、和田義盛を別當(長官の意)として部下の將士を取締らせた。時に治承四年であつた。ついで壽永三年に平氏を一の谷に破つた頃、公文所を設けて大江廣元をその別當(長官の意)とした。これは政務を議する所で、後に政所と改稱した。同時に問注所を設けて訴訟を掌らせ、三善康信をその執事(長官の意)とした。大江廣元・三善康信はもこは朝臣であつたが、法律や故實に精しいから、頼朝に招かれて鎌倉に下つたのである。かくて軍務・行政・司法の政治機關がそろひ、幕府の基礎はこゝに出來上つた。

頼朝は此等の政務家や武士をよく率ゐ、巧に士心を收めて京都の朝廷の政は全く別に武家政治を創め、平氏を亡ぼしてからは遂に全國を支配する事となつたが、兄弟一族に對して

は甚だ猜忌(きらふ)の心が深く、かつ冷酷な性質であつた。これは一つは幼時から流人として敵のきびしい監視の間に成長した爲であらう。二つにはまた幕府の主となつて諸將を抑へつける必要もあつたのであらう。さきに叔父の行家を斥け、ついで義仲と不和になり、これを亡ぼしてその勢を併せたが、平氏を亡ぼすに間もなく、弟の義經も不和になつた。義經は兵略に長じ、武勇にすぐれてゐる。義仲を討ち平氏を亡ぼしたのは實に義經一人の力であると言つてもよい位である。しかしその爲に軍事を處するに當り往々專斷であつて、頼朝の意にはぬ事もあつたし、梶原景時の如き策士もしばしば戦略上で意見を衝突させたので、景時はすこぶる義經を怨んで頼朝に讒言した。然るに義經は身を保つことが不謹慎であつて、幕府の規定を無視し、兄に相談もなく、法皇の命を受けて京都を守り、檢非違使尉に叙せられたりしたので、頼朝は快からず思つて居つたから、義經が平氏を亡ぼして鎌倉に歸つて來た時には、その入口にある腰越にこめて鎌倉へ入れない。義經は異心がない旨の誓を書いて、兄の許へ差出したけれど、頼朝は中々許さなかつた。重ねて申し状を參らせたが、少しも機

嫌を直さなかつた。それで義經もしやくに障つて京都に歸り、行家も結んだから、頼朝は益々益怒つて、終に土佐坊昌俊を遣はして、京都堀河にある義經の邸を襲はせた。しかし敏捷な義經は却つてこれを迎へて斬つてしまひ、法皇に奏して頼朝追討の院宣を請うた。法皇は止むを得ずこれを許されたけれど、頼朝の方からは北條時政が軍を率ゐて上京することになつた爲、義經・行家の勢は忽ち見る影もなくなつた。それで二人は止むなく都を逃れ出て、ともに西國へ下らうとしたが、途中で風波に妨げられて、行家は和泉(大阪)に入り後に捕へられて殺された。義經は大和の吉野山に隠れたが、吉野の僧兵に攻められ、既に危かつた時、佐藤四郎兵衛忠信がたゞ一人残り止まつて、義經及びその他の家來を落した。義經がその妾靜に別れたのも此の時である。靜は後に幕府に捕へられて、義經の行方を訊問せられたが、知らぬ由を申して鎌倉に留められた。頼朝の夫人政子は、靜が今様の上手で、舞の曲は世に雙がないと言ふことを聞いて、見たい由を頼んだが、病にかゝつてゐるにて辭つた。しかし尙再三召されるので力及ばずして參つた。鶴岡八幡宮の廻廊に舞臺を構へ、工藤祐經

は鼓を打ち、畠山重忠は銅拍子を仕つて興を添へた。静は次の歌を歌ひつゝ、舞を舞つた。
 吉野山みねの白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ戀しき。
 しづやしづしづの草環繰返し昔を今になすよしもがな。
 その聲の美しさは、空行く雲をもこぼめる程で聞く人は皆恍としたのであつた。しかし頼朝は「八幡宮の御前では、關東の萬歳を祝うて然るべきに、逆臣義經を慕うて離別の曲を歌ふことは何事だ。」と不機嫌であつたが、政子が色々に取なしたので、憤りが解けて、色々の賜物があつたと言ふことである。

佐藤忠信はやがて京都で殺された。義經は暫く京都附近に潜伏してゐたが、幕府の搜索が厳しくなつたので、終に妻子を俱し山伏の姿になり、北國路を下つた。道々難儀をして奥州に下り、再び平泉の藤原秀衡に頼つた。秀衡は昔のやうによくかしづき、衣川の館に住はせた。しかし間もなく秀衡は歿した。その死に臨んで子息泰衡以下を召して、義經を奉じて永く變らないやうに遺言したが、泰衡は頼朝の勢に恐れて、遂に衣川の館を攻めたので、

辨慶や鷲尾經春等は奮戦して死し、義經は妻子を殺して自害した。泰衡はやがて首を鎌倉へ送つたが、頼朝は前から奥羽地方を一統したいと思つてゐたから、義經を隠しておいた罪を數へて文治五年（一八四九年）大軍を催し、東海・東山・北陸の三道から攻めた。諸方の壘は皆忽ちに陥り、頼朝は平泉に逼つた。こゝでも防ぎきれないので泰衡は館に火をかけて逃れたが、譜代の臣河田次郎の爲に殺された。河田はその首を持つて降人に出たが、頼朝はその不忠を悪んで首を刎ねさせた。かくて奥羽は頼朝の指揮下に歸した。これより先、頼朝は九州の平氏の遺臣をも討平させたので、天下は悉く頼朝の號令に服するこゝになつた。始め頼朝の軍が白河の關（福島）を越えた時、丁度初秋であつたが、その大軍の威勢には、いかなる敵も防ぎ守るこゝが出来ないといふ意味を、梶原景季が次のやうに詠じた。

秋風に草木の露をはらはせて君が越ゆれば關守もなし。

先に文治元年（一八四五年）義經行家が京都を逃げた時、頼朝は大江廣元の議を採用して、法皇に奏請し、義經行家を捕へるのを名こし、また將來にわたつて諸國に謀叛人の起るのを

豫め防ぐ爲に、周く諸國に部下の家人を配置して、守護・地頭とした。守護は國に置かれ、國司に並んで管内の軍事警察を司り、地頭は公領・莊園を問はず一般に土地に配置せられて年貢米の取立をその役目とした。これより朝廷から任せられた國司の權は守護に移り、莊園の領主は地頭にその實權を奪はれる事となつた。頼朝はやがて紀元一八五二年建久三年に征夷大將軍に任ぜられた。平氏滅亡後七年目である。もて征夷大將軍は蝦夷を征伐する大將軍といふ意味であつたが、頼朝以後常に武門の棟梁たるものが任せられる官となり、征夷は名ばかりで、その實は天下の政權を握るものとなつた。これが武家政治の始である。さうして將軍の政廳を幕府と言ふ。此の武家政治は時に盛衰もあつたが久しく行はれて、明治維新まで大凡六百八十年間つゞいたのである。

頼朝に到つて保元以來の兵亂が始めて平ぎ、天下は一に歸し、人民も安心する事が出来たので、此の點だけでもその功は非常に大きいものである。かつ藤原氏以來捨て、顧みられなかつた地方の整理に意を注ぎ、京都の華奢な政治に對して、地方的堅實な制度を立て、平氏

が京都に居を占めて藤原氏の奢侈を見做つたのに鑑み、遙か東國にあつて質素を旨とし、力めて儉約を勵ました。かつて右筆藤原俊兼が小袖を十餘枚着飾つて出仕したところが、頼朝は自ら俊兼の刀を抜いてその着物の袖や褌を切り、きびしくその奢りを戒めたので、諸士は皆膽をつぶした。その上武士道を勵まし、しばしば狩を催して武勇を勵ました。また神佛をあつく敬ひ、朝廷に對し忠誠を盡し奉つた。しかし他方では朝廷を大いに制し奉つたのであつた。幕府に好意を持つてゐる朝臣十人を選んで議奏し、博覽達識の藤原兼實をその首座として政務に與らせ、朝廷に鎌倉との交渉に任じたので、これから以後の朝廷は殆ど幕府の意のまゝとなつた。

建久四年五月頼朝は將士を率ゐて、富士の裾野に卷狩をした。或日幾年を経たことも知れぬ猪が手負うたま、荒れに荒れて飛んで來た。誰も防げぬ。此の時仁田四郎忠常は馬に乗つて駈寄り、近附く時に猪に向様に乗移つた。猪はいよゝゝ猛り狂ふ。遂に頼朝の前近くなつて猪が躓いた時、腰の刀を抜いて胴中に突き立て、刺し殺した。諸人はこれを見ては

めはやし、頼朝も「狩場の中の高名でこれに勝るものはない。」とほめた。

その夜の子刻(十二時)許りに曾我十郎祐成と弟の五郎時致とが、陣屋に忍び入つて、亡父河津三郎祐泰の仇工藤左衛門尉祐経を討つた。祐泰と祐経とは親族であるが、領地の争により祐泰は先年伊豆の奥の赤澤山の狩場で祐経に射られて死んだ。その時に祐成は五歳で一萬と言ひ、弟時致は三歳で箱王と言つた。母は二子を連れて曾我祐信に再縁したので、二子も曾我の氏を名乗つた。二子は亡き父の事を忘れる日とてはなく、空行く雁を見るにつけても、その中の大きいのは雁の父であらうと思はれる、鳥さへ父があるのに悲しまれ、父

工藤祐経—祐成

伊東祐家—祐親—河津祐泰

曾我祐成

の戀しさにのみ明し暮したが、如何にもして

父の敵を討つて、母の御心を慰め父の孝養

にも奉じようご考へて、常に祐経をつけ狙つてゐるが、祐経は頼朝の寵臣であるから思に任せなかつたけれども、遂に此の時になつて本望をこけたのである。祐成は二十二歳、時致は二十歳であつた。宿直の士はこれを知つて、走出て、疵をうけた者も多かつたが、遂

に祐成は仁田四郎に討たれ、時致は五郎丸に捕へられて、後斬られた。

箱王が指す雁金や暮の鐘。

秋色

旅人や曾我の里さふ五月雨。

太祇

猪や猿またいで二人忍び込み。

(川柳)

此の報知が誤つて鎌倉に聞えて、將軍が殺害されたと噂された。政子はこれを聞いて大いに悲しんだので、範頼は慰めて「範頼が附いてゐるから、安心なさい。」と言つたのを、後に頼朝が聞き、例の邪推から叛逆の企があるか疑ひ、伊豆の修禪寺に押しこめ、後に人を殺させた。

かくて正治元年(一八五九年)頼朝が年五十三で薨じた頃は、源氏の一族はもはやその二子を残すだけで、全く孤獨なものであつた。

第二十八 源氏の滅亡と承久の亂

頼朝が薨じて長子頼家が十八歳で職を繼いだが、こても幕府の政治を自らするだけの力はない。威權は全く母の政子と外祖父北條時政の手にあつた。もこ北條氏は平貞盛から出てる。時政の祖父は伊豆の北條に住んでその地の豪族になつた。頼朝が流されて伊豆に來た時、時政は陰かにこれを助け、その女を妻せたのである。それ故、頼朝の兵をあけた時から、時政は力をつくしてこれを助け、幕府の創立にも與つて力があつた。従つて北條氏の威權はおのづから重くなり、頼家は殆んど政治にたづさはる事が出来ぬやうになつてしまつた。頼家の病が篤くなつた時、政子は時政と謀り全國を二分して、東二十八國の地頭職と天下の總守護職を頼家の子の一幡に譲り、西の三十八國の地頭職を弟千幡に割かせようとした。頼家の妻の父比企能員はこれを聞いて大いに憤り、頼家と謀つて北條氏を滅ぼさうとしたが、却つて北條氏に機先を制せられ、あへなくも比企氏は亡ぼされてしまつた。一幡も此の亂に死んだ。かつ頼家は伊豆の修禪寺に幽せられ、翌年北條氏の爲に害せられた。かくて千幡が迎へられて、三代將軍になつた。即ち實朝である。まだ十二歳の少年であつ

たから、勿論實權は母の政子と北條氏にあつた。やがて時政は將軍の後見をして、執權になつた。時に時政の後妻牧氏は中々腹が黒かつた。牧氏の生んだ女は平賀朝雅の妻となり、先妻の生んだ女は畠山重忠の妻になつた。或時重忠の子重保と朝雅が酒を飲んで喧嘩をした。牧氏はこれを聞いて怒り、重忠は謀叛の企をしてゐるを讒言し、時政に勸めて畠山の一族を滅ぼしてしまつた。その上牧氏は女がかはゆさの餘り、時政と謀つて實朝を廢し、朝雅を將軍に立てようとしたが、政子は早くこれを知つて英斷を施し、源氏の爲に父を繼母を伊豆に退隱させたので、牧氏の計畫は全く失敗に終つた。そこで時政の子義時が父について執權になつた。義時は父にも劣らず陰險であつた。當時幕府では北條氏が獨り威權を傾けてゐたが、尙和田義盛が侍所の別當として勢力が盛んであつたので、北條氏は常に眼の上の瘤と思つてゐた。その頃信濃の人泉親衡といふ者が頼家の遺子千壽丸を奉じて北條氏を滅ぼさうとしたが早く事があらはれて、親衡は行方しれず落失せた。義盛の子義直・義重及び甥の胤長等もこれに加はつてゐた。義盛は驚いて幕府に馳

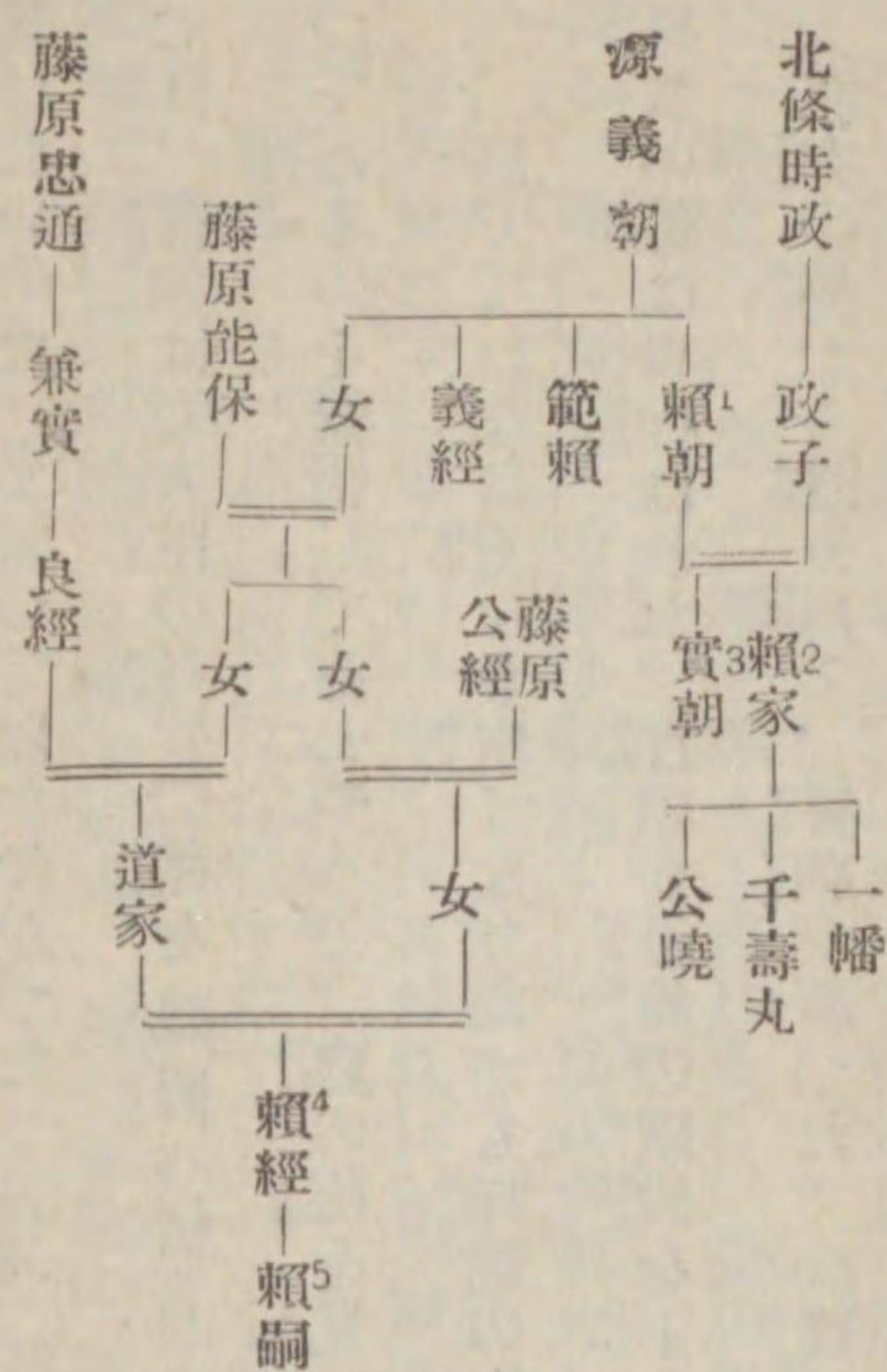
せ參じ、多年の忠節にかへて二子及び甥の助命を願つた。二子は赦されたが、胤長は張本人だからこゝて赦されず、陸奥へ流されたので、義盛は大いに怒り、兵をあけて幕府を圍んだ。此の時義盛の三男朝夷三郎義秀は勇武が人並すぐれてゐたから、惣門を破つて進んだ。足利義氏が來るのを見て組まうこ近寄り鎧の袖に取付くこ、義氏は叶はないと思つて、乗つた馬に一鞭當て、側の堀を越えて逃けるこ、鎧の袖はちぎれて朝夷の手に残つたと言ふここである。遂に和田氏の軍は敗れて、一族が皆戦死した。義秀だけは獨り逃れて安房へ行つたが、行方知れずになつた。かくて北條氏は侍所の別當をも兼ね軍事の權をも握るここ、なつた。頼るべき一族・功臣は大方亡んでしまつたから、將軍實朝は全く孤立してしまつた。實朝は性質が溫雅で風流を好み、殊に和歌に巧であつた。常に心のまゝにならぬのを憤つてゐるたが、手の下しやうがないので、大船を造つて支那に渡らうこした事もあつた。曾つて後鳥羽上皇に次のやうな歌を奉つて、勤王の志を述べまらせたここがあつた。

山は裂け海はあせなん世なりこも君に二心われあらめやも。

源氏の最後を飾る爲に、奏請してしきりに官位が進み、遂に右大臣にまで昇つた。大江廣元は義時の旨をうけて、高官を拜するのは前代頼朝の遺志に背く故、辭退するように諫めたが、實朝は「源氏の正統はもう終と思ふ。それ故自分は出来るだけ高い官職を戴いて家名を揚げたいのだ。」と言つて聽かなかつたと言ふここである。翌承久元年（一八七九年）正月二十七日、實朝は右大臣の拜賀の禮を鶴岡八幡宮で行つた。此の時も實朝は我が命の旦夕に迫つてゐるのを覺悟してゐたやうで、庭の梅を見て次の詠を残した。

出でていなば主なき宿こなりぬこも軒端の梅よ春を忘るな。

拜賀の禮は夜行はれた。實朝が社前の階段を下る時、頼家の子で鶴岡別當である僧公曉が大銀杏の側から躍り出て、實朝を斬つた。公曉は父の害せられた後、實朝を父の仇であるこ、かねゝ思ひ違ひをしてゐるたが、父の怨を晴らすつもりで遂に實朝を殺したのである。此の異變の爲鎌倉は大騷をしたが、やがて義時は人をやつて終に公曉を殺させた。こゝに於て源氏は三代二十七年で、正統は全く絶えてしまつた。



頼朝は後七年を経て將軍に拜せられたのであつた。

政子は性質が剛強果斷で、男子に劣らないほご意志が強かつた。頼朝の成功も半ばはその内助の功であつた。また大いに操が正しかつた。頼家がまだ幼い頃、頼朝に従ひ、狩場に臨

つて、その時はやつこ二歳になつたばかりであつたから、政子が後見をして萬づの政務を統べたので、世に尼將軍と言はれた。これより北條氏は名は執權であるけれども、幕府の實權は全くその手に歸してしまつた。

んで一發で鹿を射殺した時、頼朝は喜んだが、政子は喜ばないで「頼家は幼くても將軍の子です。鹿を殺したくらの事は決して功名とは言へません。」と言つたさうである。また頼朝が義経の愛した靜を殺さうとした時、これを諫めたことも名高い話である。

かゝる間に京都では後鳥羽天皇が、早く天位を御子土御門天皇(三代)に譲つて院政を視られた。ついで土御門天皇は御弟順徳天皇(四代)にお譲りになつた。後鳥羽上皇は英明の君であらせられ、武家が専横で、天威をも憚り奉らぬ振舞があるのを常々御憤り遊ばし、密かに政權を回復しようご御企てになり、院には北面の外に西面の武士を置き、よりよく忠義の武士をお召しなされた。或時の御述懐の歌に、次のやうにお詠みになつた。

奥山のおころが下をふみわけて道ある世にぞ人に知らせん。(オドロは草木の亂れ茂つた様を)
 たまく鎌倉では將軍實朝が害せられ、頼朝の血統は絶えたけれども、幕府の勢力は依然として元の通りで、執權義時は幼主を助けて威權をほしいまゝにし、時として上皇の御旨に背き奉る事もあつたから、遂に討幕の事を決せられ、承久三年(一一八一年)順徳天皇も御

子仲恭天皇(第八十)に御位をお譲りになつて、後鳥羽上皇と共に軍事をお謀りになり、院宣を諸國に下し、義時の罪を鳴しその官爵を削つて、これを討伐せしめられた。しかし實は時機がまだ早かつた。關東では頼朝が死んでまだ間もないから、その恩徳を被つた武士はまだまだ多く残つてゐる。殊に尼將軍は尙健在で、先代の遺法を守つてゐる。北條氏を惡む者はあつても、幕府を怨むものはなかつたのである。されば京都の變報が鎌倉にさぐくや、尼將軍は義時・廣元以下を集めて、「いかに侍ごもよく聞き給へ。日本中の侍は一人にして故右大將殿(頼朝)の御恩を蒙らぬものはあるまい。此の御情を忘れて、今度京方へ參るか、また留まつて御方になつて奉公するか、只今確に申し切り給へ。これが最後の言葉であるぞ。」と諭したが、皆一人にして此の御恩に背きません。御心安く思し召せ。」と答へた。

そこで幕府は大軍を催して三道より攻上らせた。東海道の軍は義時の嫡子泰時を大將として弟時房、三浦義村・足利義氏等をこれに副へ、東山道では武田信光等が軍を率ゐ、北陸道へは泰時の弟朝時等が將として進み、總勢十九萬騎、雪霞の如く西上した。泰時は初か

諫めて「普天の下、率土の濱、いづこも王土でない所はありません。速く罪をおわびして朝命をお聴きなさいませ。」と言つたのであつたが、父の命が嚴しいので、やむなく上洛した。かくて出立つた明日、泰時がたゞ一人鞭をあげて馳せ歸つて來た。義時は驚いて「さうしたのか。」と問へば、「軍の仕方、掟なごは仰せの如く承知致しました。しかし、もし辱なくも鳳輦を先立てて、錦の御旗をあけられ、いかめしい行幸にお遣ひ申したら、さう致しませう。此の一事が心配さに一人歸つて來ました。」と言ふ。義時は暫く考へてゐるが、「よくも問うてくれた。まさに君の御輿に向つて弓を引く事はできまい。その時は兜をぬぎ、弓の弦を切つて身をまかせ奉れ。さうでなくて君は都におはしまして、軍兵のみ來り戦ふなら、命を捨てて千人が一人になるまでも戦へよ。」と言ひも終らぬのに早や出て行つた。朝廷でも豫め用意せられ、兵を發して美濃・尾張等で防がせられたが忽ちに破れ、ついで勢多・宇治・淀(山城)に備へられたがこゝも破れて、泰時・時房の軍は京都に亂れ入つた。後鳥羽上皇は急に義時の官位を復し、追討の院宣を召返させられたけれども、今こなつては無駄であつた。泰時

はやがて六波羅に入り、義時の指揮によつて官軍に與した人々を或は斬り、或は流し、それ
 ぞれに罪し、その所領三千餘所を奪つた。その上に畏くも後鳥羽上皇を(縣)鳥根に、順德
 上皇を佐渡(縣)新瀉に遷し奉つた。土御門上皇は初から此の御企てに與り給はなかつたが、
 父上皇が遠島に遷られ給うたのに、獨り京都に留まるのは心苦しいと、鎌倉へ仰せられたの
 で土佐(縣)高知に遷られたが、義時はせめて近き程に奏して、後、阿波(縣)徳島に遷幸を仰い
 だ。仲恭天皇は御幼小で何事も御承知なかつたが、順德上皇の御子である故、應し奉つた。
 時に御年四歳、在位七十日であらせられた。世に此の亂を承久の亂と言ふ。義時の叛逆は實
 に天地に容れないものと言つてよい。新井白石も「本朝古今第一等の小人。」とそしつてゐる。
 三上皇は皆、花の都を離れて淋しい磯の苦屋の中に宮居をお並べになつた。朝夕に見聞あ
 そばすものは、空行く雲沖に立騒ぐ五百重の波、松吹く嵐や浦に釣する魚の掛聲のみで、
 何一つ御心を慰め給ふものもない。風の都合で鹽焼く烟が都の方へなびいても、故里なつ
 かしく眺めさせ給ふのであつた。後鳥羽上皇は或日、鹽風の烈しく吹いて來るのを聞き召し

て、

われこそは新島守よ隱岐の海のあらし波風こゝろして吹け。

(自分は新しい島の番人である、まだ荒い風になれないから隱岐の海の波風よ靜かに吹い

てくれ)

また或冬の夕暮に沖の方から舟が漕いでくる。藝の釣舟か御覽になるに、都かこの御使
 であつた。此の頃の夜寒につけ、隱岐の海邊の御住居を思ひやられて、墨染の御衣、夜の御
 衾なご、御母七條院より贈られたのである。上皇は御文を御覽になつて、御胸もせきあける
 程であらせられたが、漸く詳しく御覽になるに、「命のある中に、今一度ごうかして見參させた
 い。」なご書かせられてあるので、御文を御顔に押當て、泣き給ふばかりであつた。

八百よろづ神もあはれめたらちねの我待ちえん絶えぬ玉の緒。

(多くの神々よ自分の歸京を待つて生き残つてゐる母の命をあはれみ給へ)

千載の下、尙涙あふる、御物語である。

第二十九 北條氏の治

北 條 泰 時

關東の計らひごとして、高倉天皇の御孫、後堀河天皇(第六十八)が踐祚あらせられた。北條氏はこの亂後、京都の南北兩六波羅に探題を置いて、近畿・西國の政治を行はせたから、京都は常にその監視を受ける事となり、皇威はいよゝゝ衰へ給ひ、北條氏の權力は益々固くなつた。義時が卒して、その子泰時があこを繼いだ。泰時は政治を正しく行ひ、儉約を守り、仁慈の心に富み、比類少き良政治家であつた。或年伊豆の北條が飢饉であつた時、泰時は自ら行つて見て、米を貧民に貸してやつた。然るにその翌年もまた不作で人民はすこぶる苦んだから、泰時は再び行つて、悉く前の證文を焼き、酒食を與へて慰めてやつた。こゝがあつた。その家を嗣いだ時、政子が義時の遺産を諸弟に分たせたが、泰時は自分は少し取つて、弟や妹に澤山與へ、「執權を承はる上は、さのみ慾深く望む必要はありません。」と惜しむ色になつた。泰時は時房を連署し、評定衆をその下において政務を合議させて公平な政を施

北 條 氏 の 治

し、また貞永元年には(二八九二年)御成敗式目五十一箇條を制定して武家政治の根本標準を定めた。世に貞永式目と言はれてゐる。これには先づ第一條に神社を修理して祭祀を専らにすべきこと、第二條に寺塔を修造して佛事を勤むべきことを示し、以下刑法・財産法について規定し、武家政治の精神をよく現したものであつたから、鎌倉幕府は勿論、後世の室町や江戸の幕府にもその精神が用ひられて、永く武家政治の大本になつたのである。泰時は常々畏敬してゐた京都梅尾の明惠上人を訪うて、政治の要を尋ねたこゝがあつた。上人は「國を治めるのは病を治すのと同じで、その原因を知らないと藥をのませては、益がなく却つて害がある。さて治亂のものは人の欲である。君がもし欲を少くして、政を行はれたならば、治めるのに困るこゝはあるまい。」と教へ、また「君が心を正しうし給へ。形がまっ直で影が曲り、政が正しくて國の亂れる筈がない。」と言つたので、泰時は實にも感じてよくその言を服膺し、實行したのであつた。されば天下は太平に、士民はみなその仁政の惠に浴して大いに悦服し、その卒した時は、貴賤の別なくこれを惜しみ、父母を喪うたやうであつた

言である。

事しけき世の習ひこそ物うけれ花の散るらん春も知られず。

北條泰時

明月の出るや五十一箇條。

芭蕉

茶山なる明恵上人植松。

不稀翁

明恵上人

後堀河天皇の次に皇子四條天皇(第七代)がお立ちになつた。然るに御在位が僅かにして崩

ぜられ、繼ぎ給ふべき御子もおはさなかつたので、泰時は土御門上皇が承久の亂に與り給

はなかつたのを徳とじて、その御子を御位につけ奉つた。第八十八代後嵯峨天皇に申し上

ける。

泰時の子の時氏は早く卒したので、泰時の次には時氏の子の經時が執權になつた。經時

の次に弟の時頼が執權になつた。その少し前に將軍頼經は經時の勸によつて、職を子の

頼嗣に譲つた。時頼の一族の光時は、頼經を奉じて時頼を除かうとしたが、露はれて光時は

北條氏の治 九二

流された。それに關係して頼經も京都へ送り返される事になつて、三浦光村が送つて行つ

た。光村も頼經を復せしめ自分が北條氏に代らうとして、兄泰村と共に陰かに計つたけれど

も、事が成らず、却つて北條氏の爲に一族が悉く亡ぼされてしまつた。こゝに於て頼嗣も

廢せられ、時頼は朝廷に奏請して、後嵯峨天皇の御子宗尊親王を奉じて將軍とした。

時頼も政治に心を注ぎ、質素儉約を以て衆を率ゐた。時頼の母を松下禪尼と言ふ。かつて

時頼の幼い頃、時頼を招く用意をするに、手づから障子の破れを切張した。その時その兄

の秋田城介義景がこれを見て「下部に張らせませう。」と言つたが、禪尼は聽かないで、尙

張つてゐた。義景は「皆張換る方が樂でせう。斑なのは却つて見苦しい。」と重ねて言つた時、

禪尼は「私も後にはさうしませうが、今日は物は破れた所を修理して用ひるものよ、若い

人に見做はせたい爲にかうしたのです。」と答へたと言ふ。時頼の勤儉であつたのは、實に此

の母の教訓による所が多かつたのである。時頼は或夜、一族の大佛陸奥守宣時を招待した。

宣時は直垂がないので、ぐづくしてゐるに、直垂なきは無くても夜だから構はないからに

使がまたやつて来たので、古い直垂を着て行つた。時頼は銚子に土器を持出して、「此の酒を獨り飲むのが淋しいからお呼び申したのです。肴はないが、人は皆寝たから、臺所で何か探して下さい。」と言つたので、宵時が紙燭をこもして探したら、隅の小土器に味噌が少しあつた。時頼は、「これで結構です。」言つてゆる／＼飲んだと言ふ。天下の執權でもこんなに儉約であつたのである。時頼はまた清廉の士青砥藤綱をあけて政治に與らせたが、その政はすこぶる公平であつた。藤綱が或夜遅く出仕して、十文の錢を滑河(鎌倉)に落した、藤綱は殊の外にあわて、人を走らせ五十文の松明を買はせ、それを燃やして十文の錢を探させた。その話を聞いて損な事よご笑ふ人があつた時、藤綱は答へて、「錢十文は今拾はなかつたら、河に沈んで國の寶は永へに失はれる。松明の錢は商人の手に留まつて永く失はれない。彼れにあるご我れにあるごは何も差別はない。」と説明したと言ふことである。

水底に青砥が錢やけさの秋。

召波

時頼は病にかつて、執權を一族の長時に譲り、髪を剃つて最明寺(鎌倉)にはいつた。故

に世に最明寺殿と言はれた。その後諸國を行脚して風俗を視、人民の苦しみをたづねて廻つた。攝津國難波浦に廻つた時、日は早や西に傾いて、人の往來も稀になつたので、こある家に立寄つて宿を請ふと、年老いた尼が杖にすがつて出て来て、「御宿をお借し申すのは安うございませうが、妾一人さへ住みかねた暮しでございませうから、中々お宿致すことが出来ません。」と答へた。しかし近くに宿るべき所もないので、むりに宿めてもらつた。佗しい住居であるが、ごこご無く氣品があるのを感じたので聞いてみるに、その尼はもご難波三郎兵衛尉さいふ者の妻であつたが、夫に死なれ、子に先立たれた後、一族の瓜生權頭に所領を押領せられて寄邊もなく落ぶれたのであつた。時頼は餘りに哀れに思つたので、次の一首の歌を書残した。

難波瀉潮干に遠き月影のまたもこの江に澄まざらめやは。

(難波瀉に潮が引いて沙濱になるご月ばうつらないが、その中に潮が満ちるごまた月が海水に美しい影をやごすであらう)

かくて時頼は後日その歌を證據に、尼の本領を取り返し、かつ瓜生が所領を没收して尼に與へたと言ふことである。また嘗て時頼は上野の佐野の渡で大雪にあひ、はからずも佐野源左衛門尉常世の佗住居に宿つた。常世ももこは立派な武士であつたが、一族のものに所領を押領せられて貧しい暮しをしてゐたのであつたが、尙馬を養ひ、武器・長刀を取揃へ、「今にもあれ鎌倉に大事があれば、ちぎれたりも此の具足ごつて投げかけ、錆たりも此の長刀を持ち、瘦せたりもあの馬に乗り、一番に馳せ參する覺悟である。」時頼に語つたので、時頼は大いに感じて、これも後に本領を返してやり、尙他の三個の莊を添へて與へたと言ふ。

櫓の火に後むきけり最明寺。

一 茶

源左衛門荒砥一挺ぎぎなくし。

(川 柳)

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび。

(同)

時頼は三十七歳の壯齡で卒したが、その慈しみを蒙つた貴賤老若は泣悲しんで、爲に薙髮(田家)したものが多かつた。

第三十 鎌倉時代の文化

鎌倉時代は規律ある嚴肅な生活を基とした時代であつた。藤原時代や院政時代のやうな、たゞ美に耽り情をほしいまゝにした生活に反抗して現はれた時代であつた。鎌倉幕府の創立者である頼朝は、實に此の時代精神を代表し、かつ此の時代精神を導いた人であつた。質素儉約をすゝめ、簡易な適切な政治を施し、武藝をはけまし、所謂武士道を鼓吹した。その爲にその頃の人々殊に鎌倉武士は恥を知り、名を惜しみ、苟くも卑怯未練の振舞をせず、恩義を忘れず、義の爲には命を鴻毛の輕きに比したのであつた。「額に矢を受けるも、背には矢を立てない。」といふ語は、當時の關東武士の意氣をよく示してゐる。武士は平素の遊戯の如きも平安時代の朝臣のやうに詩歌管絃を樂しむなごこは全く反對に、犬追物・笠懸・流鏑馬の如く弓を以て行ふ遊技や、相撲のやうな勇壯な武士的な遊技を喜び、またしばしば狩に出て武を練る助ミしたのであつた。女子にも貞節勇武な者が多かつた。

から鮭の阪東武士の最後かな（坂東さば）
（關東の意）。

子規

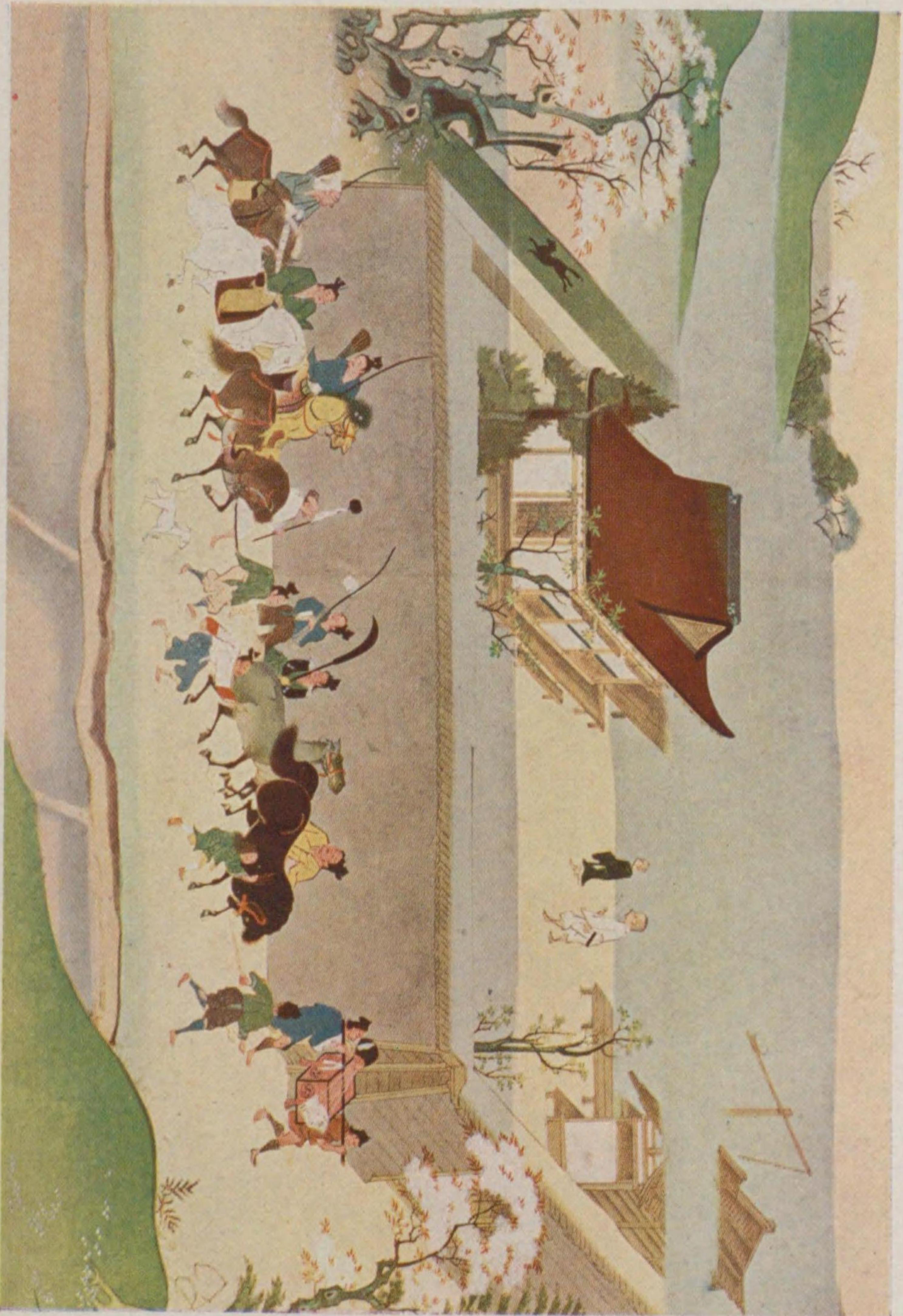
奈良朝・平安朝の佛教は内容がむづかしく、修行が複雑であるから、教育の乏しい者には適當しない。それで重に貴族の間に行はれ、まだ一般民衆には深く信仰されてゐなかつた。然るに院政の頃から僧兵なごが跋扈して、寺院内部の墮落腐敗を暴露したので、従来の佛教の威信は全くおちた。同時に保元以來戰亂がうち續いて、昨日まで榮えた者も今日は一族が皆亡びる言ふやうに、人生の悲惨の極を現す事が多いので人々は厭世的となり、無常を歎き、精神の救済を求め、まじめな信仰を望んでやまなかつた。鎌倉時代は簡易通俗な時代であるから、此の要求に應じて出た佛教は皆平民的のものであつた。かの淨土念佛の信仰は平安時代の中頃から空也上人や源信和尚（恵心）の力によつて、著しく發達して來たが、遂に高倉天皇の御代に僧源空（法然）が淨土宗を獨立させた。此の教では高尙な修行を要しない、唯阿彌陀佛を一向に信じ、南無阿彌陀佛を唱へさへすれば、佛の他力本願によつて極樂淨土に往生して悟を開きうる言ふのである。此の簡易な教は上下一般にひろく歡迎されて忽ち四方

鎌倉武士

日蓮上人が鎌倉の松葉が谷に庵を結び日々鎌倉の町に出て法華經の功德を説法してゐる所である。野田九浦氏（現存）筆。



一九日蓮上人



鎌倉時代の末に法眼圓伊がゑいた一遍上人繪傳（京都市歡喜光寺藏）第一卷にある繪で、上人が十六歳の時、聖達上人に師事したことを表はしたもので、圖の中央が聖達のすむ寺、堂前の少年僧が上人である。

に廣まつた。その弟子の親鸞は別に淨土眞宗（一向宗）を開き、尙適切に一步を進めて純他力教を説いた。その後第九十一代後宇多天皇の御代に、僧一遍が淨土宗から出て時宗を開き、諸國を行脚してやはり念佛の教をひろめた。それで世に遊行上人と言はれてゐる。禪宗は自己の工夫と鍛練により、直接簡明に悟を我が心に求める宗旨である。後鳥羽天皇の頃僧榮西が宋に渡つて禪宗の一派の臨濟宗を傳へ、ついでその弟子の道元も宋に入つて、他の一派の曹洞宗を傳へた。直接簡明な精神修養を主としたのであつたから、主として武士に喜ばれて北條時頼・時宗などの北條氏代々の執權も多くこれに歸依した。早く京都の建仁寺が榮西の爲に源頼家によつて建てられ、鎌倉の壽福寺が同實朝によつて建立されたが、後に鎌倉の建長寺が時頼に、圓覺寺が時宗に建立されたのである。第八十九代後深草天皇の御代に僧日蓮が天台宗から出て、新たに日蓮宗（法華宗）を唱へた。妙法蓮華經即ち法華經は釋迦如來がお説きになつたお經の中で、最も御本意に叶つた深遠なお經であるから、法華經を信する者は佛の加護を受けることが出来る。従つて南無妙法蓮華經のお題目を唱へることに

よつて悟を開きうるに説き、その上盛んに他宗を攻撃した。これが爲、外の宗派の反對を受けて二度までも流されたが、後に甲斐の身延山(山梨縣)を開いて本山とした。

かくて厭世思想の流行に新佛教の興隆は、益々信仰心を盛んならしめたから、あらゆる文化は、思想界も文學界も皆著しく佛教の色彩を帯びるやうになつた。かつまた戦争の多い時で、武士が勢力を得た時であるから、文化も武士的なものであつた。殊に鎌倉時代の文學の特色は佛教に戦争を主題としたことである。當事和歌はすこぶる盛んで、殊に後鳥羽天皇が御熱心であらせられたから、斯道の名手が多く出た。藤原俊成、その子定家、僧西行・藤原家隆・源實朝等は最も名高い歌人である。俊成が歌を詠む時は常に古い淨衣を着て端座し、桐火桶を抱きながら心靜かに詠んだので、その歌は何もなく上品であつた。世に桐火桶の體と言つた。その歌の一例をあける。

夕されば野邊の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里。

(深草は京都の南方にある村である)

定家はまた我が家で歌を詠む時は、必ず南面の障子を開かせて遠く外を望み、衣を整へ正しく座して詠んだ。それは常に心を清くして詠むくせを附けないで、高貴の御前に於て詠む時に心が臆して詠み淀む事があるに困るから、これを避ける爲であつた。有名な小倉百人一首は定家が小倉山(京都の西)に閑居した時に、定家の一族、宇都宮頼綱が選んだものを定家に頼んで、色紙に書いてもらつたものだと言ふ。定家の歌は新奇な意匠に華麗な語句を以て當時の歌界にも一頭地を抜き、一新時期を劃したものであつた。しかし一方にはそれが爲に和歌は益々細工物となり、形式的のものになつてしまつた。その歌の一つに、

霜さそふ空に知られしかりがねのかへるつばさに春雨ぞ降る。

(霜が降りさうな空を飛んで行つた雁が再び我が國へ歸つた時に、その翼に春雨が降りそよいでゐると言ふ持つて廻つて歌)

定家は定家と同じ時に出て、盛名を等しうする程の名人であつた。その歌は定家に比して上品な詠みぶりであつた。例へば、

昨日だに問はんこおもひし津の國の生山の森に秋は來にけり。

源 實朝は萬葉集をたしなみ、武士らしく勇ましい歌を多く詠じた。

武士の矢並つころふ籠手の上に散たばしる那須の篠原。

西行はも北面の武士で佐藤憲清と言つた。早くから世を厭ひ無常を感じて僧になつた。

かつて鎌倉に下つた時、頼朝からは非に頼まれて弓術の秘説を説いた。頼朝は喜んで銀製の猫をお禮に贈つたが、西行は頼朝の館を出るにすぎ、門前の子供にその猫を與へてしまつたと言はれてゐる。和歌にはすこぶる巧であつて、飾らない、素直な歌を作つた。かつて東國に遊び、

こゝろなき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮。

こ詠じたこことがある。その跡は大磯の邊だと言はれ今もその邊を鳴立澤と呼ぶ。

勅撰和歌集はかの三代集について、院政の頃に後拾遺・金葉・詞花の三集が相ついで撰ばれ、後鳥羽天皇の御代に俊成が勅を奉じて千載集を撰んだ。更に土御門天皇の御代に定

家や家隆等が後鳥羽上皇の院宣によつて、新古今和歌集を撰上した。古今集から新古今集まで八代の勅撰集を總稱して八代集と言ふ。その中で新古今集は古今集以後で最も勝れた歌集と言はれ、常に古今集と並稱せられた。

此の時代は學問はおもに公卿僧侶の間に行はれ、武士は大抵武道にのみ走つて文事を顧みることが少かつた。北條義時の孫實時、實時の子顯時等が學問を楽しみ、武藏の金澤(川縣)の別荘を稱名寺とし、文庫を設けて多くの書籍を集めたのは當時には珍しい美談であつた。

此の時代は戦亂の後を承けたから軍記物が多く現はれた。就中保元物語と平治物語は保元・平治の二亂の始末を記し、平家物語と源平盛衰記は共に平家の盛衰を述べてあつて何れも文章は雄健で波瀾に富んでゐるが、殊に後の二書が優つてゐる。忽ちにして榮華の極に達し、また忽ちにして滅亡の底に沈んだ平家の運命を、専横な清盛と温厚な重盛、暴慢な義仲と勇略に乏し義經とを對照しつゝ、巧みにも美しくるがき出してゐる。

妹に軍書讀まする夜明かな。

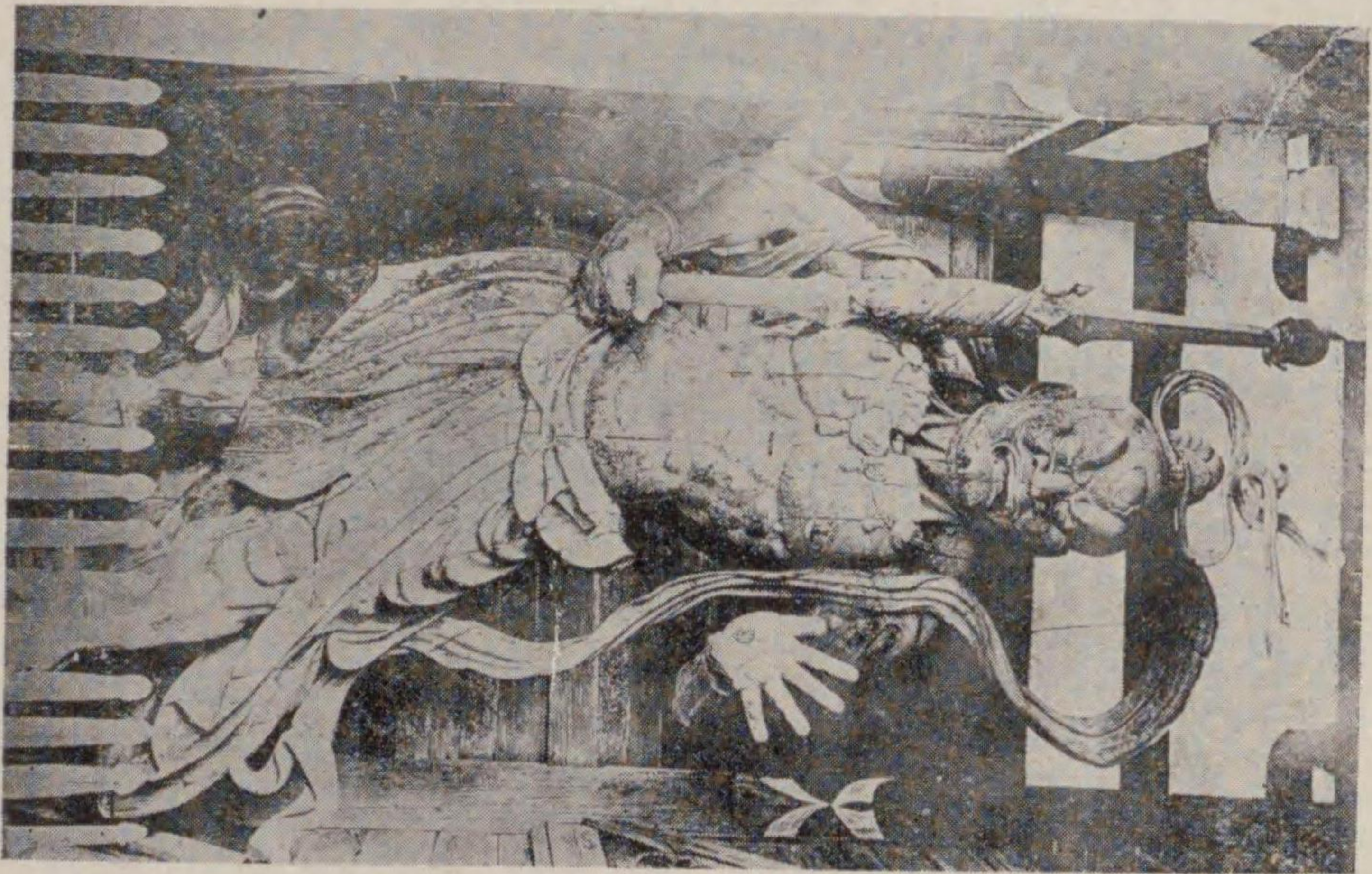
子

規

當時の建築は宋の影響をうけて、平安時代の様式から變つて雄強な風に富んで来た。はじめ平清盛が平重衡をして南都を攻めさせた時、東大寺は兵火の爲に炎上してしまつた。それで鎌倉時代になつて再建する時、支那南方から多くの工人を招いて、新しい様式で建築させた。これが所謂天竺様で、現存の大佛殿の鐘樓及び南大門はその時に建てられたまゝ残つたものである。また禪宗の輸入と共に禪宗寺院に適合するやうな特有の建築法も傳來した。これを唐様と呼んだ。當時建てられたものでは圓覺寺の舍利殿だけ残つてゐる。これらの様式も、平安時代から傳へた和様とを相折衷して新しい様式も漸次出来て来た。

當時の彫刻も、時代精神を發揮して力の表現に巧であつて、雄壯なものが多く作られた。定朝の子孫の運慶とその子の湛慶が彫刻家として特に名高い。運慶は快慶と共に東大寺南大門の二王の像を造つた。すこぶる大きい木像であつて、高さが二丈六尺、我が國で最も大きい二王であり、勇ましいいこも類を見ないほごである。しかも肉體が寫生的に出来てゐる。筋骨から姿勢まで、生きた勇士を見るやうである。鎌倉の大佛も此の時代のものである。

東大寺は平重衡に焼かれたが、すぐ後白河法皇の勅命によつて再建された。南大門は當時のまゝ残つてゐる。その二王は運慶と快慶との合作で、我が國二王中、最も大きく、鎌倉時代を通じて最もすぐれた彫刻である。雄健な氣分が遺憾なく表現されてゐる。



111 東大寺南大門二王

が、圓滿な上品な、かつ釣合のよくされた御姿である。

灌佛や運慶閑に刻みけん。

召波

繪畫は當時土佐・春日等の流派がさかえてゐた。大寺名社の縁起や、高僧の傳記や戦争や物語を寫した繪卷物が主として描かれ、その中に不朽の名作が多く残つてゐる。院政の頃の藤原隆能は土佐派の人で源氏物語繪卷を、鳥羽僧正覺猷は信貴山縁起繪卷をゑがいた。共に當時の二大傑作で非常に艶麗なものである。僧正はまた墨畫で、鳥獸の遊戯によつて人間の裏面をあらはした漫畫をかいた。鎌倉時代になつて藤原隆信が出た。肖像畫の大家で、重盛・頼朝の像などはその大作である。その子信實も肖像をかくのに名を得たが、また北野天神縁起繪卷や三十六歌仙繪などの傑作を残した。住吉慶恩の平治物語繪卷は運筆が雄健であつて、人馬の活躍する様は眼のあたり戦亂を見るやうである。土佐長隆の蒙古襲來繪卷は此の役に戦功のあつた竹崎季長の依頼によつて描いたもので、我が軍の奮闘の状をよく現してゐる。高僧の傳記をゑがいたものには法然上人の傳繪や、一遍上人の傳繪や、鑑直和上東

征繪傳なきがある。高階隆兼の春日權現驗記や石山寺縁起繪卷は此の時代の末の最もすぐれた代表作である。書道には流麗な和様が盛んであつて、専ら藤原行成を祖とする世尊寺流が行はれたが、當代の末に伏見天皇(第九十)の御子入道尊圓親王は世尊寺流から出て別に一流をお創めになつた。親王は京都粟田の青蓮院の門跡であらせられたから青蓮院流と稱し後世御家流と呼んだ。また禪宗と共に支那宋風の書も並び行はれた。

土佐が畫や春の裾山緋の袴

子規

工藝美術としては武家時代であるから武器の製作が進歩し、殊に刀劍なきの武器が進歩した。後世永く名工として知られた粟田口吉光・岡崎正宗・郷義弘の如き刀工も此の時代に出た。世に此の三人を三作と言つた。また陶器が進歩した。それは僧道元が入宋した時、加藤景正といふ人がついて行つて、彼の地の製陶の法を精しく學び、歸朝して尾張の瀬戸で窯を開いたからであつて、これが瀬戸焼の起だと言ふ。

第三十一元

寇

北條時頼の子時宗は武勇果斷の人であつた。幼い頃相模太郎と言はれた。射術に長じ、十歳の時、將軍宗尊親王の御前で、その妙技を現はして感賞を賜はつたことがあつた。父の退職した時は僅かに六歳であつたから、一族の長時・政村が相繼いで執權になつたが、時宗は文永五年十八歳で政村の讓を受けて執權になつた。時宗の時にかの蒙古が我が國に襲つて來たのである。

蒙古は今の外蒙古の東部に居つた種族で、初は非常に勢力のないものであつたが、平安時代の末頃から勢力を得て來た。鎌倉時代の初頃に鐵木眞言ふ絶代の英雄が蒙古の諸部落を併せて、遂に帝位に上り、成吉思汗と呼ばれた。それから益々侵略の歩を進め、黄河以北を定め、西へ向つて中央亞細亞を略し、黒海まで達した。後に國號を元と言つたので、その太祖と稱せられた。その後太宗・定宗・憲宗が相嗣いで、太祖の業を繼いだが、次に世祖忽必烈の

代には、その版圖は東は朝鮮半島の高麗から、西はヨーロッパのホンガリヤに及び、宋も殆んど亡びかけてゐた。されば日本のみ獨り朝貢しないのが、蒙古にまつては甚だ癩にさはつた。それで蒙古はまづ國書を高麗王に託して我が國に傳へさせたが、言ふまでもなく脅迫状態で、「兵を用ふるに至りては、夫れ孰か好む所ならんや。」なきの語があつた。それが文永五年（一九二八年）に到着した。朝廷はその無禮を怒つて返書しない事定められ、幕府は同じやうに返書しないやうに上奏した。翌年にまた蒙古の使が來た。此の折朝廷は蒙古の書面の無禮なのお怒りになつて、斷然拒絕する意味の答書文案を作つて幕府に示されたけれども、幕府は一戦を賭する覺悟で斷然返書しないここにきめて、その使を逐ひかへし、鎮西の將士に命じて兵備を嚴かにさせた。

此の時代は我が國民の愛國心が、すこぶる盛んであつて、炎の燃え上るやうであつた。第二回の蒙古の國書に對し、朝廷が拒絕の返書を送らうとせられた時、これが民間へもれ聞えて、朝廷は蒙古と和親することに決せられたと言ふ噂さへ起つた。京都の西賀茂の正傳寺の

宏覺禪師は名を慧安、號を東巖と言ふ。大いに朝廷の弱腰を憤慨し、六十日間、蒙古降服の祈禱をつゞけたが、その祈禱文の終に、

先度の國書には返書されず、今度の國書には返書を送られ、かつ和親を結ばれると言ふ風聞がしきりである。正傳はこれを聞いて、悲しきは極まりがないのである。願はくは、神様が貴賤もなく凡ての日本人の身體の中に入つて、運を良くし、勢を増し、蒙古の敵を斬り從へさせ給へ。また神様が雲となり、風となり、雷となり、雨になつて、國敵を打破り、天下を泰平に、諸民を安心させ給へ。

と言ふ意味の文が書いてあり、祈禱文の巻物の裏には次の歌を書きそへてあつた。

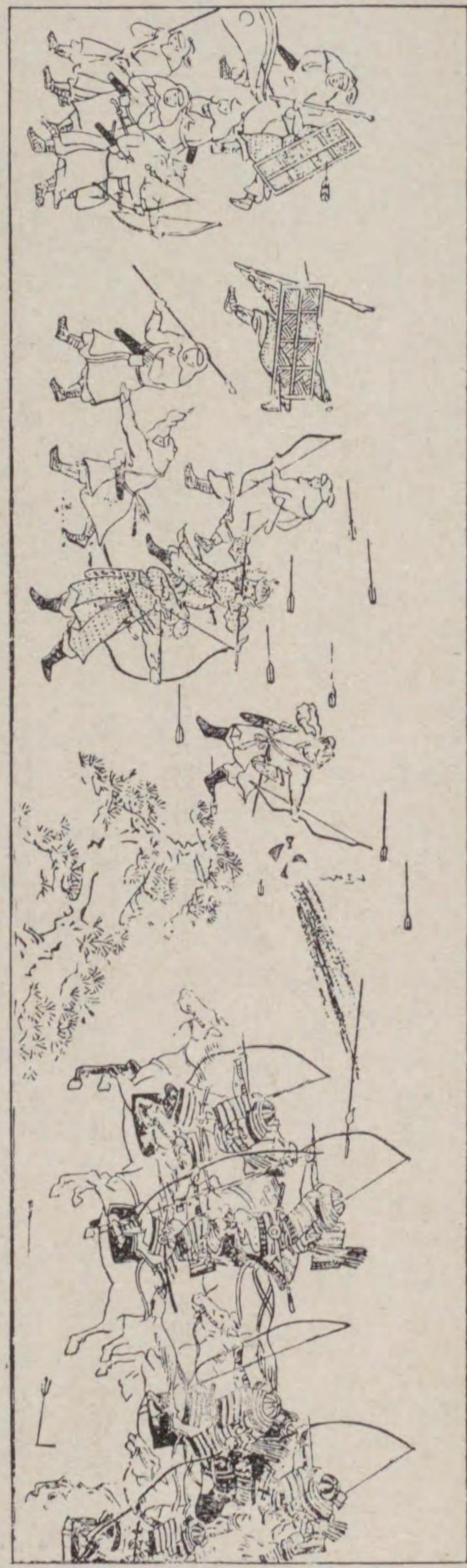
末の世の末の末まで我が國はよろづの國にすぐれたる國。

その愛國心はいかにも盛んなものではないか。

その後、度々蒙古の使が來たけれども、皆追ひ返し、九州北岸に大いに軍備を修めたが、蒙古も遂にしびれを切らして、第九十一代後宇多天皇の文永十一年（一九三四年）十月、元主は

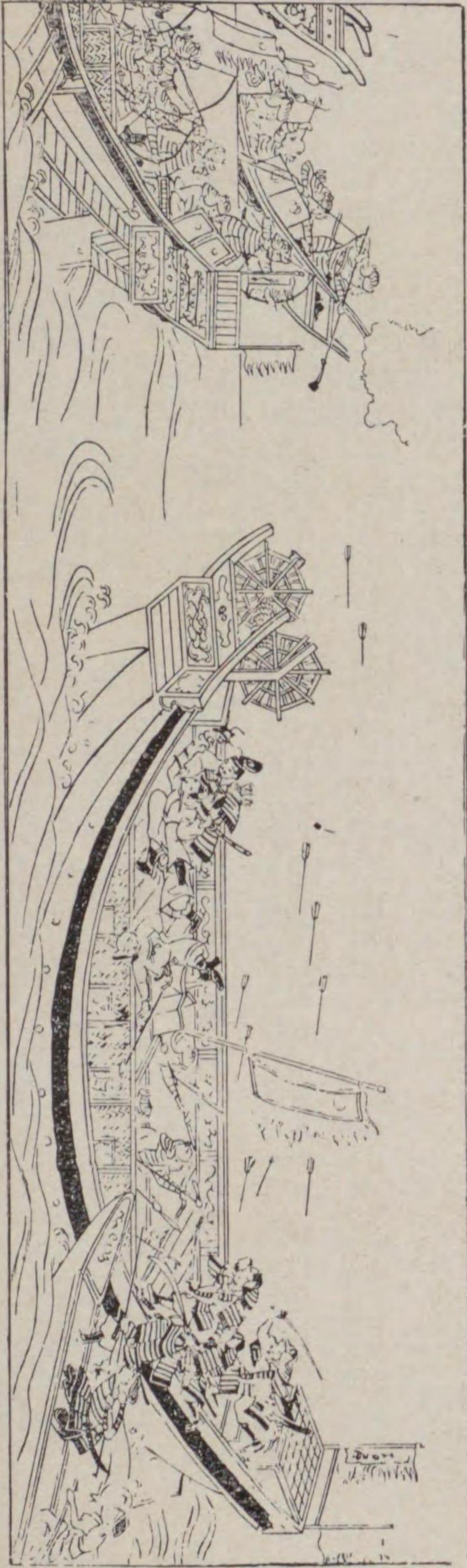
欣都・洪茶丘等を將とし、高麗の軍を合せて凡そ兵三萬、戰艦九百餘艘で攻めさせた。元・高麗の聯合軍はまづ對馬を襲った。守護代宗助國は奮戦して防禦したが衆寡敵せず、一族國難に殉じた。賊は進んで壹岐を攻めた。守護代平景隆が力戦して死んだ。賊は島民を或は捕へ、或は殺し、彦に十月二十日には博多(福岡)に上陸した。それで少貳景資・大友頼季・菊池武房等の九州の諸將士は身命を惜しまず、これを拒いだけれども、當時の日本人の戦争は一騎打であつて、敵の大將が出るに、こちらからも大將が出て斬合ふ。主人が危くなるまでは、従者も助けられない風習であつたが、蒙古は團隊に或は進み或は退き、我が軍から名乗をあけて一騎二進しても、すぐ蒙古から大勢出て取圍むから、鍛ひあけた武藝も役に立たない。その上敵は毒矢を放ち、あまつさへ我が軍の夢にも知らぬ鐵砲を放つてすこぶる我が軍を苦しめたので、形勢は大いに不利になつたが、しかし敵も我が軍の勇敢に剛強なのに驚き、案外の思がしたのであらう。一旦戦を中止して、夕方になつて敵は兵船へ歸り、我が軍は海岸から四里ほぎ奥の水城村まで退いた。たまに、此の夜大風雨が起つて敵艦は多く沈没し

文 永 の 役



蒙古襲來

この繪は土佐長隆とその子長章とがこの戦役にかの厚な着色がある。我が軍の勇敢に戦つてゐる有様がよく示されてゐる。



て溺死する者が多く、残兵は恐れて逃げ歸つてしまつた。

蒙古はかく一度失敗はしたけれどこれに尙懲りず、翌年また杜世忠等の使を遣はしたので、時宗はこれを鎌倉附近の龍口に斬らせて、たつぐち いたる態度を示した。さうして一族の北條實政を九州探題として入寇に備へさせ、九州の諸豪族に命じて石壘を博多附近の海岸に築かせ、益々防備をきびしくした。更に我から敵地へ向つて征伐の軍を出す計畫を立て、戦艦を修め、出征の準備を命じたが、これは實行が出来なかつた。弘安二年に元の將范文虎はその部下周福等を使者として我が國を誘はせたが、周福は博多で斬られてしまつた。元の世祖は是非も日本をほさねばやまぬと言ふ決心で、日本行中書省にほんかうちうしよしやうと言ふ日本征伐の役所まで臨時に設けて大兵を催し兵船を整へた。その頃には宋をば全く亡ほしてゐたので、その餘威を振つて、一舉に我が國を破らうとしたのである。それで朝廷からは伊勢神宮へ勅使を立てられ、敵國降伏の御祈禱の誠をつくされ、諸社諸寺に仰せて御祈禱を毎日修めさせられた。九州に於ける防戦の用意は末の末まで行届かせた。諸國の武士は皆「たごひごんな事があつても、此の

日本を異敵には奪はせない。ミ牙を嚙鳴らして覺悟をきめた。

弘安四年(一九四一年)五月、再び元は大軍を發して來り侵した。欣都・洪茶丘等が東路軍の將となり、范文虎等が江南軍の將となつた。東路軍は支那・蒙古・高麗の兵を合せて四萬、朝鮮から進み、再び對馬を侵し壹岐をかすめて筑前に迫つた。我が將河野道有・同通時・少貳景資・大友貞親・菊池武房・竹崎季長等は奮戦して、今度は一步も敵を上陸せしめず、沿岸の石壘によつて防いだり、更にまた小舟に乗り敵艦に強襲して艦中に斬入つたりして、二月以上も防いだ。永い船上生活で敵は兵糧が乏しくなり、病人もできて困つてゐたのに乘じ、我が軍はしばし攻めて敵を破つた。朝廷では龜山上皇が殊に御憂慮遊ばし、御みづから石清水八幡宮へ御幸になつて御祈を行はせられ、御宸筆の宣命を伊勢神宮に捧けて、御身を以て國難に代らうとまでお祈り下さつた。もし元の軍が強くて、萬一にも九州を占領せられたら、關東の兵を上洛させて主上・東宮を守り奉らせる、また筑紫の模様によつては六波羅の兵を西國へ下して防がせる計畫さへあつた。元の江南軍は約十萬、揚子江の南から發し、豫

弘安の役

定からや、遅れて七月の末に來會した。東路軍は退いてそれと合し、將に大いに我に迫らうとしたが、時なるかな、七月晦日の夜から翌る朝、七月朔日にかけて、俄に大風が吹起り、岩石を飛ばし、大木を根こぎに引く位であり、海水が騒ぎ立つて、大浪は山の如く起つたから、敵艦は木の葉の如くに漂ひ、大方覆没してしまつた。文虎は弱い男で、殘兵を肥前の鷹島に捨て、逃げて歸つてしまつたので、それらは皆我が軍に襲はれて、或は斬られ、或は捕へられた。その捕虜の中で遁れて本國に歸つた者は三人だけであつたと言ふ。

三 元

かくして未曾有の國難も全くしづまり、朝廷の御熱心なる御祈禱と、時宗の果斷と防備のよろしきを得た事と、鎌倉武士の勇敢であつた事及び上下一致してよく國難にあたつた事、これらの理由によつて我が神州は寸土も異敵に汚されなかつたのである。さしも強大で向ふ所に敵がなかつた元も、唯我が國に對つてだけは全く失敗し、此の後も更に幾度か來寇を企てたが、終に攻めて來るここが出来なかつた。

寇

龜山上皇

世のために身をも惜まぬ心も荒ぶる神も照しわくらん。

照憲皇太后

仇波はふたたび寄せずなりにけり鎌倉山の松のあらしに。

第三十二 北條氏の滅亡

第八十八代後嵯峨天皇の次に御子後深草天皇(第九十)がお立ちになり、次いで御弟龜山天皇が御位につかれた。父帝は龜山天皇の御英邁なのを愛せられ、永くその御子孫に皇位を繼がせられたいご思し召された。さればその御次に、龜山天皇の御子後宇多天皇が立ち給ひ、龜山上皇は院中に政を聽し召されたけれども、後深草上皇は政治に少しも與り給ふことがなかつた。

後深草上皇の御上を痛はしく思ひ奉り、北條時宗は奏請して、後宇多天皇の皇太子には後深草上皇の皇子を立て奉つた。これが次の第九十二代伏見天皇であらせられる。それで伏

見天皇の御代には後深草上皇が院政を見そなはした。伏見上皇は御讓位の後、京都の持明院殿に御閑居あらせられたので、此の御系統を持明院統と申し、後宇多上皇は御出家の後、嵯峨の大覺寺へお入りになつたので、此の御系統を大覺寺統と申しあける。

伏見天皇の御次には御子第九十三代後伏見天皇がお立ちになつた。後宇多上皇は後嵯峨天皇の思し召しに違ふのを御憤りあつて、院使を鎌倉に遣はして幕府をお責めになつたので、時宗の子執權貞時は、姑息の計を立て、後深草・龜山の兩皇統が代るゝ、即位し給ふやうに奏上した。これによつて御次に後宇多上皇の御子後二條天皇(第九十)がお立ちになり、後宇多上皇が院政を見られた。やがて後二條天皇が崩御せられたので、御次に後伏見上皇の御弟が即位せられ、花園天皇(五代)と申し上げた。伏見上皇が院政をこられ、後に後伏見上皇が院政をお聽になつた。

持明院統は幕府に對して好意をお寄せになつたが、大覺寺統は常に幕府の處置をお憤りになり、また朝臣もおのづから二派に分れ、各々心を寄せ奉る皇統から天皇を立て奉らう

こして、互に争ふやうになつた。

北條氏は上皇室の御憎しみを蒙つたが、更に内部では財政に困難し、その經營に失敗した。



さきに蒙古の變は無事に
をさまつたけれども、軍
費を夥しく費し、かつ
また諸大社寺の敵國降伏

の祈禱の費用がかさみ、大難が平いで後も寺社からの要求がしきりで、修法の供施、殿堂の營繕等が相つき、かつ沿海の防備を依然として續けたので、國民は漸く重税に苦しみ、北條氏に對し怨聲を放つやうになつた。

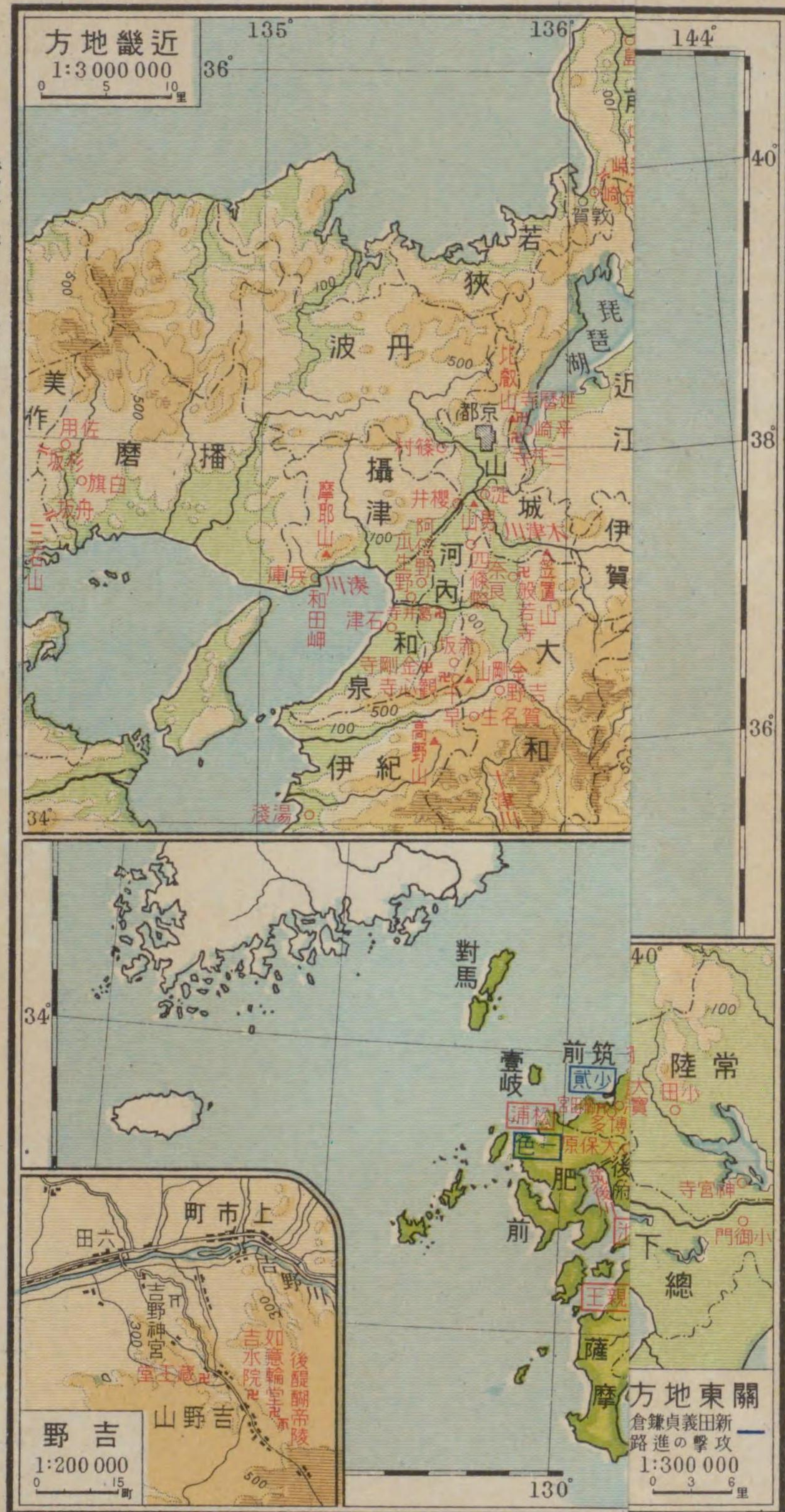
かゝる時にあたつて幕府に一大英雄が出なければ、もはや運命を豫想するに難くない。所が北條貞時の子高時は幼弱で執權職をつぎ、少しも政治を顧みなかつた上に、長じても日夜宴樂に耽り、殊に闘犬を好み、百姓に課して犬を租税に代へさせ、數千頭を集めて頗る大切

田樂はもと農民が農作の疲をなくさめる爲の遊藝であつたが後に田樂法師と稱する専門の藝人の職となつた。圖は鎌倉時代始に多か
れた年中行事繪卷の模寫であつて街路で田樂法師が樂器に合せて踊
つてゐるところである。



田樂

第四圖
鎌倉時代末期
吉野時代要地圖



に飼養し、美肉を與へ錦繡を着せ、篋輿にのせて人に昇がせたりした。また當時田樂言ふ遊藝が盛んに流行したが、高時は澤山の藝人を呼んで日夜に舞ひ踊らせ、剩へ大名各々に一人づつ預けて養はせたから、費用は大いにかさんで皆苦しむ、人心は次第に幕府を離れた。陸奥の人安達季長がその一族と争うて幕府へ訴へた時、内管領の長崎高資は双方から賂をこつたので、久しく判決を下す事ができなかつた。それで二人とも憤つて兵をあげて叛した。幕府は兵をやつて討たせたが、却つて敗れて功がなかつたので、久しくこれを鎮めることが出来なかつた。

花園天皇の御次には後二條天皇の御弟後醍醐天皇(第六代)がお立ちになつた。天皇は常、北條氏の専横をお憤りになつたが、學者を召して廣く學問を修め、また御心を政治に注がせられ、幕府が人心を失つてゐるのに乗じこれを討伐しようと思し召し、正中元年(一九八四年)中納言日野資朝・藏人日野俊基等を山伏の姿に更へさせて、近國を巡つて勤王の武士を招かせられた。此の時美濃の人士岐頼兼・多治見國長等がお召しに應じて參つたが、不幸

にしてすぐその事が知れて、二人は六波羅の兵に戦つて死し、資朝・俊基は捕へられて鎌倉へ送られた。天皇はそこで、中納言藤原宣房を勅使として高時に告文を下されたので、やう事がすみ、俊基はゆるされ資朝は佐渡に流された。世にこれを正中の變と言ふ。

天皇は先に、御父後宇多法皇の思召しで、後二條天皇の皇子、即ち天皇の御姪邦良親王を東宮にお立てになつたが、皇子は御即位なさらずして薨去せられたので、更に皇子の中より皇太子を定めようと思はれたが、高時は聖旨を奉ぜず、兩皇統交立の先例を主張して、遂に後伏見天皇の御子量仁親王を皇太子にお立て申した。されば天皇は益々北條氏の專横を逆鱗あつて討伐の御企を強くせられた。まづ皇子護良親王を天台座主とし、延暦寺の僧徒をなつて後口の御計畫に供へしめられ、更に元弘元年（一九九一年）に到り、宮中に僧圓觀・文觀等を召して高時を呪咀させられ、かつ御謀にも與らしめられた。しかしこれもすぐ聞えたから、幕府は大いに驚き、直に圓觀等を配流し、再び俊基を鎌倉へ送つて斬つた。

先に佐渡へ流した資朝をも同じ頃配所で斬つた。資朝の子に阿新丸と言ふのがあつた。歳

はまだ十三であつたが、父が斬られる由を聞いて、母に暇乞し、中間を一人召し連れてはる／＼佐渡へたづねて行つた。父はその國の守護本間入道の館に囚はれてゐた。「私は日野中納言の子であります、父が近日斬られ遊ばすに聞いて、御最期の様を見たくて都より参りました。」と言ふに、本間も哀れがり、内へ入れて鄭重にもてなしてやつた。しかし關東へ憚つて、父子の對面を許さないで、密かに資朝を殺してしまつた。折角尋ね下つた甲斐もなく、空しき父の遺骸を見て阿新は涙にかきくれてゐたが、遺骨は中間に持たせ、高野へ納めよ。「さて都へ上らせ、自らは本間の館に留まつてゐた。今生で父に會はせてくれなかつた怨を報いようと思つてゐたのである。或夜雨風が烈しく吹いて、家來もは遠侍に寝てゐたので、今こそ待つ所の幸よ、本間が寢所へ忍び入るに、入道はゐらないで、父を斬つた本間三郎と言ふ者が寝てゐた。これも時にまつての敵ぞ、障子を少しあけるに、折ふし夏の事であるから、蛾が飛入つて燈を消した。うれしくて枕がみを探り、まづ刀を取つて腰にさし、太刀を抜いて胸元にあて、足で枕をはたき蹴り、驚く所を疊までつみ突通し、返す刀に

喉笛指切つて、心靜かに後の竹藪へ隠れた。一の太刀に胸を通されて、あつこ言つた聲に、皆が驚いて火をこもして來て見るこ、血のついた小さな足跡がある。さては阿新殿のしわざぞこ、忽ち手別して探しかけた。阿新は竹原の中に隠れながら、今はもう遁れる道がない。人手にかゝるよりは自害しようとしたが、また思ひ返し、命を全うして父の宿志をつぎ、君の御用に立ちたいとて、堀の上に末の傾いた竹の梢へよぢ登るこ、堀の向へなびいて、安々とこえられた。道は知らぬが濱邊へこ、たぎる程に夜も明けて來たから、かたへの麻や蓬の茂みに身をかくしてゐるこ、追手百四五十騎が驅けて行つた。その日はその麻の中に暮して夜になれば湊へこ心ざし、無事便船を求めて都へかへり、成長の後には君に仕へて忠義の人となつた。日野中納言邦光言ふのは此の人である。

さて此の歳八月、高時は大兵を率ゐて上京させ、承久の例にならつて、天皇を遠國に移し奉らうと企てた。此の時二階堂入道道蘊はこれを諫めて、「君は君の御振舞なくとも、臣は臣の道を忘れてはならぬと申します。たゞひ君が武家追討の御企をなさつても、武家がい

よ、慎しんで勅命に従ひまつるならば、君もさうして思し召し直す事のないこごがありませうや。」と言つたけれども、用ひられなかつた。

幕府の此の企は護良親王からの奏上によつて早く知れたので、天皇は即夜神器を奉じて、中納言藤原藤房等を隨へ給ひ、夢の中の御心地で奈良へ行幸せられたが、周圍の形勢が頼もしくなかつたので、木津川の上流に聳える山城南部の笠置山にお出でになり、そこの僧兵をお頼みになつて、近國の武士を集めさせられた。しかし世間體には延曆寺へ行幸せられた風にして、大納言藤原師賢に袞龍の御衣を着させ、天皇と稱して叡山に赴かせられた。六波羅探題北條時益・同仲時は幕令によつて皇居を索めたが、天皇は既にましまされぬので、急ぎ延曆寺を襲つた。護良親王は衆徒を指揮してこれを近江の辛崎に破られたが、延曆寺では、新からの風に御輿の御簾が吹きまくられ、天皇ではなく師賢であると言ふ事が僧徒に知れたので、僧徒は失望して八方に逃げ散り、延曆寺の防禦も忽ち破れてしまつた。

天皇は笠置にましくつて、河内の豪族楠木正成をお召しになつて討賊の事をお言付になつ

た。始め天皇は御夢に、所は紫宸殿の庭前に大きい木があり、南の枝が殊によく茂つてゐる。その下に多くの公卿が列座してゐる。南へ向いた上座に疊を高く敷いてあるが、まだ坐つてゐる人がない。天皇は夢の中にも、誰の爲の座であるか怪しんでゐられるこゝ、びんづら結うた童子が二人来て、天皇の御前にひざまづき、涙を流して、「忝くも天下の間に、御身を安んじ給ふ所がありません。たゞあの木の南影こそは御爲に設けた玉座でございますから、暫くこれへ御越しなされませ。」と申して、童子は遙かの天へ上つた。天皇は夢からお覺めになつて、これは天の御告ご思召し、文字から判じなされ、木に南を書けば楠である。その影に坐せよと言ふのは、楠木といふ武士を頼めこの告であるとお考へになり、さてこそ正成をお召しになつたのであると言ふ。正成は謹んで聖旨を奉じ、「勝敗は時の運でございますから、一二の勝敗で御心をお動かしになつては宜しくございませぬ。正成一人が生きてゐるごお聞き下さいましたら、遂に聖運が開け遊ばすものと思召し下さい。」と申し上げて、河内へ歸り赤坂の城を築いて旗をあけた。

九月に高時は皇太子を立て奉つて天皇を稱した。光嚴院に申し上げる。ついで幕府は近畿の軍をして笠置に攻寄せさせ、更に大佛貞直・足利高氏等に命じ、大軍を率ゐて京都に向はせたが、まだ到着せぬうちに、陶山・小見山の徒が間道よりせまつて火を行宮に放つたので、さしも要害の笠置も陥り、天皇は藤房等の二三の朝臣を従へられたばかりで、正成の赤坂の城をさしてお逃れになつた。忝くも十善の天子が玉體を賤しき者の間に伍し、人目をさけてお忍びなされるのである。如何にもして夜の中に赤坂城へご御心をつくされたが、假りにも未だ習はせ給はぬ御歩行であるから、一足には休み、二足にはお立止りなされるのであつた。こある木蔭に立寄りせられた時、下露がはらく、ご御袖に懸つたのを、天皇は御覽ぜられて、さして行く笠置の山を出でしよりあめが下には隠れがもなし。

いかにせん頼むかけにて立寄ればなほ袖ぬらす松の下露。
ご御答へ申し上げた。やがて賊兵がおさがし申して、終に六波羅へ移し参らせた。

東國から上つた幕府の大軍は笠置がおちたのを聞いて、皆正成が立籠る赤坂城へ攻め寄せた。赤坂は俄に造つた城であるから、容易に落されさうに見えたので、敵は一時に攻めつけろ、櫓の上や物の蔭から、指つめ引つめ鎌をそろへて射るので、忽ち死人手負が山の如くできた。やれ、油断ができぬぞ、一旦退き馬より下りて物具を脱いで休んでゐるぞ、東西の山の木蔭から菊水の旗二旗を松の嵐に靡かせて、ぎつぎばかりに攻寄せろ、同時に城の木戸もさつぎ開かれ鋒先そろへて討つて出で、また寄手を散々になやました。或時は寄手が城近く取巻いて、四方の扉に手を懸け上り越えようとするぞ、その扉は二重に塗つてあるので、城中から四方の釣綱を一度に切つて落すぞ、ぐわらぐわら崩れおち、寄手は千餘人も壓伏せられて苦しむ所を、大石大木を投げ懸け、打つたので、寄手はまたも大敗した。しかし城中はもこゝ兵糧の貯が少かつたから、長い戦争の爲、今は次第に残無くなつて来た。正成は乃ち士卒を集めて言渡し、自害した體にして、敵の死骸を入置き、ある雨風の夜に火を城にかけ、寄手にまぎれて三人五人別々になつて落ち、一旦赤坂を去つた。此の頃備後の

人櫻山茲俊も兵をあけたが、笠置が落ち、赤坂も陥つたを聞いて自害して果てた。
翌年三月幕府は天皇を隠岐へ遷し奉つた。正しき一天萬乗の君を下さして遷し奉る淺間しさよ、武家の運命も今の中に盡きようぞ、憤る聲が巷にみち、赤子の母を慕ふが如く泣き悲しむ聲が喧しかつた。こゝに備前の國に兒島備後三郎高德と言ふ人があつた。早くから忠義の志をいだいてゐるが、天皇が隠岐の國へ遷幸し給ふを聞き、二心なき一族の者を集めて評定し、「志士仁人は生を求めて仁を害するなし、身を殺して仁を爲すことありと言ふ言葉がある。義を見て爲ないのは勇氣がないのだ。さあ臨幸の路次に参りあひ、君を奪ひ奉つて忠義を盡さうではないか。」と言へば、皆同意した。さらば路次の難所にお待ち申さうにて、備前(岡山)三播磨(兵庫)の境にある船坂山の巔にかくれ、今か今か待つてゐた。臨幸があまりに遅かつたから、人を走らせて見させるぞ、警固の武士は播磨の今宿から山陰道へかけて遷幸し奉つたと言ふ。それでは美作の杉坂こそよからうぞ、三石山から筋違に、道もない山の中をわけて杉坂へ着いたが、天皇は早や院庄(岡山縣)へ入られた後であつたの

で皆々力なく、これから散々になつてしまつた。高德はせめて、此の所存を上聞に達したいと思つて、行宮へ志し、姿をやつして時分を伺つたが、然るべき隙もなかつたので、君の御座ある御宿の庭に、大きな櫻の木があつたのを、押削つて大文字に一句の詩を書附けた。

天莫空勾踐

時非無范蠡

此の意味は、昔支那で吳の國と越の國とは隣りあつてゐたが、仲が悪くて戦が絶えなかつた。初は吳の國の方が盛んであつて、その王夫差は越王勾踐を擒にした。しかし越には范蠡と言ふ賢臣があつたので、王を救つた。勾踐は自分の國へ歸り、表面は吳の臣となりながら、常に仇討ちを忘れず、膽を嘗め薪の上に臥して、苦心を重ねて富國強兵をはかつて、遂に吳を破つて仇を復することが出来たのである。此の故事を思ひ寄せて、高德は、天皇の御運が再び必ずお開け遊ばすことを密かに申し上げたのである。御警固の武士もは翌朝これを見附けて、何事を書いたのかと、讀みかねて上聞に達した。天皇はすぐその心をおさかりあつて、龍顔が殊に御快く笑ませられたけれども、武士等は全くその意味がわからなかつ

たので思ひ答める事もなかつた。

三郎は筆で毛蟲をはらひのけ。

(川柳)

天皇はかくて隠岐へ遷され給うたが、更に諸皇子もそれ々々遠國に遷され給ひ、御謀に與つた師賢・藤房等の公卿・僧侶もそれ々々に配流せられ、或は斬られた。此の亂を世に元弘の變と言ふ。

かくて高時は承久の大勝に同様得心得てゐたが何ぞ計らん、次第に勤王の軍が四方に起り、やがて北條氏は亡はされるやうになつたのである。大塔宮護良親王は笠置城の安否がまだ定かならぬ頃、暫く南都の般若寺に忍んで居られたが、城もすでに陥り、天皇もこらはれ給うたごお聞きになり、虎の尾を踏む恐が御身に迫つて来た。或日宮に附奉る者が皆留守の時に、賊兵が不意によせて来た。一防ぎして落ちさせ給ふやうもなかつたので、隠れて見ようと思し召して、佛殿の方を御覽になるに、人の讀掛けておいた大般若經の唐櫃が三つあつた。二つはまだ蓋をあけてない。一つの櫃は御經を半ば以上こり出して、蓋を取のけてある。一

つの蓋のしてない櫃の中へ御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引かづき、隠形の呪を御心の中に唱へておはした。もし捜し出されたら、突立てようと思し召して、氷のやうな刀を抜いて御腹に指當て、兵の「此の處にこそ。」と言ふ一言を待たせられた。やがて兵ごもは佛殿に亂れ入つて佛壇の下、天井の上まで残るくまなく捜したが、尙求めかねて、「是ぢやないか、あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋をした二つの櫃を開き、底を蹴して見なければ居られない。蓋のあいたのは見るまでもない。賊兵は皆寺を出た。宮は不思議の命を續かせられ、夢路をたぎる心地して、尙櫃の中に居られたが、また立歸り委しく捜す事があるかも知れないと、御思案せられて、前に兵の捜してみた櫃に入替らせられたら、案の如く兵士はまた立歸つて「前に蓋のあいてるのを見なかつたが、頼りない。」とて御經を皆取出して見たが、矢張り居られぬので出て行つた。かくて南都の隠れ家も危険になつたので、をお立ちあつて、僅かばかりのお供をつれて熊野(和歌山縣)の方へ行かれた。皆柿の衣に笈を掛け、頭巾をかづき、田舎山伏が熊野參詣の體に見せられた。熊野から十津川(奈良縣)へ

出られ、それから吉野の大衆を語らはせられ、岩切通す吉野川を前にして、城を構へて立籠られた。楠木正成はかの赤坂の城を逃れた後、また勢をえて、天王寺に六波羅の兵を破り、金剛山に千早城を築き、赤坂城をも回復した。同時に播磨の住人赤松則村(入道)はその子息律師則祐が此の二三年來、護良親王にお従ひ申して、忠勤をつくした縁故で、今度その地に兵をあけた。北條高時は大いに驚いて、また大軍を攻め上らせた。それで阿曾治時は赤坂に、大佛高直は千早に、二階堂道蘊は吉野にそれ々々大軍を以て押寄せた。赤坂は早く陥つた。吉野も敵の一部が搦手に廻つて大手と兩方から攻めたので、吉野大衆も思ひくりに討死した。宮も今は逃れぬ所と思し召して、緋織の鎧を召され龍頭の冑の緒をしめ、劣らぬ兵二十餘人と共に群がる敵の中に走り入り、東西に拂ひ南北に追廻されるに、敵は切立てられて木の葉の如く四方の谷へさつち散つた。宮は藏王堂の大庭に一同を集めて、最後の御酒宴をなさつた。御鎧に立つた矢も抜かれず、流れる血潮も拭はれない。かゝる所へ村上彦四郎義光は鎧に十六筋の矢が立つたま、御前に参り、「大手の一の木戸は早や攻破ら

れましたので、二の木戸に支へて居りましたが、御酒宴の聲が聞えましたので参りました。
 今はこても此の城を保つ事は出来ません。敵の勢が四方へ廻らぬ先に一方を打破つて、一先
 づ落ちさせ給へ。但し跡に残り留まつて戦ふものがなければ、君が落ちさせ給ふご心得て、
 敵はごこまでも追かけ申しませう。恐れながら、召されまする錦の御直垂を御物具を賜は
 り、御名を冒して敵を欺き、御命に代り奉りませう。」ご申し上げた。宮は「ごうして、そ
 んな事ができよう。死なば諸共にご思ふものを。」ご仰せられたが、義光は重ねて「漢の高祖
 は滎陽に圍まれた時、紀信が高祖を偽つて楚の軍を欺きませうと言つたのを、高祖はそれを
 許されたではありませんか。早やその御物具を脱がせ給へ。」ご御上帯をきき奉るご、宮は
 もつごもご思し召して、御物具や直垂を脱替へ給ひ、「我もし生きてゐたら汝の後生を弔つて
 やるぞ。共に敵の手にかゝつたら同じ冥途に會はうぞ。」ご仰せられ、涙ながらに落ちられる
 ご、義光は二の木戸の高檣に登り、遙かに宮を見送り奉り、遠く御姿を隔たつた頃、今はか
 うご思ひ、身を現はし大音聲に、「後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿親王護良、逆臣の爲に

亡ほされ、根を泉下に報ぜん爲に、唯今自害する有様を見おきて、汝らが武運忽ちに盡きて、
 腹切らん時の手々にせよ。」ご言ふまゝに、鎧を脱いで投落し、双肌ぬいで腹かき切り、太刀
 をくはへてうつぶしに伏した。寄手はこれを見て、「すはや宮の御自害よ。我れ先に御首賜は
 らう。」四方の圍を亂して集まるその間に、宮は恙なく天川(奈良縣)へ落ちられた。
 かくて千早には最初からの寄手の他に、赤坂・吉野の寄手まで馳加はつて、城を十重二十重
 に取圍み、城の四方二三里の間は見物相撲の場のやうであつた。僅かに千人に足らぬ小勢で、
 誰を頼み、何時を待つごもないのに、防ぎ戦ふ楠木の心こそ不敵の極みであつた。寄手はこれ
 を見侮つて、攻支度も用意せず、我先に城の木戸口の邊までひた押しに寄せるご、城中の
 者は少しも騒がず、大石を投懸け、楯板を打碎き、ひるむ所をさしつめ、射て、忽ち
 数千の死傷を出させた。寄手はあぐみ果て、「恐らくかゝる小城に用水があるごも覺えない。
 いか様東の山の麓に流れる谷水を夜々汲むご見えるぞ。城兵の來るらしい所へ番をせよ。」ご
 て待懸けた。楠木は智勇兼備の名將であるから城を拵へる時、いかなる早にも乾る事のない

五箇所の秘泉を發見し、尙その上に水舟を二三百造らせて雨樋の水を悉く受けたから、これでも五六十日は支へられる。されば谷の水を汲む要は少しもないが、水を防ぐ兵もが夜毎に氣をこらし待かまへて、次第に心が怠り氣がゆるみ、用心もおろそかになつた頃、まだ霧はれぬ曉に押寄せて、透間もなく切つてかゝつたので、敵は散々に破られ、何の甲斐もなく本陣へ逃歸つてしまつた。寄手が工夫をして攻めるこ、楠木は更に上手に工夫して防ぐので、初の如く勇んで攻めようとする者もなくなつた。仕方がない、兵糧攻にせよと下知して、軍をやめて唯遠巻に巻いた。正成はさらばまた寄手をたばかれよ、藁なごで人形を二三十作つて甲冑を着せ弓矢を持たせ、夜中に城の麓に立て、おき、ほのゝと明け霧の下から、ごつと鯨波をつくつた。四方の寄手はこれを聞いて、「さあ城の中から討つて出た。運のつきの死狂ぞ。」とて我先に攻合せた。城中の兵は矢軍を少しばかりするやうにして、大勢が近づく人形ばかりを残して、兵は皆引上げた。寄手は人形を實の兵と心得て討たうと集まる所を、大石四五十ほど一度にばつと集まる敵三百餘人は矢庭に打殺され、

重傷者もすこぶる多かつた。後ほごによく見れば藁人形であつたので、あほらしいやら情ないやら、いよく合戦しようも勇立つ者もなくなつた。

正成は跡でわらぢにしろと下知。

(川柳)

楠木は立てかけてみてをかしがり。

(同)

そのうちに關東より下知があつて、軍をやめて徒らに目を送つてはならぬと言ふ督促の命令が來たので、寄手は集議を盡して、御方の向陣と城との間の深い堀に橋をかけて渡れよ、その用意をして攻寄せて、我先に前んだ。今や此の城は眼前に落されさうに見える處に、楠木はかねて用意してあつたを見え、投げ松明のさきに火をつけて、橋の上に薪を積むが如く投げかけ、水弾で油を瀧の如く掛けたので火は忽ち橋にもえつき、谷風は炎をあふつて猛火は盛んに起り、寄手は進まうとすれば身を焦し、歸らうとすれば後陣の大勢が前の難儀をも知らずに押掛けるから、如何しようかと思ひあふうちに、橋桁は中より燃折れて谷底へごうと落ち、數千の兵は同時に猛火の中に落重なつて皆焼死に、折角の計畫も失敗に歸した。

その中に寄手の兵糧もなくなつて、こらへかねて引歸す者も多くなつて來た。千早城の堅固なのに勵まされて、諸國の勤王の軍は益々振つて來た。赤松氏は播磨を打つて出て、六波羅を攻めようとして、先づ攝津の摩耶山(兵庫縣)に城を構へて根據をつくり、伊豫(愛媛縣)の人士居通増・得能通綱も義兵をあげ、長門(山口縣)の探題の北條時直と戦つて、大いに敵を破つた。

元弘三年(一九九三年)閏二月二十四日天皇は密かに六條忠顯を隨へて隱岐の行宮を遁れさせ、伯耆(鳥取縣)に行幸せられると、その地の豪族名和長年が迎へ奉つて行在所を船上山に營み、兵を集めて護衛し奉つた。天皇は長年の忠勤を賞して、御みづから帆掛舟の繪をかいて名和家の紋に賜ひ、また次の御製を與へられた。

忘れめや寄べも波のあら磯を御船の上にごめし心は。

菊池武時は九州におこつて九州探題北條英時を討たうとした。櫛田宮の前に打過ぎた時、俄に武時の乗つた馬が立ちすくんで、一步も前へ進まない。「我が戰場へ向ふ道で、咎められるは何事か、その儀なら矢を一つお進め申さう。」とて神殿の扉へ二矢まで射た。矢を放

つこ均しく馬のすくみも直つた。菊池は小勢であるけれども、命を塵芥に比し義を金石に類して攻戦ひ、殆んぞ英時を捕へんとしたが、少貳・大友の輩が英時を援けに來たので、武時は遂に戦死した。その辭世して故郷へ送つた歌に、

故郷に今夜ばかりの命ぞ知らでや人の我を待つらん。

三月北條高時は京畿の形勢が不利であるのを見て、名越高家・足利高氏に大兵を率ゐて西上させ、船上山の行在所を犯さしめようとした。高家は京都で赤松と戦つて敗死した。高氏は時勢を察して俄に心をひるがへして官軍に歸順し、丹波の篠村(京都府)で義兵をあげて、五月七日六條忠顯及び赤松則村と軍を合せ、六波羅を攻めて陥れ、遂に京都を回復した。六波羅探題北條時益・同仲時は光嚴院を奉じて、東國に走らうとしたが、時益は途中で流矢に中つて死し、仲時は九日近江の番場で、龜山天皇の皇子守良親王の軍に破られ、進退にきはまつて士卒四百餘人と共に自殺した。今や時勢は一大轉廻すべき時となつた。六波羅が滅亡した爲に、千早の圍もおのづから解けて寄手はごごも無く散り失せた。二階堂・阿曾・大佛等の諸

將は官軍に降つたが、やがて皆誅せられた。

上野(群馬)の人新田義貞は先に千早の寄手に加はつてゐるが、高時の横暴を憤り、密かに護良親王の令旨をいたゞき、病を稱して領地に歸り、同じ五月その地で兵を擧げるに、關東の諸將士は響の如く應じたので、三道より鎌倉を攻めた。義貞は海道より二十一日の夜半、片瀬腰越を打廻り、極樂寺坂へかゝつた。北は山が高く路がけはしいのに、用心きびしく陣を並べて守つてゐる。稲村崎は崖の下の砂濱の道が狭い所へ、浪打ぎはまで逆茂木を多く引つけ、沖には四五町の所に兵船を並べ、横矢を射よう構へてゐる。義貞は馬より下り胃を脱いで、海上を遙々伏拜み、龍神に向つて「仰ぎ願はくば、内海外海の龍神八部、臣が忠義を鑑みて、潮を萬里の外に退け、道を三軍の陣に開かしめ給へ。」と恭しく祈念し、自ら佩いてゐた黄金作りの太刀を抜いて、海中へ投げこんだ。不思議やその夜の月の入る頃に、俄に二十餘町も干上つて平沙渺々たる濱になつた。それがために横矢を射よう構へてゐた敵の兵船も、引行く潮に誘はれて遙かの沖に漂うてしまつた。「進めや者ども。」と下知の下

に、ごつごつ許りに鎌倉さして亂入つた。遂に鎌倉勢は大敗して、二十二日高時は東勝寺に入つて自殺し、一族郎黨三百餘人皆腹切つて殉死した。ついで二十五日には九州探題の北條英時も少貳大友等の軍に攻められて自殺し、長門探題北條時直もその翌日に降参し、各方面も全く鎮定して、北條氏多年の榮華は忽ちに亡び、やがて將軍守邦親王も出家せられ、鎌倉の武府は全く廢絶してしまつた。頼朝が征夷大將軍に補せられてから百四十一年目であつた。

鎌倉や昔の角の蝸牛。

芭蕉

第三十三 建武の中興

後醍醐天皇は六波羅陥落の事を聞き召し、船上山の行在所を發し、山陰を東へ還幸せられた。御着京に先だつて、詔して北條氏の擁立した光嚴院を退けられ、年號も以前の元弘に復し、光嚴院の御代に行はれた任官叙位は皆お取消しになつた。楠木正成は車駕を兵庫に迎へ奉つて御先導を仰せ付けられた。かくて天皇は六月四日京都に還り給ひ、五日に皇居にお

はいりになつた。皇子・公卿を配所より召しかへし、盛んに一統の政を行はせられた。先づ光嚴院を先の皇太子の御資格として特に太上天皇の尊號を贈つて、持明院の皇統を安堵せられ、次いで記録所を置いて萬機の政を親ら視そなはし、別段に關白・太政大臣をお置きにならなかつた。しかし征夷大將軍には護良親王を任じて諸將を率ゐさせられた。戦亂の後を受けた領地等に就いて訴訟がすこぶる多かつたから、此の爲に雜訴決斷所を置いて領地に關する裁判をさせられた。また兵馬の大權をみな朝廷に收められたので、武者所を開いて武士を支配し、軍事を司せられた。諸國には國司または守護をおかれた。もこの朝臣より任じたものを國司と言ひ、武士より任じたのを守護と言つた。名は違つてもその實は同じ職務であつた。蓋し公家と武家を巧に調和して、新政を運用させる爲であつたのである。關東は數百年來武人の根據地であるから、天皇は特に皇子成良親王を上野大守させられ、足利高氏の弟直義を相模守に任じ、鎌倉に於て親王を補けて關東を治めしめられ、北畠顯家を陸奥守とし、結城宗廣と共に皇子義良親王を奉じて、陸奥・出羽を鎮めさせられた。

後醍醐天皇

世をさまり民やすかれ祈るこそ我が身につきぬ思なりけれ。

足利高氏は此の時、恩賞の第一に居り、御諱の一字さへ賜うて、もこの高氏を尊氏に改め、武藏・常陸・下總の守護に任せられ、新田義貞は上野・播磨の守護に、楠木正成は攝津・河内・和泉の守護に任せられた。その他の諸將も皆それ／＼重賞を蒙つた。かく新政の制度が出来て、表面は政權が朝廷にかへるこゝとなつた。翌年改元あつて建武とせられたので、世に此の新政を建武の中興と言ふ。

天皇はすこぶる政治に御熱心で、時勢に應ずる新例を開き給ふこゝも多く、今の例は昔の新儀である。朕の新儀は未來の先例となるであらう。こゝ仰せられた程であつた。しかし補佐し奉る朝臣中に明達の人がなく、かつ公卿は久しく天下の政治に與らなかつた故、世の中の大勢にくらく、事になれず、偏見にして公平を缺き、その上、政治上に動搖が多く、綸言(勅命)は朝暮に變ずるやうになり、賞罰は常なくして、決斷所で本主に安堵(領地の所有權を確(の意)は朝暮に變ずるやうになり、賞罰は常なくして、決斷所で本主に安堵(實にして貰ふ事)

を賜はつた者が、他人の内奏によつて、忽ちその地を別人に賞こして與へられるやうな事があり、所領一箇所を四五人が互に争ふ事もあつた。赤松則村の如きは早くより義兵をあけて、京都回復にはその功が多かつたのにも拘らず、一旦任せられた播磨守を召上げられ、僅かに佐用の一莊に換へられたのである。こんな目にあつた人々はすこぶる多く、積る不平は實に大なるものであつた。久しい疲弊の後に始めて世に出た公卿は中興の業はたゞ自分等の功と思つた爲、自然に心が驕つて勢力ある武士を侮つたから、兩者の間には次第に反目を起した。北條氏の壓制と弊政とを厭うてこれを倒し、私怨を晴らさうとし、かつ王師に従つて立身出世をほしいまゝにしようとした多くの武士は、皆案に相違して、中興の政を喜ばない。かゝる折に、世情にくらい朝廷は大内裏造營の大工事を起されたので、民は益々誅求に苦しみ、「あはれいかなる不思議も出来て、武家が四海の權を執る世の中に復なれかし。」と思ふ者のみ多くなつた。その頃二條河原に書かれた落首の始に、

此頃都にはやる物

夜討、強盜、謀論旨(論旨は勅旨を)
書いた文書

召人、早馬、虚騒動
生頸、還俗、自由出家(還俗は出家が俗にかへる事)
俄大名、迷者
安堵、恩賞、虚軍
本領離る、訴訟人
文書入れたる細葛
追従、讒人、禪律僧
下尅上する成出者(下尅上とは身分の低い者が目上の者を凌ぎ勝つ事)
器用の堪否沙汰もなく
もるゝ人なき決断所
着つけぬ冠、上のきぬ
持ちもならはぬ笏持つて
内裏まじはり珍らしや(下略)。

その昔、源義家の孫に義重・義康の兄弟があつて、義重は上野の新田(群馬)に居つた爲新田氏と言ひ、義康は下野の足利(栃木)に居つたから足利氏と稱した。足利氏は代々北條氏と婚を結んだ爲、威勢もあり、世の望も高かつた。これに反して、新田氏は足利氏よりは嫡流であるけれども、義重が頼朝に惡まれたので、鎌倉時代には全く日蔭者であつた。さて足利氏にはやがて我が家から天下を取る者が出るこの言傳があつた。尊氏は度量がひろく學問

もあり世の大勢に通じ、家の傳を實現させようと思つて、早くから北條氏に代る機會を窺つてゐた。その弟直義は更に細心で謀略に富み、よく兄を扶けた。尊氏が北條氏に反して義兵をあけたのも、全く武家の棟梁になつて、北條氏の後に將軍ならうと思つた爲であつた。しかし護良親王が征夷大將軍として諸將を率ゐてゐられるので、尊氏は親王を忌み奉り、陰かに除き奉らうとした。親王もまた尊氏に叛心があるのを察せられ、早く誅しようと思はれたが中々むづかしい。尊氏は門地を言ひ、勢力を言ひ、一頭地を抜いてゐる故、これを除き給ふ事が容易でなかつた。尊氏は人物はすぐれてゐるが、野心が内に燃えてゐる。中興の政に不平を懐いてゐる諸將に私恩を施して、武士の心を集めたので、多くの將士が尊氏の命を奉ずるやうになつた。護良親王は遂に諸國の兵を徴し、彼れを除かうと思はれた時、尊氏は奏して、親王が叛を謀り給ふに讒言申し上げた。天皇はやむを得ず建武元年十月親王を鎌倉に下して、東光寺に幽せられた。新田・楠木の諸氏がこれをお救ひ申す事のできなかつたのは、いかに尊氏の勢力の大であつたか、推して知られるではないか。

建武二年七月北條高時の遺子時行が再起をはかり兵を起して、急に鎌倉を襲うた。直義は拒ぐことができないで西に走つて逃げた。これを中先代の亂と言ふ。先代は足利氏から北條氏を見て名づけた名稱である。中代は鎌倉幕府に足利氏の鎌倉管領(第三十五)の間で暫らく鎌倉を占領したから中と言ふのである。その時直義は時行が親王を奉ぜん事を恐れて、淵邊義博をして弑せしめ奉つた。親王は中興の新政に大功を立て給うて公家側の棟梁であらせられたが、公家と武家の勢力争の犠牲になられて、畏くも逆臣の手に身まかられた。御年二十八であつた。實に御痛はしさの限りである。今日その御最期の地に親王の靈を奉祀せられてある。官幣中社鎌倉宮がそれである。

尊氏は自ら時行を討たんことを請うて許された。更に征夷大將軍ならんことを願つた。こゝに到つて彼れはその本音を吐いたのである。朝廷は勿論その異志を知られたのでこれを許されず、たゞ征東將軍だを許されたので、不平ながら鎌倉に下つて時行を破り、鎌倉に入つて京都に歸らず、自分に従ふものには勝手に奥羽や東國で領地を與へ、その爲に新田氏

の所領を奪つたりした。遂に新田義貞を除くことを名こして鎌倉に兵をあげた。

尊氏は既に叛した。かつや護良親王を害し奉つた無道の者である。天皇は詔して尊氏直義の官位を奪ひ、尊良親王を上將軍とし、新田義貞に命じ親王を奉じて西より尊氏を討ち、同時に陸奥の北畠顯家をして北方より尊氏を討伐せしめられた。然るに此の時、幕府の再興を望んでゐる武士は多く尊氏の私恩に感激してその部下に屬し、尊氏の軍勢はすこぶる盛んであつた。足柄箱根の戦に官軍は利なく、義貞は口惜しくも敗れて京都に歸つたから、尊氏・直義は大兵を率る後を追うて西上した。赤松則村はかねて恩賞の少いのがすこぶる不平であつたから、此の時尊氏に應じ、相共に延元元年(一九九六年)正月尊氏が京都に攻入つたので、天皇は神器を奉じて叡山に行幸せられた。その中に顯家は義良親王を奉じて陸奥を發し、尊氏を追うて西上し、楠木・名和の諸將と共に義貞を助けて尊氏の軍を破り、京師を回復したから、尊氏は敗れて海路九州へ走つた。そこで天皇は再び叡山より還幸せられたが、建武中興の業はこゝに破れて戦争はこれよりまた相つゞき、天下は亂麻のやうになつたのである。

宮方の武士うつくしや年忘れ。

召波

第三十四 吉野の朝廷

延元元年春正月尊氏が九州に走つた時、菊池武時の子武敏は父の志をついで、尊氏に屬してゐる少貳貞經を誅し、大いに勢を得て、更に尊氏の軍に筑前の多々良濱(福岡)に戦つたが、不幸にして敗北したので、九州は忽ち風を望んで尊氏に應じたから、かくて尊氏は大舉東上の準備にかゝつた。その頃義貞は勅命を奉じて中國の賊軍を討たうとして、先づ赤松則村を播磨の白旗城(兵庫)に圍んでゐた。

延元元年四月尊氏は水軍七千餘艘を率る、直義は陸兵二十萬に將こして、海陸兩道を並び進んで來た。義貞は白旗の圍を解いて兵庫に退き、急を朝廷に奏した。朝廷は大いに驚き給ひ、楠木正成に詔して義貞を援けさせられた。此の時、正成は奏して「賊の勢は甚だ鋭うございますから、疲れた味方の小勢で尋常の合戦を致しますれば、必定味方は負けると思

はれます。されば新田殿を唯京都へ呼還され、前の如く叡山へ臨幸遊ばされ、正成は河内へ罷り下つて糧道を塞ぎますれば、敵も次第に困りませう。その時兩方から攻撃しますれば、朝敵は一戦に亡ぼせると思ひます。新田殿も定めて此の料簡でございませう。三申し上げたが、參議藤原清忠がさへぎつたので、此の計も行はれなかつた。正成は力なく御殿を退出して西下した。その途に攝津の櫻井驛で、嫡子正行を河内へ返すまで庭訓を残したのは一獅子は子を産んで三日を経るに、數千丈の石壁よりその子を投げる。その子に獅子の氣分があれば、教へないけれども宙から跳返つて死な、いふ事があるぞ。況んやお前はもう十歳を越してゐる。一言耳に留まつたならば、我が教訓に違ふなよ。今度の合戦は天下の安危のかゝる處と思ふ故、今生でお前の顔を見ることも此れが限りであらう。正成が討死したに聞えたら、天下は必ず尊氏の代に成るであらうが、一旦の身命を助かりたい爲に多年の忠烈を失つて、降人に出るやうな事があつてはならぬ。一族若黨が一人でも死残つて居る間は金剛山の邊に引籠つて、敵が寄せて來たら、命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠に比べよ。是れ

こそお前の第一の孝行であるぞ。三泣く、言合めて郷里へ返した。

正成はやがて兵庫に進み義貞を慰め、部下七百で湊川に陣を取つて直義に對し、義貞は二萬五千騎を率ゐて和田崎に屯し、尊氏の上陸を防がうとした。五月二十五日尊氏の兵船は須磨の沖を狭しきばかり押寄せた。直義も山陽道を雲霞の如く寄せかけた。海上軍の先鋒細川定禪が先廻して義貞の軍より東へ上陸を始め、義貞の軍が京都へ退却する路を斷たうとしたため、義貞の兵は早くも敗北して退却を始めたので、尊氏はやす／＼上陸したから、正成は前にも後にも敵をうけるこゝになつた。正成はわざ／＼他の勢を交へず、手勢ばかりで直義の陣に突撃し、大勢の中へかけ入り東より西へ破つて通り、北より南へ追靡け、ひこへに直義に近附き、組んで討たう志したが衆寡敵せず、凡そ六時間の戦に血戦十六合、次第々々に軍兵を失つて残るは僅かに七十三騎になつた。正成もすでに多くの斬創を負つた。こゝでも此れでは駄目と思つて、こゝある民家に入り、一族手の者皆一度に腹を切つて失せた。その時正成は弟の正季に向つて「何か最後の願はないか。」と問ふに、正季はから／＼

「笑ひながら、「七生まで同じ人間に生れて朝敵を亡ぼしたいと思ひます。」と言つたので、正成は世にも嬉しき氣色にて、「我もさやうに思ふぞ。」と兄弟共に刺違へて死んだ。正成は時に四十三。明治の世にその忠烈を賞せられて正一位を追贈せられ、別格官幣社港川神社に祀られた。元來楠木氏はよい身分の武士でなかつたが、學問はかなり深かつたらしい。天下の武士に先だつて義兵をあげ、一生を勤王の爲に捧げ、その上、庭訓を遺して一族が亡びるまで、忠義の爲に盡させた純忠無二の人であつた。後の尊王思想は正成を模範として發達したもので、永久に日本人の忠勇義烈の手本と仰がれ、楠公と崇められるのも至當である。

野矢常方

君がため散れぬ教へて己れ先づ嵐に向ふ櫻井の里。

そこで天皇は神器を奉じて再び叡山の延曆寺に行幸せられ、尊氏の兵は容易に京都にはいつた。九州へ下つてから四箇月目である。その後義貞は六條忠顯・名和長年等の勤王の諸將と共にしばしば尊氏・直義と京都に戦つたが、官軍は遂に利なく、忠顯・長年は相ついで戦

死してしまつた。今日長年は伯耆御來屋町の別格官幣社名和神社に祀られてある。始め近江は官軍に屬したので、叡山は糧食に苦しまなかつたが、後には近江も賊の手に落ちたので、十月頃には叡山は次第に糧食に乏しくなつて來た。

初め尊氏は賊の名を避けんが爲に、光嚴院の院宣を請うたが、その京都に入るや、院の御弟・豊仁親王を擁立して天皇と稱した。これを光明院と申し上げる。十月尊氏は使を叡山の行在へ遣はし、偽り降つて天皇の還幸を奏請したが、此の時叡山では官軍の勢が甚だ振はなかつたので、天皇はかりにこれを容し給ひ、特に義貞に勅して皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じて北國に赴き再舉を圖らせられ、その月十日に京都に還幸せられた。尊氏は天皇を花山院に幽し奉り、供奉の公卿以下の官位を奪ひ、やがて皇位を光明院に譲り、神器を傳へ給はらん事を請ひ奉つた。天皇はやむを得ず、模造の鏡・劔・璽を授けられ、十二月二十一日の夜に紛れて、宮を遁れ給ひ、眞の神器を奉じて吉野に潜幸せられ、その地に行宮を定められた。楠木正行はその一族の和田・恩地等を率ゐて馳せ参り、吉野の大衆と共に

警衛し奉つた。これより世に吉野の朝廷を南朝と云ひ、尊氏の擁立した京都の朝廷を北朝と申すのである。

轍出す南はせかず和田恩地。

來山

新田義貞は勅命を畏んで、東宮恒良親王及び皇子尊良親王を奉じ、七千餘騎を従へて北國へ向つた。まだ十月の初であつたが、北國の習ひにて、峰々には雪が降り籠には時雨のやむ時がない。越前若狭の境にある木芽峠(福井)を越える時は、殊に寒さが烈しくて、深山嵐に紛れて降る雪は顔をうち、甲冑に注ぎ、肌を流れた。火なく宿なく、多くの士卒が凍死したのであつた。その上、伊豫の河野・土居・得能の一族は逆に迷ひ、近江の鹽津の北に下り、敵に圍まれたが、寒さの爲に弓もひけず太刀のつかも握れなかつたので、刀を地に立て、うつぶしに貫ぬかれて死んだ。義貞はかく難儀を嘗めて漸く越前の金崎城(敦賀)に入るこゝが出来たので、先づ長子義顯・弟義助を四方へ派遣して勤王の兵を募らせた。かくて敵將斯波高經を破つて一時は勢を得たが、翌延元二年高經が大軍を催して金崎城を圍んだ時

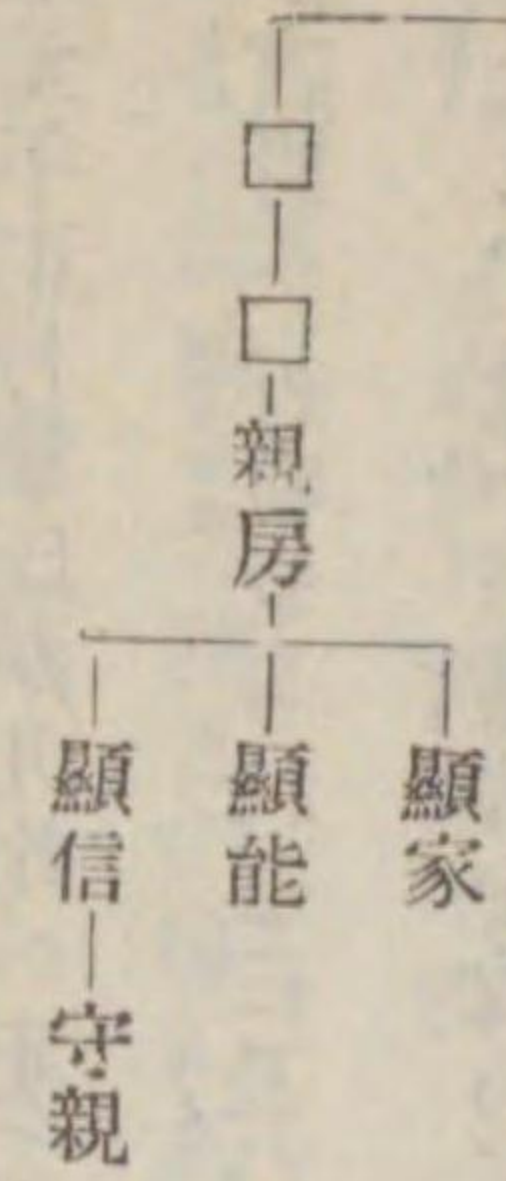
は、味方は小勢でかつ糧も乏しかつたので、義貞は密かに弟と共に城を去つて同山山城に赴き、救援軍を催したが、それも容易くはかざらぬ間に、金崎城は遂に陥り、尊良親王は自殺し給ひ、義顯以下これに殉じた。皇太子及び成良親王は山に赴き給ふ道で、賊に捕へられ給ひ、やがて京都へ護送せられ給うた。かくて後醍醐天皇の御謀も一頓挫してしまつたのである。翌三年四月尊氏は毒薬を進めて、恒良親王及び成良親王を弑し參らせた。

延元元年正月尊氏が九州へ走つてから北畠顯家は奥羽へ歸り、靈山城(福島)に據つたが、天皇が吉野へ行幸せられるに及び、延元二年(一九九七年)八月再び義良親王を奉じて奥州から西上し、途中で鎌倉を攻めて尊氏の子義詮を破り、進んで近畿に入り京都を回復しようとした。しかし兵が少く且つ長途の進軍に疲勞をしてゐたので、美濃の青野原(岐阜)に北軍と戦つて利がなく、義良親王は吉野におはいりになつた。翌三年三月顯家は河内(大阪)に出で、その弟顯信は山城の男山に陣をこつた。賊將高師直は一手の兵にこれを圍ませ、自分顯家を攻めた。五月顯家は師直の軍と和泉の堺(大阪)に戦つて大敗し、終に石津に戦死し

た。時に歳二十一。顯家は青年の身で二度まで奥州から西上し、大いに賊をなやましたのであるが、惜しいかな、此の時戦死したのは朝廷の大損失であつた。後醍醐天皇はその勳功を追賞せられて従一位右大臣を贈られた。大阪市にある別格官幣社阿部野神社には父親房と共

北畠氏系圖

村上天皇—具平親王—源師房………北畠雅家—



に合祀せられ、岩代の別格官幣社靈山神社には親房・弟顯信並びにその子の守親と共に合祀せられてある。

その頃義貞は柏山城にゐた。義兵を

あけてしばし、斯波高経と戦ひ、これを破つて再び勢を振うて來た。天皇はこれを聞き召し、義貞に詔して、男山の顯信を援けさせられた。義貞は乃ちその弟脇屋義助に命じて援けに行かせたが、まだ到らぬ中に男山は陥つて、顯信は河内へ走つたので、義助は引返し、義貞に力を添へて、高経とまた戦つた。同年閏七月二日義貞は兵を分けて藤島(福井市)に高経を攻めた。中々敵の寨が堅くて、官軍はやゝもすれば追立てられる様子である。義貞は

これを見て、安からぬ事に思ひ、自ら五十騎を率ゐて路を變へて助けに向つた。途で三百騎の敵兵に遇つた。矢の下るこゝが雨のやうであつたが、義貞の方には一挺の楯もないので、前の兵が義貞の矢面に立塞がつて、たゞ的になつてゐた。従士は義貞に脱れん事を勧めたが、聞もあへず、「士を失うて獨り免れるのは我が志ではない。」と言つて尙馬に鞭をあて、進まうとしたが、馬は矢を五筋もうけて斃れてしまつた。義貞が起上らうとする所へ白羽の矢が一筋、眞向のはづれ、眉間の眞中へ立つた。急所の痛手で今はこても叶はぬと思ひ、自ら首を刎ねて死んだ。時に年三十八。義貞は尊氏に對して最も強敵であつたので、南朝の諸將は義貞を總大將とも仰いでゐたのに、さしもなき戰場に赴いて命を落した事は、運の極みこは言ひながら、官軍の大損失であつた。その子孫一族は義貞の志をついで、楠木・北畠・菊池の諸氏と共に、一意義勇奉公を盡して永く變らず、千載の末までその芳名を傳へた。義貞は明治の世に正一位を贈られ、越前の別格官幣社藤島神社(福井)に祀られた。

かへり來ぬ越路の雁ぞあはれなる吉野の春のはなも見ずして。

さきに正成・長年が戦死し、今また顯家・義貞が引續き戦死して、官軍の勢が衰へたので、天皇は同延元三年八月北畠顯信を鎮守府將軍とし、皇太子義良親王を奉じて海路奥州へ下り、官軍の勢力を回復せしめられ、父親房、結城宗廣も從ひ下つた。同時に宗良親王も出發して東海道へ赴かれた。御船は伊勢の大湊(三重)を發して程なく遠州灘にかゝつたが、海風が俄に吹きあれて、逆浪が天を卷翻すばかりであつた。義良親王・顯信・宗廣の船は伊勢に吹戻され、宗良親王は遠江に着かれ、親房は常陸に着いた。

かく南風が競はない時に延元四年八月の初より、後醍醐天皇は御病にかゝらせられたが、次第に重らせ給ひ、十五日に義良親王を左大臣の屋敷に移し奉られて、三種の神器をお傳へになつた。最後に朝敵を亡ぼして京都を回復すべきことを仰せおかれ、御劍・法華經を左有の御手に持たせて、十六夜の月と共に、遂にお崩れなされた。附從ひ奉る人々は唯園路に迷ふ心地がするばかりであつた。あゝ前に吉野川を帶にし、左右に深い谷を控へ、花に埋め

らるゝ吉野は哀愁みなぎる悲劇の場であつた。護良親王が城を構へられてより此の方、南朝の根據地となつたが、決して吉野は花の都ではなかつた。天皇が御座あつた吉水の行宮は今日吉水神社に祀られて、今も尙玉座の間と言ふのが残つてゐる。かつて天皇は次の御製を遊ばした。

花にねてよしやよしの吉水の枕の下に石ばしる音。

各務支考は哀愁に満ちた吉野山の趣を、

歌書よりも軍書にかなし吉野山。

こ歌つた。藤井竹外は、

古陵松柏吼天颯 山寺尋春春寂寥

肩雪老僧時輟帚 落花深處説三南朝

こ吟じ、梁川星巖は、

今來古往事 茫茫 石馬無聲杯土荒